広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第162集

中屋遺跡Ｂ地点発掘調査報告 Ⅰ

1998

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

中屋遺跡Ｂ地点発掘調査報告 Ⅰ

1998

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

1993 年度調査区航空写真

巻頭図版 2

a　SX１遺物出土状況（北西から）

b　同上（南西から）

a　SK 1 遺物出土状況（南西から）

b　SK 2 遺物出土状況（北西から）

巻頭図版 4

a　土製品類（左・SX1，中・SK2，右・SK3）

b　主な土器類

例　　言

1．本書は，1993(平成5)年度から1996(平成8)年度にかけて実施した，団体営圃場整備事業（中屋地区）に伴う，中屋遺跡B地点の1993年度と1996年度の一部に係る発掘調査報告書である。
2．発掘調査は，豊栄町との委託契約により，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3．発掘調査は次の職員が担当した。
　1993(平成5)年度……田邉展久（現，東広島市立志和中学校），東　浩司，山澤直樹（現，因島市立三庄中学校）
　1996(平成8)年度……岡野将士（現，県立府中高等学校），河村靖宏，山澤直樹，山田繁樹，銀治益生
4．出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影は山澤，河村が行った。
5．本書の執筆は，I，IIとIVの一部を河村，IVを山澤，III，V，VIを三枝健二が行い，三枝が編集した。
6．本書で使用する遺構の表示記号は，竪穴住居跡・掘立柱建物跡をSB，土壙をSK，性格不明の遺構をSXとする。
7．遺物の縮尺は，原則として土器を1/3，石器を2/3とした。
8．図版と挿図の遺物番号は同一である。
9．本書に使用した方位は，第1・2図を除きすべて磁北である。
10．第1図は，国土地理院発行の1：25,000の地形図（乃美，下徳良，敷名，備後小国）を使用した。
11．本遺跡の石器石材の鑑定は，主に考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼観察による。

目　　次

Ⅰ はじめに …… 1

Ⅱ 位置と環境 …… 2

Ⅲ 調査の概要 …… 8

Ⅳ 遺構の概要 …… 10

Ⅴ 遺物の概要 …… 29

Ⅵ まとめ …… 95

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図（１：50,000）…… 3
第２図　安宿地区遺跡分布図（１：20,000）…… 5
第３図　調査区配置図（１：3,000）…… 8
第４図　遺構配置図（１：300）…… 折込み
第５図　ＳＢ１実測図（１：60）…… 11
第６図　ＳＢ２・３実測図（１：60）…… 12
第７図　ＳＢ４・５実測図（１：60）…… 13
第８図　ＳＢ６実測図（１：60）…… 14
第９図　ＳＢ７・８実測図（１：60）…… 15
第10図　ＳＢ９・10・15実測図（１：60）…… 17
第11図　ＳＢ11実測図（１：60）…… 18
第12図　ＳＢ12・13実測図（１：60）…… 19
第13図　ＳＢ14・16実測図（１：60）…… 21
第14図　ＳＢ17～20実測図（１：60）…… 23
第15図　ＳＫ１・２実測図（１：20）…… 25
第16図　ＳＫ３実測図（１：20）…… 26
第17図　ＳＸ１実測図（１：60）…… 27
第18図　出土遺物実測図（1）（１：3）…… 47
第19図　出土遺物実測図（2）（１：3）…… 48
第20図　出土遺物実測図（3）（１：3）…… 49
第21図　出土遺物実測図（4）（１：3）…… 50
第22図　出土遺物実測図（5）（１：3）…… 51
第23図　出土遺物実測図（6）（１：3）…… 52
第24図　出土遺物実測図（7）（１：3）…… 53
第25図　出土遺物実測図（8）（１：3）…… 54
第26図　出土遺物実測図（9）（１：3）…… 55
第27図　出土遺物実測図（10）（１：3）…… 56
第28図　出土遺物実測図（11）（１：3）…… 57
第29図　出土遺物実測図（12）（１：3）…… 58
第30図　出土遺物実測図（13）（１：3）…… 59
第31図　出土遺物実測図（14）（１：3）…… 60
第32図　出土遺物実測図（15）（１：3）…… 61

第 33 図　出土遺物実測図（16）（1：3）…… 62
第 34 図　出土遺物実測図（17）（1：3）…… 63
第 35 図　出土遺物実測図（18）（1：3）…… 64
第 36 図　出土遺物実測図（19）（1：3）…… 65
第 37 図　出土遺物実測図（20）（1：3）…… 66
第 38 図　出土遺物実測図（21）（1：3）…… 67
第 39 図　出土遺物実測図（22）（1：3）…… 68
第 40 図　出土遺物実測図（23）（1：3）…… 69
第 41 図　出土遺物実測図（24）（1：3）…… 70
第 42 図　出土遺物実測図（25）（1：3）…… 71
第 43 図　出土遺物実測図（26）（1：3）…… 72
第 44 図　出土遺物実測図（27）（1：3）…… 73
第 45 図　出土遺物実測図（28）（1：3）…… 74
第 46 図　出土遺物実測図（29）（1：3）…… 75
第 47 図　出土遺物実測図（30）（1：3）…… 76
第 48 図　出土遺物実測図（31）（2：3）…… 77
第 49 図　出土遺物実測図（32）（2：3）…… 78
第 50 図　出土遺物実測図（33）（2：3）…… 79
第 51 図　出土遺物実測図（34）（2：3）…… 80
第 52 図　杯部と脚・脚台部の分類 …… 99

図　版　目　次

巻頭図版1　1993年度調査区航空写真
巻頭図版2 a　SX1遺物出土状況（北西から）
　　b　同　上　（南西から）
巻頭図版3 a　SK1遺物出土状況（南西から）
　　b　SK2遺物出土状況（北西から）
巻頭図版4 a　土製品類（左・SX1，中・SK2，右・SK3）
　　b　主な土器類

図版1 a　調査区遠景　（北東から）
　　b　調査区近景　（南西から）
　　c　調査区近景　（北東から）
図版2 a　1993年度調査区航空写真
　　b　I－15～16区付近検出状況
　　（北西から）
　　c　SB14周辺　（北西から）
図版3 a　SB1・2完掘状況　（北東から）
　　b　SB3完掘状況　（西から）
　　c　SB4・5周辺遺構配置状況
　　（北東から）
図版4 a　SB6～9周辺遺構配置状況
　　（西から）
　　b　同上完掘状況　（西から）
　　c　SB6完掘状況　（南西から）
図版5 a　SB7・8完掘状況　（南西から）
　　b　SB9検出状況　（北西から）
　　c　同上掘下げ状況　（南西から）
図版6 a　SB9完掘状況　（北東から）
　　b　SB10・15完掘状況（北東から）
　　c　SB11検出状況　（北東から）
図版7 a　SB11完掘状況　（北東から）
　　b　SB12遺物出土状況（南東から）
　　c　同上土層断面　（北東から）
図版8 a　SB12遺物出土状況（東南から）
　　b　同上完掘状況　（東南から）
　　c　SB13完掘状況　（北東から）
図版9 a　SB14完掘状況　（北西から）
　　b　同　上　（北東から）
　　c　SB16完掘状況　（南西から）
図版10 a　SB17完掘状況　（北西から）
　　b　SB18完掘状況　（北東から）
　　c　SB19完掘状況　（北東から）
図版11 a　SB20完掘状況　（西から）
　　b　SK1遺物出土状況（南西から）
　　c　同上完掘状況　（北東から）
図版12 a　SK2遺物出土状況（北西から）
　　b　同上完掘状況　（北西から）
　　c　SK3配置状況　（北東から）
図版13 a　SK3検出状況　（北東から）
　　b　同上遺物出土状況（北東から）
　　c　同上完掘状況　（北東から）
図版14 a　SX1遺物出土状況（北西から）
　　b　同　上　（南西から）
図版15 a　SX1掘下げ状況　（西から）
　　b　同上完掘状況　（南西から）
　　c　SB8－P1遺物（№15）出土状況

図版16a　SB11—P1遺物(№26)出土状況
b　P5遺物出土状況
c　SB9炉跡断面　(北東から)
図版17　出土遺物1（土器類）
図版18　出土遺物2（土器類）
図版19　出土遺物3（土器類）
図版20　出土遺物4（土器類）
図版21　出土遺物5（土器類）
図版22　出土遺物6（土器類）
図版23　出土遺物7（土器類）
図版24　出土遺物8（土器類）
図版25　出土遺物9（土器類）
図版26　出土遺物10（土器類）
図版27　出土遺物11（土器類）
図版28　出土遺物12（土器類）
図版29　出土遺物13（土器類）
図版30　出土遺物14（土器類）
図版31　出土遺物15（土器類）
図版32　出土遺物16（土器類）
図版33　出土遺物17（土器類）
図版34　出土遺物18（土器類）
図版35　出土遺物19（土器類）
図版36　出土遺物20（土器類）
図版37　出土遺物21（土器類）
図版38　出土遺物22（土器類）
図版39　出土遺物23（土器類）
図版40　出土遺物24（土器類）
図版41　出土遺物25（土器類）
図版42　出土遺物26（土器類）
図版43　出土遺物27（土器類）
図版44　出土遺物28（土器類）
図版45　出土遺物29（土器類）
図版46　出土遺物30（土器類）
図版47　出土遺物31（土器類）
図版48　出土遺物32（土器類）
図版49　出土遺物33（石器類）
図版50　出土遺物34（石器類）
図版51　出土遺物35（土器類部分写真）

表　目　次

第1表　SK1，SK2，SX1の出土土器構成表……46
第2表　SX1出土土器の器種別構成表……46
第3表　出土土器類観察表……81
第4表　出土石器類観察表……94

Ⅰ はじめに

中屋遺跡は，賀茂郡豊栄町大字安宿（あすか）に所在する。本遺跡は，団体営圃場整備事業（中屋地区）に伴い発掘調査を実施した。

この事業は，豊栄町が1989（平成元）年に策定した「豊栄町新長期総合計画」に位置付けられており，農業基盤の整備による農産物の供給力の向上や，生産性の高い農業経営を推進することを目的としている。中屋地区においては，小面積の山間棚田や排水溝を整備改善し，農業経営の集団化や優良農地の確保等，農家の育成を行うため，1991年度から事業面積24haについてほ場整備を実施している。

1990年4月，豊栄町から広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に開発計画地内の文化財等の有無及び取扱いについての協議があった。これを受けて県教委は，開発計画地内を踏査した結果，1991年2月，遺跡の有無の確認が必要な場所が2か所ある旨を豊栄町に回答した。その後，豊栄町教育委員会（以下「町教委」という。）は試掘調査を行い，中屋遺跡A，B，C地点を確認した。

この遺跡の取扱いについて，町教委は豊栄町農林振興課と協議したが，その一部について現状保存が困難であるため，事前に発掘調査を行うこととなり，豊栄町は1992年11月，文化庁へ土木工事の通知を行った。また，発掘調査にあたっては，調査面積が広く，町教委だけでは発掘調査の実施が困難であるため，県教委とも協議の結果，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）と分担して行うこととなった。センターは，次のように4年次に分けて発掘調査を行った。なお，報告については第1年次と4年次の一部を今回，それ以外を来年度に分けて行う。

	調査期間	面積	報告の区分
第1年次	1993年 7月12日～12月 2日	2,000㎡	1997年度報告
第2年次	1994年 5月30日～10月17日	2,000㎡	1998年度報告
第3年次	1995年 6月19日～10月13日	1,500㎡	1998年度報告
第4年次	1996年 5月20日～10月 4日	2,050㎡	1997・98年度に分けて報告

発掘調査にあたっては，豊栄町農林振興課，豊栄町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。また，報告書の作成にあたっては，愛媛大学　下條信行，財団法人大阪府文化財調査研究センター　藤田憲司，鳥取県立博物館　田中弘道，廿日市西高等学校　加藤光臣，東広島市教育委員会　妹尾周三の各氏に御教示をいただいた。厚く感謝の意を表したい。

II 位置と環境

豊栄町は広島県のほぼ中央部で，北側の三次市から約 40 km，また南側の東広島市から約 25 km の位置にある。町域は地形的には「吉備高原面」の一部である「世羅台地」と呼ばれる標高約 400～600 m の高原面の西端に位置する[1]。周辺部には，標高 600 m 前後の山々が連なっており，町域面積の約 7 割を森林が占めている。また，地質的には花崗岩類が広く分布しており，一部に流紋岩・安山岩類などの露頭がみられる。

水系別にみると，複雑な状況を示している。中屋遺跡の所在する安宿地域を含めた町の南半部は，沼田川の支流である椋梨川の上流部分にあたる。一方，町の西端部の別府周辺は，太田川の支流である三篠川の源流となっている。また飯田・吉原など，町の北辺部は江の川の支流である美波羅川の上流部となっている。三篠川，美波羅川とも町の西部で椋梨川上流部と分水嶺を形成しており，当地域の歴史的な発展に様々な影響を与えていったものと考えられる。

中屋遺跡は，町域の南西部にあたる板鍋山（標高 757 m）の北西側に連なる観音平山（標高 562 m）の北東斜面裾に派生する緩斜面上の標高 365～375 m 付近に立地し，A～C の 3 地点に分かれている。今回調査対象となった B 地点は，この緩斜面上に存在する低い尾根筋の一つで，安宿地区を東に流れる椋梨川からは南に約 300 m 離れている。遺跡の前面に広がる盆地状の地形に比較的広い沖積地が展開しており，遺跡付近が安定した生活面であったことがうかがわれる。

以下，周辺地域の遺跡を中心に，時代を追って概観する。

旧石器時代

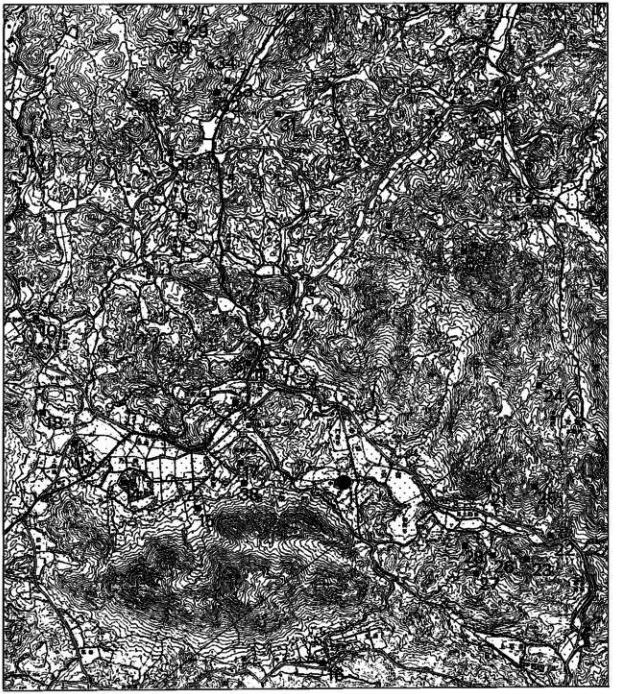
町内では現在のところこの時代の遺跡は確認されていない。周辺部では美波羅川下流域の三次市寺側古墳[2]，馬洗川水系上流の吉舎町徳市遺跡[3]などで後期旧石器時代の石器類が報告されている。また，世羅台地の遺跡として，芦田川水系の支流の最上流部で調査された久井町筋原垣内遺跡[4]があげられる。ここでは流紋岩などの非安山岩類を使った石器が出土しており，当町域と同様に複雑な水系のなかに位置することから，世羅台地における後期旧石器文化の展開がうかがわれる。

縄文時代

発掘調査された遺跡はないが，安宿地区の内匠遺跡から後期の土器が，また，吉原地区の魚ケ池遺跡では磨製石斧 2 点が出土している。

弥生時代

前期の遺跡は確認されていないが，中期後半以降，遺跡数が急増する傾向にある。また遺跡立地では，中屋遺跡などのように沖積地を望む丘陵先端部やその縁辺部に多く認められる傾向があ



1．中屋遺跡B地点
2．天神原遺跡
3．峠田遺跡
4．岡谷遺跡
5．善正寺遺跡
6．敷地遺跡
7．天神1号遺跡
8．天神2号遺跡
9．馬場ヶ原遺跡
10．西光庵遺跡
11．城山遺跡
12．豊栄中学校遺跡
13．賀茂北高校遺跡
14．大塚谷遺跡
15．下陰地遺跡
16．能良遺跡
17．山王古墳群
18．宮ケ迫古墳
19．和田谷北（恋ケ迫第7号）古墳
20．光福寺（成重第3号）古墳
21．見土路古墳群
22．すくも塚古墳群
23．上猿山（見土路第1号）製鉄遺跡
24．木原（見土路第2号）製鉄遺跡
25．七山（見土路第3号）製鉄遺跡
26．見土路第4号製鉄遺跡
27．峰巣（見土路第5号）製鉄遺跡
28．見土路第6号製鉄遺跡
29．大懸山第1号製鉄遺跡
30．大懸山第2号製鉄遺跡
31．伊尾谷古窯跡
32．薬師第1号窯跡
33．薬師第2号窯跡
34．薬師第3号窯跡
35．河上第1号窯跡
36．河上第2号窯跡
37．河掛山窯跡
38．山王山窯跡

第1図　周辺遺跡分布図（1：50,000）

る。出土した後期の土器をみると，賀茂北高校校庭遺跡出土資料のように，多くは西条盆地周辺の特徴を示しているが，備後南部に適有な形態を示す資料も含まれ，複雑な様相がうかがわれる。安宿地区では，本遺跡をはじめ数箇所で，ほ場整備事業に伴う発掘調査が行われており，中村遺跡B地点[5]，中屋遺跡C地点[6]で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が確認されている。

この時代の墳墓遺跡としては，中屋遺跡の背後の丘陵上に所在する手島山墳墓群[7]があげられる。この遺跡では，丘陵先端部付近から2群に分かれた土壙墓，石棺墓など30基の墓壙を検出している。墓域は斜面のカットで作り出し，墳墓祭祀の痕跡や，後期末葉にあたる山陰系の供献土器が出土している。墓壙の構築順序が推定されており，弥生時代後期から古墳時代前期前葉に集落の最盛期を迎える中屋遺跡との関係が注目される。

古墳時代

現在300基近い古墳と数箇所の集落遺跡，さらに，須恵器生産の窯跡，製鉄遺跡などを確認している。

古墳は天神嶽(てんじんだけ)周辺を中心に，南部の板鍋山山麓付近にかけての南向き斜面に広く分布している。その多くは数基単位で古墳群を形成しており，南側に開口した横穴式石室を埋葬施設とするものが大半を占める。町内にある古墳の代表的なものとしては，塔ノ岡古墳，山王古墳群[8]，宮ケ迫古墳，光福寺古墳などがあげられる。

塔ノ岡古墳は，安宿地区西部が一望できる南向きの丘陵にあり，南北に主軸をとる箱式石棺を埋葬施設とする。石棺内には赤色に塗られた痕跡があり，内部から人骨1体分と直刀，鉄鏃が出土している。築造時期は，副葬品などから古墳時代前半期と考えられている。

山王古墳群は，鍛冶屋地区の山王山から派生した丘陵尾根上に分布する13基からなる古墳群で，このうち第4～6号古墳については豊栄町教育委員会が発掘調査を行っている。埋葬施設は第4号古墳が割竹形木棺，第5号古墳が3基の箱式石棺，第6号古墳が割竹形木棺・箱式石棺・土壙墓各1基で，築造時期は5世紀後半とされている。

宮ケ迫古墳は，乃美(のみ)地区の西原山東裾に広がる丘陵にある直径14m，高さ5.5mの円墳で，南側に開口する横穴式石室を埋葬施設とする。石室は無袖式で，全長9m，高さ2mであり，比較的大きな規模の古墳である。出土した須恵器から6世紀後半に位置付けられる。

光福寺古墳は，吉原地区光福寺の舌状台地にある径13m，高さ3mの円墳で，南側に開口する無袖の横穴式石室を埋葬施設とする。出土遺物としては，6世紀後半から8世紀頃までの須恵器が出土している。また，出土した須恵器については，宮ケ迫古墳とともに，町内で確認されている須恵器生産窯との関連が考えられている。

安宿地域の遺跡

本遺跡がある安宿地区に限定して古墳の分布状況を概観すると，椋梨川が形成する沖積地の南

1. 中屋遺跡B地点
2. 内匠遺跡
3. 中屋遺跡C地点
4. 中屋谷遺跡
5. 手島山墳墓群
6. 草津遺跡
7. 草木原遺跡
8. 新名遺跡
9. 龍王平遺跡
10. 安宿遺跡
11. 高宮遺跡
12. 安宿小学校前遺跡
13. 中村遺跡B地点
14. 中村谷遺跡
15. 鍛冶屋遺跡
16. 龍王平山古墳
17. 龍王平山古墳群
18. 草木原古墳
19. 草津古墳
20. 観音平古墳群
21. 長池古墳
22. 鐘撞山古墳群
23. 手折山古墳群
24. 洞口山第1号古墳
25. 洞口山第2号古墳
26. 塔ノ岡古墳
27. 古神原第3号古墳
28. 古神原第4号古墳
29. 神原古墳群
30. 神郷古墳群
31. 見土路第9号古墳
32. 見土路第10号古墳
33. 中村遺跡A地点
34. 中屋遺跡A地点
35. 中村遺跡C地点
36. 見土路遺跡
37. 門出山城跡
38. 中野山城跡
39. 吉末城跡

第2図　安宿地区遺跡分布図（1：20,000）

北にある丘陵斜面上で約80基を確認している。北側には，手折山古墳群，洞口山古墳群，塔ノ岡古墳，神原古墳群，古神原古墳群，神郷古墳群，見土路古墳群，すくも塚古墳群等があり，南側には長池古墳，観音平古墳群，草津古墳，鐘撞山古墳群，龍王平山古墳群，龍王平山古墳等がある。

草津古墳は板鍋山の北東山麓の舌状台地に位置する。埋葬施設の箱式石棺は，主軸を東西にとり，床面には全面に玉砂利が敷かれ，棺蓋には4枚の板石が用いられている。築造時期は，石棺や勾玉の形態から古墳時代前期のものと考えられている。

龍王平山古墳は，本遺跡から東方300mの小丘陵の先端部に位置する。古墳は，径が東西13.6m，南北15.5mの円墳で，墓石には石英と花崗岩の人頭大の自然石を利用している。

すくも塚古墳は，安宿地区見土路の東方，七山の最南端の小丘陵の南側斜面に位置している。正式な調査ではないが，石室状の遺構から人骨など多数の遺物が出土している。鏡は径8.6cmの小型の仿製鏡で，4体の神獣を配した平縁神獣鏡である。5字の銘文のうち「日」「月」が判読できる。

一方，古墳時代の集落跡については，中屋遺跡C地点で古墳時代前半期に集落形成が確認され

ているほか，鍛冶屋遺跡では，土師器，須恵器を包含する住居跡が確認されている。

製鉄遺跡については，安宿地区見土路を中心に数箇所が確認されている。発掘調査された遺跡は少ないが，上嶽山・木原・七山製鉄遺跡[9]では鉄滓採取資料による調査が，また，見土路第4号製鉄遺跡は，発掘調査が行われている。

上嶽山製鉄遺跡[10]は丘陵の斜面中腹に，また上嶽山から国道を挟んだ北側に位置する木原・七山製鉄遺跡は，やや緩やかな斜面上に立地している。出土した鉄滓は，共に6世紀末から7世紀初頭の砂鉄精錬滓で，西日本の砂鉄精錬盛行期のものと考えられている。

一方，見土路第4号製鉄遺跡は，古墳時代後期と推定される大規模な製鉄遺構で，炉床は山の斜面を「L」字状に削平した平坦面に，長さ約4m，幅約1.5m，高さ約1mの台状の舟底形に盛土を施して築かれている。砂鉄置き場や炭置き場等から須恵器が出土しており，5世紀末から6世紀代に比定されている。

古代以降

須恵器生産窯については，河上窯跡群，薬師窯跡群，河掛山窯跡群など，清武・飯田地区を中心に約20基が確認されており，古墳時代後期から奈良・平安時代にかけては，県内でも有数の須恵器生産地域であったことがうかがわれる。また，伊尾谷古窯跡は須恵器と古瓦を同一窯で焼成しており，県内でも稀な例である。

7世紀中頃には，『和名抄』によると当地域は豊田・登能・能美・訓芳・安宿・椹梨・土倉を郷にもつ安芸国沙田郡に属している。10世紀になると各地に荘園が広がり，「沙田郡」から「豊田郡」と改称された。豊田郡の諸郷は沼田庄に属するが，12世紀末には，当地域は沼田郷の土肥氏の治下に入る。14～16世紀にかけては諸勢力が拮抗し，吉原地区の杉城跡や瀬賀山城跡，乃美地区の茶臼山城跡など各地に大小の山城跡が築かれ，戦国期の様子がうかがわれるが，16世紀後半には小早川氏，さらに毛利氏の勢力下に入っている。

中世以降の集落跡としては，安宿地区の中屋遺跡A地点[11]で，掘立柱建物跡13棟が検出されており，土師質土器，須恵質土器，青磁や白磁などの輸入陶磁器類，国産陶磁器類等の遺物が出土している。

(註)

(1) 広島県『広島県史　地誌編』1977年
(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺園古墳』1991年
(3) 三枝健二「吉舎町徳市出土のナイフ形石器」『みよし風土記の丘』8　広島県立歴史民俗資料館　1982年
(4) 久井町教育委員会「厨原垣内遺跡」『久井町文化財調査報告書』1994年
(5) 豊栄町教育委員会『中村遺跡B・C地点発掘調査報告書』1993年
(6) 豊栄町教育委員会『中屋遺跡C地点発掘調査報告書』1996年
(7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『手島山墳墓群』1991年
(8) 豊栄町教育委員会『山王4・5・6号古墳』1994年
(9) 古代を考える会「古代製鉄遺跡採取資料に関する調査」『古代学評論』第2号　歴史科学協議会　1991年

(10) 河瀬正利「わが国古代の鉄研究をめぐって」『展望考古学』考古学研究会　1995年
(11) 豊栄町教育委員会『中屋遺跡A地点発掘調査報告書』1995年

参考文献

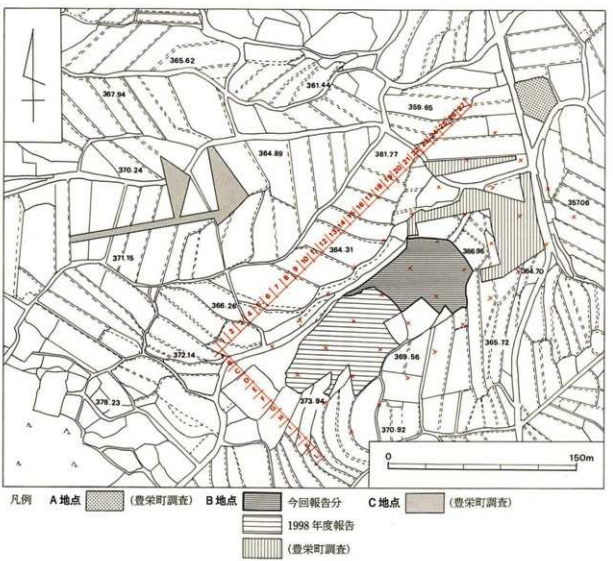
豊栄町教育委員会『広島県賀茂郡豊栄町埋蔵文化財基礎調査報告書』1972年
広島県教育委員会『広島県遺跡地図』II　1994年
広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第2集　1994年

Ⅲ 調査の概要

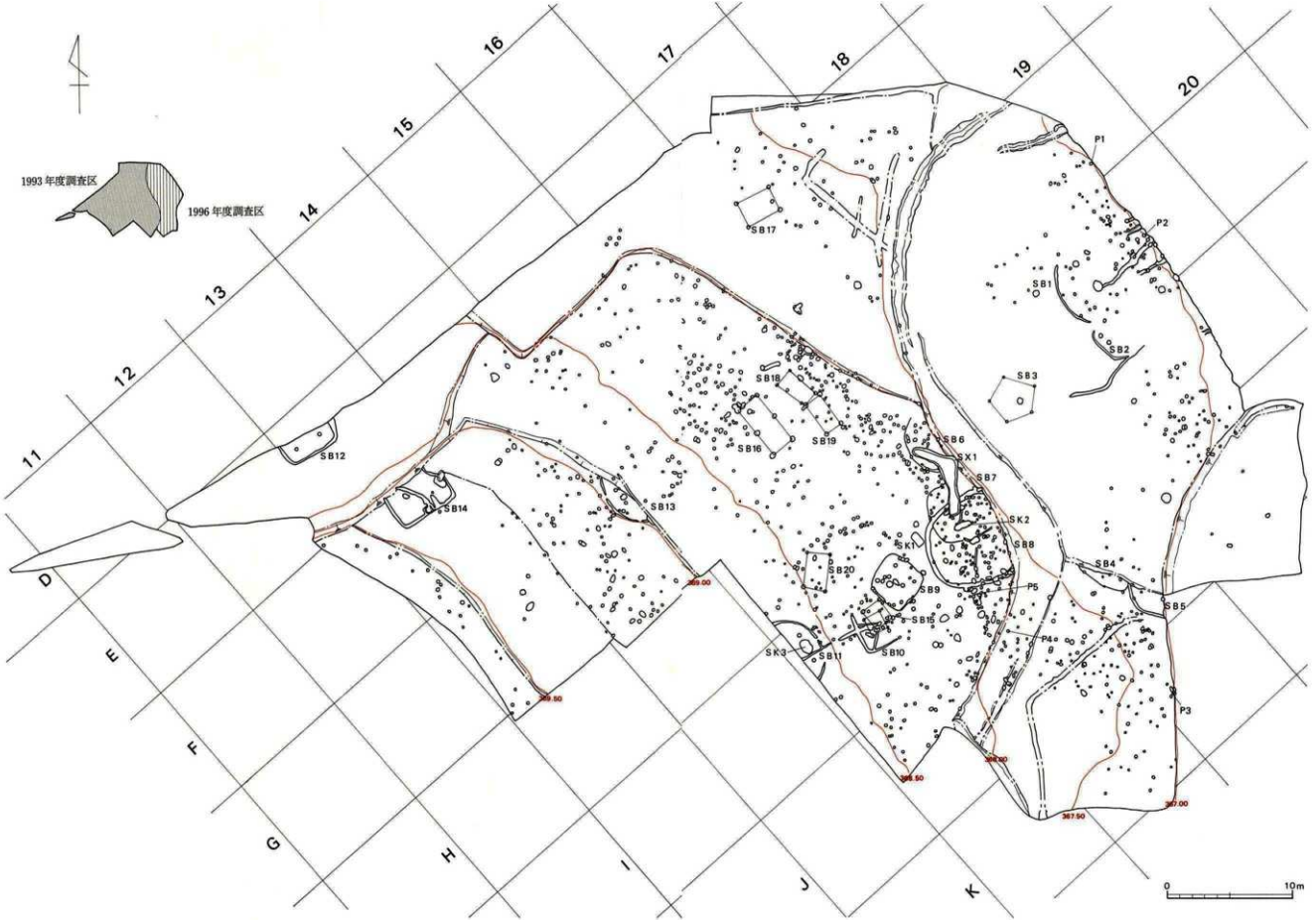
遺跡は，観音平山の北東側斜面裾部に広がる緩斜面のほぼ中央部にあたり，南西から北東方向に延びる低い尾根上を中心に所在している。周辺は当センター及び町教委により数次にわたる調査が実施され，A，B，Cの3地点に分けられている。

B地点における調査前の状況は，当地点の調査区南西端付近を除きほぼ全面が畑地などに開墾され，数面の幅の広い階段状となっていた。また，当地点の両側には，浅く緩い谷状地形が延び，水田として開墾されている。

今回の調査は，B地点のほぼ中央部分にあたり，南西側の部分は次年度に報告予定である。また，今回の調査区の北東側の部分は，町教委の調査区[1]となっている。なお，A地点（町教委）[2]



第3図 調査区配置図（1：3,000）



第4図　遺構配置図（1：300）

は，この調査区から更に道を隔てた北東側の水田部分に，C地点（町教委）[3]は，B地点の北西側の水田部分にあたる（第3図参照）。

調査の概要

調査前の状況から，畑地の開墾などによる階段状の削平が予想されたため，表土剝ぎは機械力で行った。調査区の設定にあたっては，尾根筋のラインを軸として，南西側をAからLに，北西側を1から27に区分した10m×10mの区画を全域に設け調査を行った。

その結果，D—10区からH—19区，K—16区付近にかけて広がる調査区のほぼ全域から，多数の柱穴と共に，住居跡などの遺構を検出した。これらの遺構は，山側の段に近い部分ではほとんど失われて分布も希薄となり，斜面下方部分でわずかに下部が遺存する状況であった。

検出した遺構は，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土壙，性格不明の遺構などである。削平が著しく，残存する柱穴の配置状況から住居跡などの遺構を推定することは困難であった。

遺物は，性格不明の遺構から出土した数十箱に及ぶ弥生土器を中心に，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての石器・土器類が出土した。また，各遺構の上層や調査区包含層から，それらの遺物類に混じり，古墳時代後期から近世にかけての須恵器，土師質土器，陶磁器類などの細片が出土している。

（註）

（1）1998年度報告予定
（2）豊栄町教育委員会『中屋遺跡A地点発掘調査報告書』1995年
（3）豊栄町教育委員会『中屋遺跡C地点発掘調査報告書』1996年

Ⅳ 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は，竪穴住居跡14，掘立柱建物跡6，土壙3，性格不明の遺構1と，住居跡に伴うと考えられる溝状遺構や多数の柱穴などである。

掘り込みが深いSX1を除き，多くの遺構が下部まで削平されるか，斜面側を削られており，遺存度は低い。以下，遺構別に概要を記す。

1 竪穴住居跡

SB1（第5図，図版3—a）

調査区の北東端にあたるH—18・19区付近に位置する。斜面山側にあたる南西側に，幅15～20cm，深さ2～5cm程の壁溝が弧状に残り，北東部の斜面下方側では，床面も失われていた。平面プランは，遺存部の壁溝などから直径7m程度の円形と考えられる。

床面のほぼ中央付近に，長径約90cm，短径70cm，深さ25cmの楕円形の炉跡があり，炭化物などと共に，弥生土器細片，自然礫片などが出土した。

柱穴の配置は，炉跡を中心として，壁溝とのほぼ中間付近に直径20～29cm，深さ12～30cmの柱穴を七角形に配した構造をとる。柱穴の下端中央部の間隔（以下，柱穴間という）の距離は，南西側で1.3～1.7m，北東側で2～2.4mを測り，斜面下方側で柱穴間隔が広まる傾向がある。柱穴の配置などから，2回程度の拡張が考えられる。

炉跡から北東方向に延びる溝状遺構については，炉跡と覆土での切り合いがなく，いわゆる排水溝と考えられる。周辺にも同様な溝の痕跡があり，複数の住居跡が存在した可能性がある。

SB2（第6図，図版3—a）

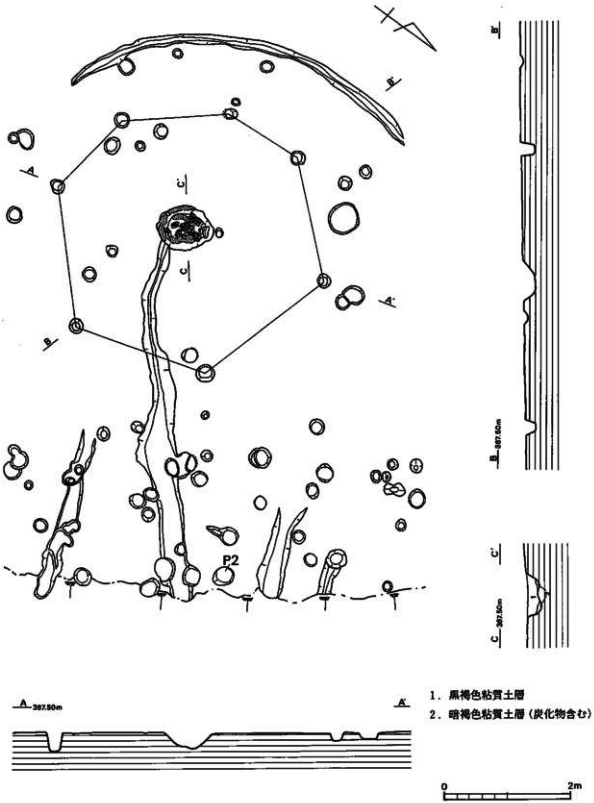
SB1の南側にあたる，H—18～I—18区にかけて位置する。SB1と同様，南西側の壁面が10cm程度遺存するのみで，壁溝は検出されなかった。平面プランは，斜面山側で等高線と平行し，これに接する両側の辺が開いていることから，多角形ないしは台形状を呈する可能性が高い。

炉跡などの施設はなく，当住居跡に伴うと考えられる直径30cm，深さ25cm程度の柱穴が4個確認されたのみで，柱穴配置については不明である。出土遺物はない。

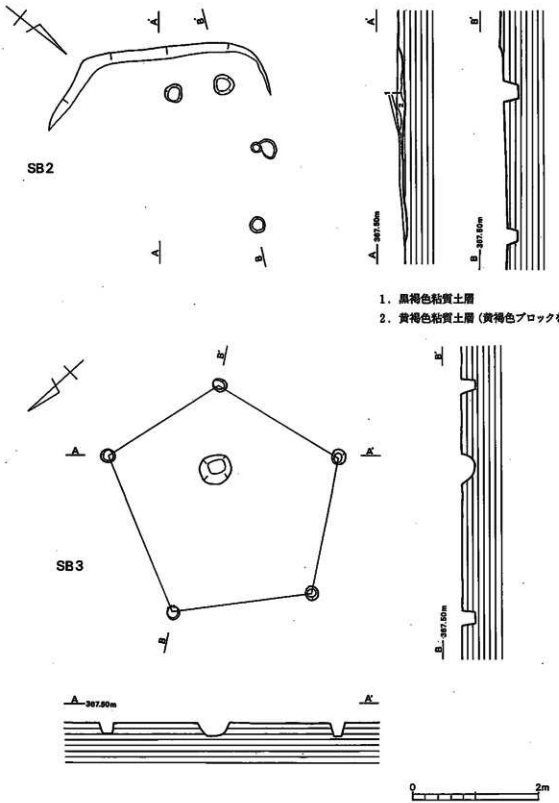
また，住居跡の南東壁から南西方向へ直線的に延び，SB3方向へ曲る溝状遺構を検出した。溝は幅約20cm，深さ10cmで，覆土が当住居と同一のため，切り合い関係は認められなかった。なお，当住居跡とSB1との平面的な切り合い関係はない。

SB3（第6図，図版3—b）

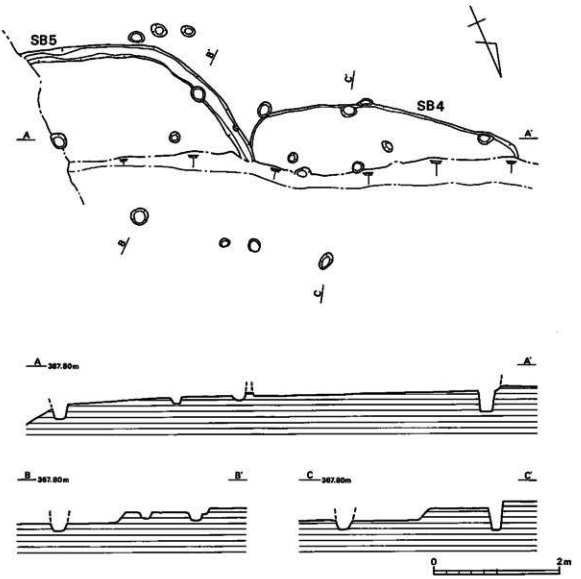
SB1・2の南西にあたるH—17区東南部付近に位置する。開墾の段の斜面山側に位置するため，炉跡と柱穴を残すのみであった。



第5図　SB1実測図（1：60）（アミ目は炭化物）



第6図　SB2・3実測図（1：60）



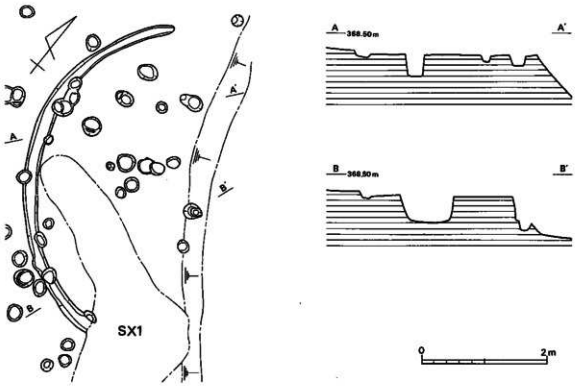
第7図　SB4・5実測図（1：60）

中央部の炉跡は，直径約50㎝，深さ22㎝の円形で，炭化物等は確認されなかった。また，柱穴は直径21～22㎝，深さ16～25㎝で，炉跡から東南側に1.2m，北西側2.3mを測る，五角形の配置となっている。出土遺物はない。

なお，SB2の東南部に接して当住居跡方向に延びる溝状遺構については，その配置状況などから，当住居跡に伴う排水溝の可能性がある。

SB4（第7図，図版3—c）

調査区東南部にあたるJ—17区崖面際に位置する。SB5と共に，東側の大半を失っており，9㎝の高さで壁面の一部を残すのみであった。平面プランは，遺存部から一辺約4mの隅丸気味の方形と考えられる。



第8図　SB6実測図（1：60）

遺存部の床面と，東側の削平部分に柱穴が分布するが，明瞭な対応関係は不明である。また，SB5と一部で接するが，明瞭な切り合い関係は確認できなかった。出土遺物はない。

SB5（第7図，図版3—c）

SB4の東南側に接して位置する。東側と北側を大きく削られ，幅15～20cm，深さ3cmの壁溝のカーブの一部を残すのみで，壁高は4cm弱である。平面プランは，壁溝のカーブから直径5～6mの円形と考えられる。出土遺物はない。

SB6（第8図，図版4）

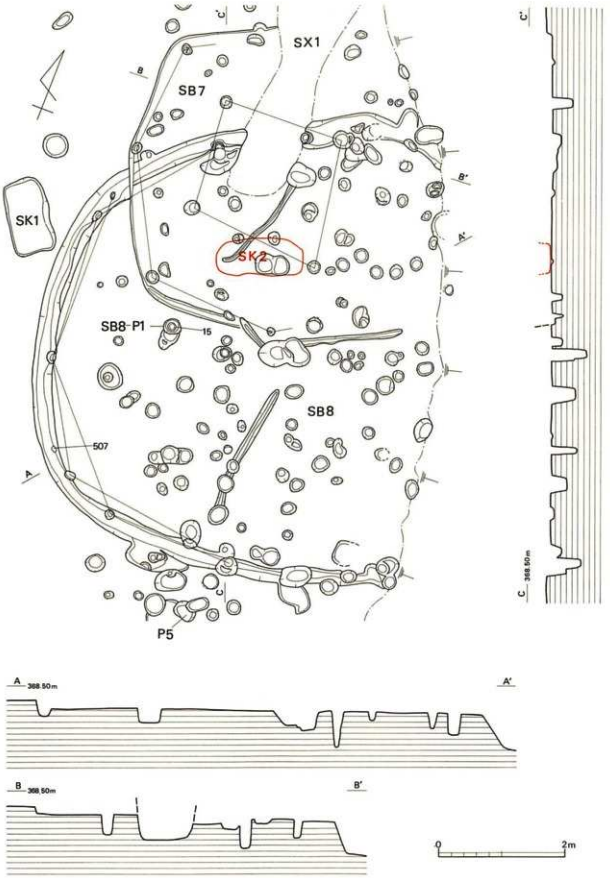
調査区中央の段の東側中央部にあたるH—16・17区付近に位置している。東半部を削平され，遺存部の南側はSX1に壊されている。壁高は約10cmで，幅15～20cm，深さ5cmの壁溝が巡っている。平面プランは，直径約6mの円形と考えられる。

柱穴については，周辺に多数の柱穴が分布し，明確な対応関係は把握できなかった。

出土遺物としては，弥生時代後期の脚台部（1）がある。

SB7（第9図，図版4—a・b，5—a）

SB6の南に近接するI—16区北半部に位置し，東辺部を削平されている。南側にあるSB8北半部を，ほぼ同じ床面の高さまで壊して作られ，埋没後にSK2，SX1が掘り込まれている。



第9図　SB7・8実測図（1：60）

壁高は約10cmで，壁溝は南辺部西半に幅15cm，深さ5cmが残るのみである。平面プランは，辺の中央が外に湾曲気味の，一辺約5mの隅丸方形と考えられる。

炉跡は床面のほぼ中央部に位置し，SX1に一部を壊されているが，現状で長径45cm，短径40cm，深さ20cmを測り，南西に延びる幅10cm，深さ1cmの浅い排水溝が配置されている。

柱穴の配置状況については，埋没後の柱穴の重複が著しいため判然としない。やや不規則となるが，現状では直径18～26cm，深さ18～30cm，柱穴間の距離が東西1.8～2m，南北1.9～2.1mの4本柱の構造が想定される。また，住居跡のコーナーに接する部分と，辺の中央部で壁が張り出す部分に，1.8～2.1mの間隔で，直径12～20cm，深さ10～20cmの支柱穴を配する可能性が高い。

出土遺物としては，土器類では弥生時代後期の甕形土器などの口縁部（2～5），中期後半の底部（6），甕形土器（7）が，石器類では石鏃（492），砥石（512）などがある。土器の遺存状態がよくないため所属時期は判然としないが，住居プランなどからSB8とほぼ同時期の可能性が高い。

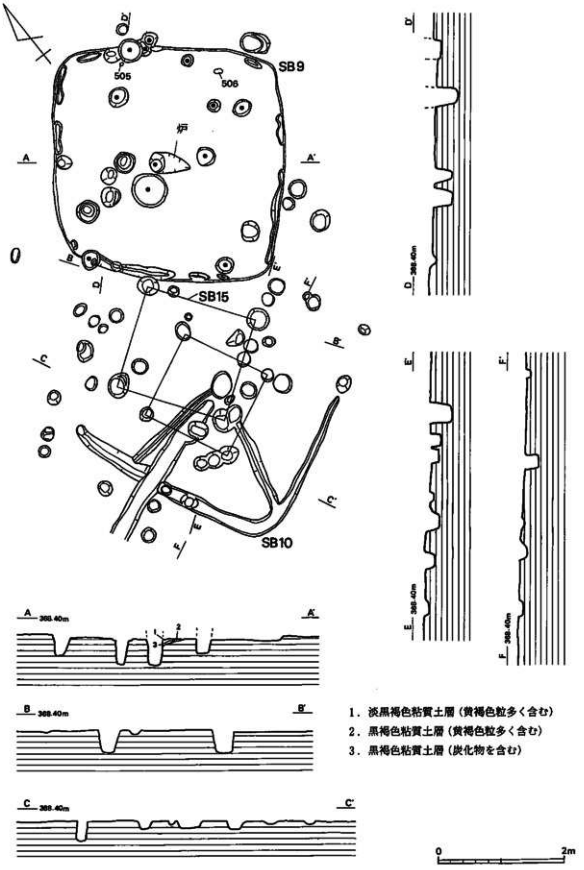
SB8（第9図，図版5—a）

I—16区に位置する。北半部にSB7が重複し，更にSX1に壊され，東辺は削平を受けている。壁高は15cm程度で，幅20～45cm，深さ約15cmの壁溝が壁に沿って残る。床面のほぼ中央部に，長径50cm，短径35～40cm，深さ25cm弱の炉跡2基が重複している。また，おのおのの炉跡から1本ずつと，炉跡の南側にやや離れて1本の計3本の溝を確認した。これらは幅10～15cm，深さ約3cmの不鮮明なもので，北西方向に延びるものは，炉跡から約60cmで途切れ，南側のものは，炉跡とも壁溝とも接していない。炉跡や壁溝の重複状況などから数回の拡張が考えられ，削平を受けている可能性もあるが，仕切りなどの機能も考えられる。

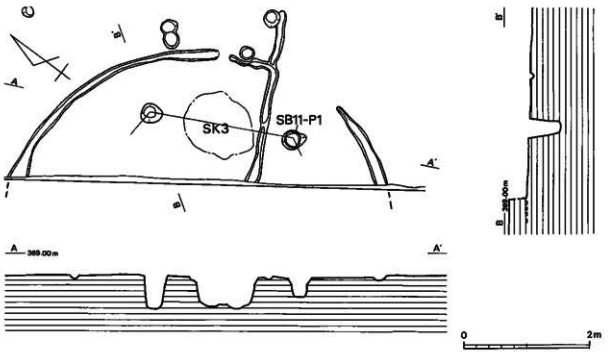
柱穴の配置については，埋没後の柱穴の重複が著しいため不明である。壁溝の内側たちあがり付近に1.9～2.7mの間隔で，直径10～25cm，深さ19～44cmの柱穴がみられ，SB7と同様，壁際に支柱穴を配す構造と推定される。

出土遺物としては，土器類では弥生時代中期後半の土器片（8～12），後期の壺形土器（13，18），甕形土器（14，16，17，19），高杯形土器（21，22），底部（23）及び口縁部片（20）が，石器類では床面などから太型蛤刃石斧を転用した敲打具（503），同未製品（507）などが出土した。

また，炉跡の南西側の柱穴（SB8—P1）から，甕形土器（15）が出土した。この土器は，口縁部を上にして立てられた状態で設置されており，口縁部を粘土で封じ，底部を大きく欠いていた（図版15—c）。覆土には炭化物を多く含み，下層から14，17などの土器片が出土しているが，住居跡との切り合い関係は確認できなかった。周辺部にP5など後期後葉段階の柱穴が密集しており，SB8—P1を含め，出土した土器の多くは重複による混入と思われるため，当住居跡の所属時期は，中期後葉段階の可能性が高い。



第10図　SB9・10・15実測図（1：60）（●印はSB9埋没後の柱穴）



第11図　SB11実測図（1：60）

SB9（第10図，図版4—a・b，5—b・c，6—a）

SB8の西側に隣接したI—15・16区付近に位置する。壁高は10cm程度であるが，今回の報告では唯一全形がわかる住居跡である。平面プランは，ややいびつな隅丸気味の方形を呈している。

壁溝は，壁際に幅6～18cm，深さ2～6cmで，途切れ気味となっている。遺構検出面で，壁際に不鮮明な暗色帯が巡っていた（図版5—b）ことから，側板痕跡と考えられ，途切れ気味で不明瞭な壁溝は，その掘方にあたるものと推定される。

炉跡は，床面のほぼ中央部にあり，住居跡の埋没後に掘り込まれた柱穴により，一部が壊されている。現状で長径55cm，短径34cm，深さ13cmの楕円形を呈しており，最下層に炭化物を多く含む黒色系の土層が堆積していた。

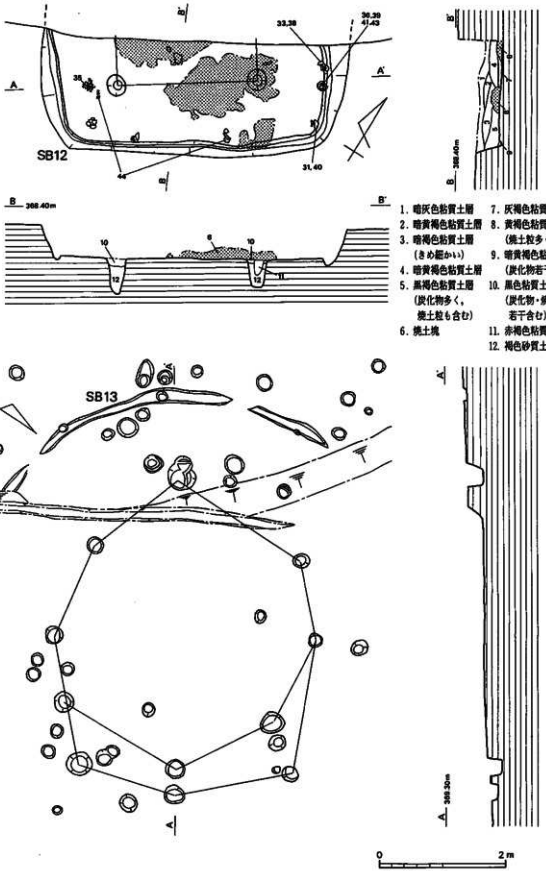
柱穴の配置については，当住居跡埋没後に掘り込まれた柱穴を除くと，2柱穴，4柱穴いずれの場合も対応する柱穴がないため不明である。

出土遺物としては，土器類では弥生時代中期後葉の高杯形土器（24，25）が，石器類では床面などから太型蛤刃石斧の折損資料（505），同転用敲打具（506）などが出土した。

SB10（第10図，図版6—b）

SB9の南西側に接したI—15区に位置する。斜面山側と南側の辺に，幅10～25cm，深さ5cmの壁溝が遺存している。平面プランは，壁溝と柱穴の配置から一辺約3.7mの方形と考えられる。

床面のほぼ中央部付近に，長径44cm，短径30cm，深さ約30cmの小規模な楕円形の土壙があり，炉跡と考えられる。また，ここから住居跡西辺のやや北寄りと，南西部コーナー付近の壁溝に続



第12図　SB12・13実測図（1：60）

く，幅10～18cm，深さ約4cmの直線的な溝が延びており，排水溝と考えられる。

柱穴の配置は，住居の西辺壁溝内側から柱穴までの上端間で60～65cm，同じく南辺で1m程を隔てて，4本の柱穴が配置されている。柱穴の規模は，直径25～40cm，深さ15cmで，柱穴間の距離は約1.9mを測り，炉跡は東南側に偏って位置する。出土遺物はない。

なお西辺の壁溝は，SB11方向へ延びる幅30cm，深さ5cmの溝状遺構と直交するが，切り合い関係は不明であった。また，SB9・15との直接の切り合い関係はない。

SB11（第11図，図版6—c，7—a）

SB10のやや西方で，調査区境となるH—15区～I—15区付近にかけて位置する。西南側は，調査区外となっている。壁面は失われており，東北側に幅8～28cm，深さ2～9cmの壁溝がほぼ半周しており，円形のプランを呈している。

検出部分の中央部にSK3があるが，削平が床面にまで及んでいたため，切り合い関係は不明である。また，床面北西端付近に，貼り床状の土層が認められた。

炉跡については，西半が未調査のため不明である。SK3を挟む2本の柱穴の規模は，直径30～50cm，深さ30～50cmで，柱穴間は2.3mを測り，多角形の配置をとるものと推定される。

また，住居のやや南側で，西南から東北に延びる幅10～18cm，深さ3～7cmの溝を検出した。排水溝と考えられ，住居外に1m程延びている。SB10と重複し，当住居跡方向に延びる溝の延長線上にあるが，双方の溝の関係は不明である。

出土遺物としては，壁溝内から小型土器の底部（29）と使用痕のある剝片（493）が，柱穴（SB11—P1）から壺形土器（26・図版16—a）と口縁部片（28）が，北西部の貼り床内から甕形土器（27）が出土した。土器の特徴から古墳時代前期前葉にあたり，石器は混入と考えられる。

SB12（第12図，図版7—b～8—b）

調査区の北西端に近いE—13区付近の調査区境にかけて位置する。SB14を削平した段にあるが遺存はよく，壁高は55cmを測る。南東の辺と，北東及び西南側の辺の一部をとどめている。

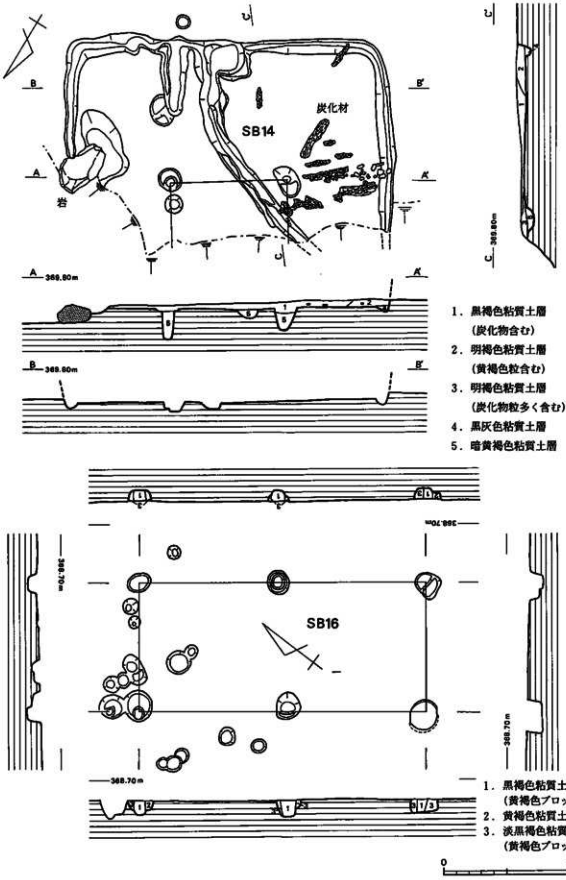
平面プランは，この両辺上端の最大幅で4.9m，同じく壁溝内側の上端間で4.3mを測る方形を呈している。

床面上には，厚さ20cm近い焼土層が広く堆積し（図版7—b），覆土中にも炭化物，焼土などの粒子を多く含むなど，焼失家屋であることを示している。

壁面沿いの床面には，幅10～20cm，深さ5～10cmの壁溝が巡っており，この壁溝と柱穴の一部は，焼土層によって覆われていた（図版7—c）。

柱穴の配置は，両コーナー付近で壁溝から74～82cm隔てて2本を検出した。柱穴の規模は，直径28～32cm，深さ44～58cmで，柱穴間は2.2mを測る。

出土遺物としては，床面直上から，甕形土器（30，32），鉢形土器（31，35～44），高杯形土器（33，34）と砥石（508）が出土し，鉢形土器の一部は積み重なった状態であった（図版8—a）。土



第13図　SB14・16実測図（1：60）

器の特徴から古墳時代前期前葉と考えられる。

SB 13（第 12 図，図版 8—c）

調査区西南の段の G—14・15 区付近に位置し，北東側を大きく削平されている。南西側では，幅 12～20 cm，深さ 4 cm の壁溝が部分的に遺存するが，床面は失われている。

柱穴の配置は，ほとんどが北東側に分布している。復元される柱穴配置は，8 本の柱穴が 1.3～2 m の間隔で配され，長軸（北東—南西）間 4.8 m，短軸間 4.1 m の楕円となる。これらのことから，平面プランは直径 7～8 m 程度の楕円気味の円形と考えられる。

また，北東部の柱穴配置から，拡張の可能性も考えられる。出土遺物はない。

SB 14（第 13 図，図版 9—a・b）

SB 12 の南東にあたる F—13 区付近に位置する。北西辺を削平されており，壁高は 12 cm を測る。SB 12 同様，南東側の辺と，その両側の辺の一部をとどめている。平面プランは，両側の辺の上端間で 5.2 m，壁溝の上端間で 4.8 m を測る方形を呈する。

床面際には，幅 15～25 cm，深さ 10～15 cm の壁溝を巡らしているが，北東辺では自然岩塊で途切れ，南東辺の中央部では，土壙状の施設へと連なっている。

この土壙状施設は，二つの部分から成っている。この辺のほぼ中央に位置する方形土壙は，住居跡の壁面に沿って作られており，上面形は一辺 65～90 cm のいびつな方形を呈している。たちあがりは直線的でなく，上面近くで段を有している。底面形は，一辺 40～43 cm の方形を呈し，排水溝の底面と連なっており，住居跡の壁溝の底面より 13～17 cm 深くなっている。

次いで，この方形土壙の東側に上端間で 10 cm 離れて，壁溝から住居内に直角に延びる細長い長方形の土壙がある。上面形は長さ約 1.3 m，幅 53～25 cm で，深さ 14 cm を測る。底面は下端で幅 15～20 cm を測り，壁溝と連なっている。

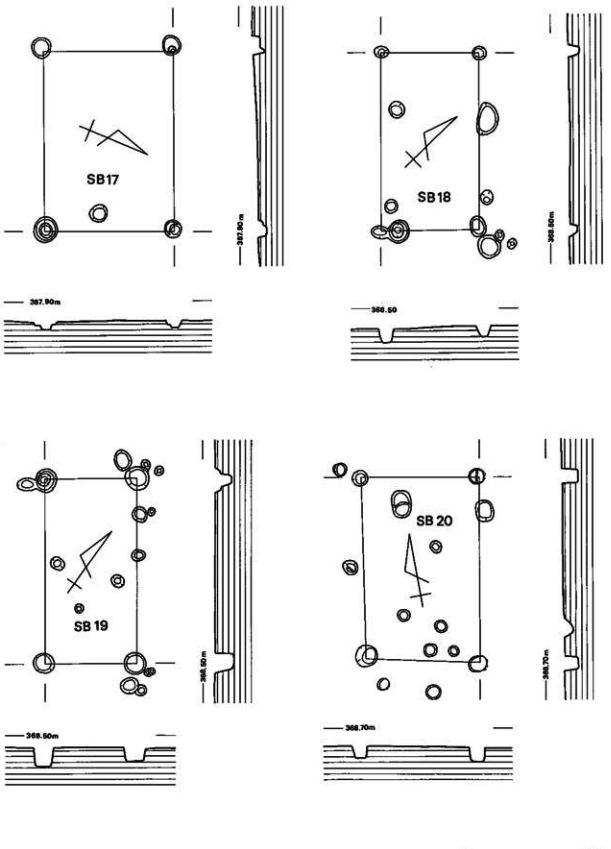
柱穴の配置は，南東辺から約 1.8 m，ほかの両辺から 1.2 m 程離れて，直径 32～55 cm，深さ 37～48 cm の 2 柱穴を検出した。柱穴間の距離は，約 1.8 m を測る。

床面には，南東辺の土壙状施設から，柱穴間を通り弧状に延びる幅 25～30 cm，深さ 13～20 cm の排水溝がある。溝の底面は段差などがあり不規則で，土壙状施設と関連したものと考えられる。

また，床面の西半部を中心に炭化材が出土しており，焼失家屋と考えられる。

南東辺を中心とした土壙などの付属施設については，遺物などが出土していないため，性格は不明である。南東辺は，ほかの両辺に比べて柱穴との距離にやや隔たりがあり，これらの付属施設と関連した作業空間として設定された可能性がある。

出土遺物としては，床面および覆土中などから，土師器片（45, 46），弥生時代中期の土器片（47）が出土した。このうち，弥生土器は，器面の風化が著しい混入で，当住居跡の所属時期は古墳時代前期頃と考えられる。



第14図　SB17～20実測図（1：60）

2 掘立柱建物跡

SB 15（第 10 図，図版 6—b）

SB 10 と重複する I—15 区に位置する。柱穴の規模は直径 30～40 cm，深さ 34～45 cm で，柱穴間の距離が 1.7～1.9 m の方形を呈する。主軸方位は N 33°W をとる。出土遺物はない。

本建物跡については，規模や重複状況などから，SB 10 の拡張に伴う柱穴の可能性が高い。

SB 16（第 13 図，図版 9—c）

SB 9 の北西約 12 m の，G—16 区西南側付近に位置する。柱穴の規模は直径 30～48 cm，深さ 18～26 cm で，桁行 2 間（4.6 m），梁間 1 間（2.0 m），主軸方位は N 38°W をとる。柱穴間の距離は桁行約 2.2～2.4 m，梁間 2.0 m を測る。出土遺物はない。

SB 17（第 14 図，図版 10—a）

調査区の北東端に近い F—17 区付近に位置する。柱穴の規模は直径 30～40 cm，深さ 14～24 cm で，桁行 1 間（2.9 m），梁間 1 間（2.1 m），主軸方位は N 67°E をとる。出土遺物はない。

SB 18（第 14 図，図版 10—b）

SB 16 の北東側にあたる G—16 区付近に位置する。柱穴の規模は直径 18～32 cm，深さ 13～22 cm で，桁行 1 間（2.8 m），梁間 1 間（1.6 m），主軸方位は N 46°W をとる。出土遺物はない。

SB 19（第 14 図，図版 10—c）

SB 18 の南東側に接する G—16，H—16 区付近に位置する。柱穴の規模は直径 30～40 cm，深さ 23～32 cm で，桁行 1 間（2.9 m），梁間 1 間（1.5 m），主軸方位は N 37°W をとる。出土遺物はない。

SB 20（第 14 図，図版 11—a）

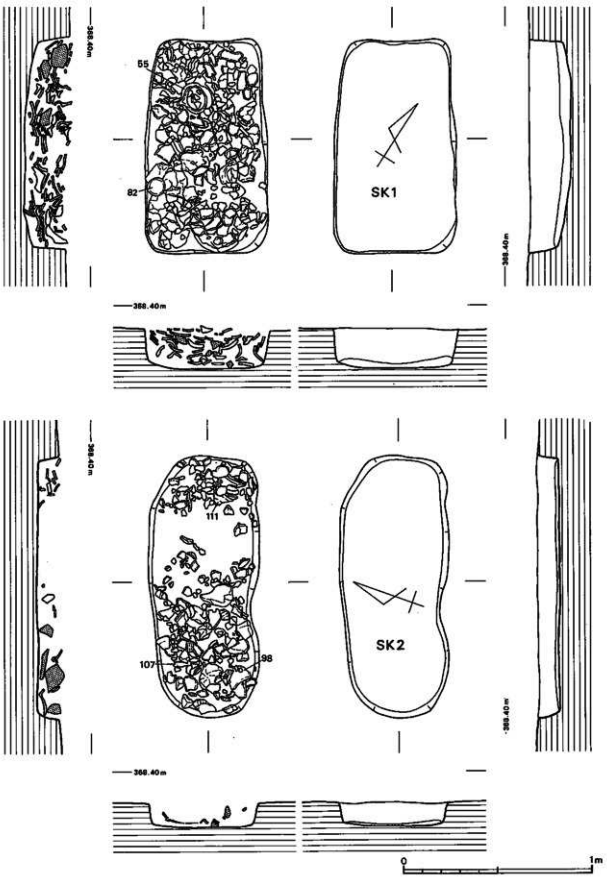
SB 9 の西側にあたる H—15 区付近に位置する。柱穴の規模は直径 23～36 cm，深さ 22～28 cm で，桁行 1 間（2.9 m），梁間 1 間（1.9 m），主軸方位は N 10°E をとる。出土遺物はない。

3 土壙

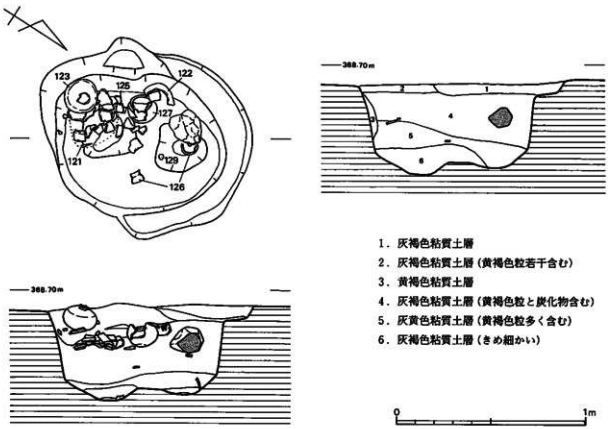
SK 1（第 15 図，巻頭図版 3—a，図版 11—b・c）

SB 8 の北西コーナー付近に近接する I—16 区北西部に位置する。平面プランは隅丸の長方形で，上面で長軸 1.14 m，短軸 55～60 cm，底面では長軸 1.1 m，短軸 50～57 cm を測り，上・下面共，南東側短軸が開き気味となる。主軸方向（底面下端間の二等分線にあたる長軸で計測，以下略）は S 31°W をとる。

土壙のたちあがりは垂直で，壁高は 20 cm 程遺存する。底面は，短軸では平坦で，長軸断面では



第15図　SK1・2実測図（1：20）（アミ目は石）



第16図　SK3実測図（1：20）（アミ目は石）

中央部にかけて緩く窪み気味となり，側板痕跡などは見られない。

墳内からは多量の弥生時代後期の土器片（49～95），剝片（498）等の遺物と共に，小児頭大から拳大以下の礫・礫片が出土した。また覆土には，多量の炭化物粒が含まれていた。

後期後葉を中心に前葉から末葉までの資料があり，後期をとおして継続した遺構と考えられ，中期の土器片（48）が混入している。

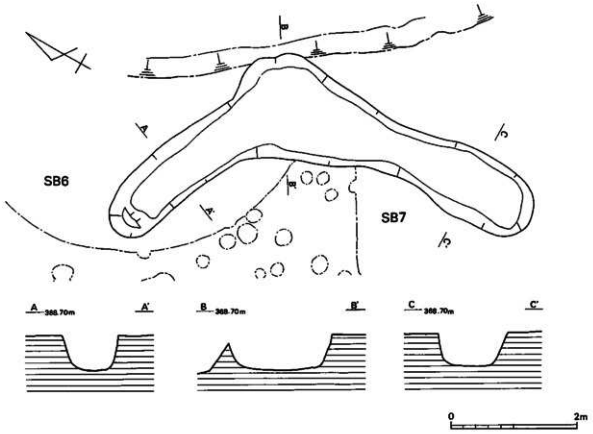
SK2（第15図，巻頭図版3—b，図版12—a・b）

SX1の南側にあたるI—16区の北東寄りに位置する。SB7埋没後に掘り込まれており，SX1の南端から60cm程南に寄った位置にある。平面形はやや不整な長楕円で，上面で長軸1.38m，短軸55～58cm，下面で長軸1.32m，短軸50～54cmを測り，上・下面共，東側で僅かに幅が広がっている。主軸方位はN70°Eをとる。

土壙のたちあがりは垂直に近く，壁高は12cm程遺存し平坦な底面となっている。側板痕跡などの施設は見られず，一部に柱穴が重複している。

墳内からは，SK1同様に多量の弥生時代後期の土器類（98～120），ハンマーストーン（513）や自然礫などが出土し，覆土中には多量の炭化物粒が含まれていた。なかでも120の土製品については，勾玉もしくは装飾を施した人物像の腕の部分とも考えられる資料である。

主体は後期後葉と考えられ，中期の土器片（96，97）が混入している。



第17図　SX1実測図（1：60）

SK3（第16図，図版12—c，13）

SB11と重複するI—15区に位置する。平面プランは，上面で長軸1.18m，短軸99cm，深さ50cmを測る不整な楕円形を呈するが，最上部の第1層は，遺物上面と第2層を削平している。

壁は，垂直に近い傾斜を示し上部でやや開き気味となっている。

底面は，壁下端から中央部にかけて数cm程の緩い皿状を呈しており，長軸に沿って南北に直径約30cm，深さ5cmの擂鉢状の窪みを2か所検出した。

また，SB11との直接の切り合い関係は不明であるが，SB11—P1出土の広口壺に比べ，当遺構出土のものが後出的なため，SB11が先行すると考えられる。

出土遺物としては，底面から鉢形土器（126），土製紡錘車（129）が，また，第4層下面から中位にかけ壺形土器（121～123），甕形土器（125，127），鉢形土器（128）及び小児頭大の自然礫などが出土した。覆土中には多量の炭化物粒が含まれていた。

出土した土器の特徴から，遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。128はほかと異なる橙褐色系の胎土で，器壁の風化状況などからみて弥生時代後期後葉の混入である。

4　性格不明の遺構

SX1（第17図，巻頭図版2，図版14～15—b）

SB6～8と重複するH—16～I—16区の東半部付近に位置する。SB6～8の埋没後に掘り込ま

れており，SK 2 と共に，切り合い関係の判明している遺構としては，この地区で最も新しい遺構である。

平面プランは，開き気味のＬ字状を呈する溝状の遺構で，最大長 6.5 m，最大幅 2.8 m を測る。

南北方向の幅は，南端部付近の上面で 1.04 m，底面で 68 cm，中央のやや幅が狭まる部分は上面で 80 cm，底面で 44 cm，屈曲部手前では上面で 1.7 m，底面で 1.24 m を測り，長軸方位は N 9° W をとる。また，最大長は上面で 4.86 m，底面で 4.5 m を測る。

これに対して東西方向では，西端付近の上面で幅 84 cm，底面で 52 cm，屈曲部手前では上面で 80 cm，底面で 62 cm を測り，長軸は南北方向の長軸から 116° の内角をもつ。最大長は上面で 3.94 m，底面で 3.36 m を測る。

壁高は 53 cm を測り，やや上面で開き気味の急角度の傾斜を示している。底面は，西端部に段がある以外はほぼ平坦である。

壙内からは，土器類を中心に数十箱に及ぶ遺物が出土した。その出土状態は，暗褐色系の炭化物粒を多く含む土が，遺物の間隙に入り込むといった，密な状態であった。

また，遺物類に混ざって小児頭大から拳大以下の自然礫・礫片が多数出土した。その包含状態は，下層になるにしたがい密度が増す傾向が見られた。これらの礫の多くには，被熱痕跡または薄いススの付着痕跡が見られる。

出土遺物としては，土器類では壺・甕・鉢・高杯形土器など（第 27 図 148～第 47 図 488）が，石器類では石鏃（490，491），楔形石器（494，495），使用痕のある剝片（499），剝片（496，497，500，501），部分磨製石斧（502），太型蛤刃石斧（504），砥石（509～511），ハンマーストーン（514）などがある。遺物の特徴から，弥生時代後期前葉の新段階から始まり，中葉から後葉を中心に，末葉まで継続した遺構と考えられる。なお，148～156 については弥生時代中期ならびに古墳時代前期段階などの混入である。また，このほかに，ガラス滓と思われる小片 1 点が出土している。

5　その他の遺構

以上の遺構のほか，G—19 区調査区ぎわの P 1 から弥生時代後期末葉の鼓形器台脚部（146）が，H—19 区の P 2 から底部（147）が出土している。また，南東部の K—17 区調査区ぎわの P 3 から弥生時代後期末葉と考えられる壺形土器（145）が，SB 8 南側の J—16 区の P 4 から後期末葉の壺形土器（130），甕形土器（131～133），底部（136），口縁部（134，135）などが，I—16 区の柱穴密集部分の P 5 から，後期後葉の土器片（137～144）が出土した（図版 16—b）。

これらの柱穴は上部遺構が削平されており，性格については不明である。

V 遺物の概要

今回の調査では，弥生時代中期から近世にわたる多量の土器類，石器類などが出土した。なかでも弥生時代後期から古墳時代前期の土器類が大半を占めている。また，古墳時代後期以降の資料については，須恵器，土師質土器，陶磁器類などがあるが，全て包含層などから出土した断片的な資料のため報告し得なかった。以下，器種毎に概要を記す。

土器類（第18～47図，図版17～48）

報告した土器類は中期，後期の弥生土器，古式土師器など合計489点で，そのうちの7割をSX1が占めている。全体では弥生時代後期の資料が大半で，中期の資料は，多くが遺存度のよくない断片的な混入資料である。そのため分類は後期の土器にとどめた。

1 弥生土器

弥生時代中期

中期の資料は，SB8，SB9に伴うもの以外は遊離した遺物である。

壺形土器

広口壺では，頸部に幅広の凹線文を巡らすもの（11），ナデ肩の肩部にクシ描文と斜めのヘラ描文を施すもの（8）がある。無頸壺では，口縁部外面に数条の凹線文と，縦の刻目を施すもの（47），円孔を施すもの（48）がある。

甕形土器

くの字状に短く外反する口縁の端部を僅かに肥厚させるもの（7，148）と，端部を上下に拡張するもの（96）がある。

前者のうち，7は47と同様の施文を施している。148は口縁端部拡張面（以下，「口縁端面」という。）と肩部に2条の細い凹線文などを施している。肩部の凸帯に刻目をもつ9，10も同様の器種と考えられる。

後者は，頸部に凸帯を貼り付けて刻目を施し，口縁端面に数条の凹線文を施している。

高杯形土器

杯部では，内傾気味に直立するたちあがり部外面に凹線文を施すもの（24，97）と，ボール状の杯の端部上面を水平にやや拡張し，上端面と外面に凹線文を施すもの（25）がある。

脚部では，脚柱部の径がやや大きく，数条の貼付け突帯文と円孔を施すもの（149），裾部にかけてラッパ状に開き，多条のクシ描沈線文と刺突文などを施すもの（150），ヘラ描文と複数の円孔を施すもの（12）がある。また，脚部では，脚端にかけてややふんばり気味で方形透かしをも

つもの（151），裾部外面に凹線文と斜めのヘラ描文を交互に配し，緩い弧を描いて立ち上がる綾杉文風のヘラ描文を施すもの（152），端面に凹線文を施し，方形透かしの間に綾杉文を施すもの（153）などがある。

底部

2例（6，467）あり，共に底部付近にかけて内湾し，あげ底気味となる。467外面は縦方向のヘラ磨き，内面にはヘラ削り痕が見られる。

弥生時代後期

後期の資料[1]は，報告資料の9割を占める。SB6・7・8，SK1・2，SX1などから出土したもの（第1表参照）で，SX1からの資料（第2表参照）が340点余りを数える。

壺形土器

壺形土器は個体数74点で，口縁部の形態から6分類した。

A類

直口壺系のもので，口縁端部の拡張に乏しい。

A1（157，159）は，単純口縁の長頸壺で，159は肩部にヘラ描文を2段巡らしている。157は，肩部に横，頸部に縦方向のヘラ磨きを施し，外面に赤色化粧土を塗布している。

A2（13，49，158，160～162）は，やや広めの頸部から，緩くラッパ状に外反する単純口縁をもつもので，161は外面に赤色化粧土の痕跡が認められる。

A3（163）は，内湾気味にラッパ状に開くもので，口縁端部でやや肥厚する。

A4（130）は，ナデ肩の体部から口縁部が直線的に開き，端部をやや外反気味とする。外反部の外面に凸帯を巡らしている。口縁上端部が発達した器種と考えられ，ここでは直口壺のなかで分類した。

B類

くの字状に緩く外反する広口壺で，口縁端部は主に上方に拡張するものが目立つ。

B1（165～167）は，いびつな球形の体部に短い頸部をもつもので，口縁部の外反は短い。平底の底部C1類の466が対応する。

B2（50，183～185）は，肩の張った体部からくの字状に外反し，口縁上端部をやや拡張する。137は，口縁端面に凹線文を施す。全形のわかる50では，胴部最大径をほぼ中位にもち，あげ底の底部B類をもつ。

B3（164，186，187，489）は，B2と同様に肩の張った体部からくの字状に緩く外反する口縁部をもつもので，端部に面をもつ単純口縁のもの（164，489）と，内傾気味に拡張する端面に凹線文を施すもの（186，187）がある。調整は，器面は風化しているが，外面にヘラ磨き（186），ナデ状のハケ目調整痕跡[2]（187），右下がりのタタキ目痕跡と思われるもの（489）などが見られる。

B4（51，174，175）は，肩の張った体部から，緩くくの字状に外反し，内傾気味の口縁端面を

もつ。174は端面に凹線文を，175は肩部に刺突文を施している。

C類

短めの頸部から，短く外反する口縁部をもち，口縁端部は上方に拡張気味となる。

C1（176～181）は，横ナデにより口縁端部をつまみ上げるもの（176，177，180，181），端面に凹線文を施すもの（178，179）などがある。

C2（172，173）は，ややナデ肩の肩部に横ナデによる不明瞭な屈曲をもち，緩く外反する口縁をもつ。口縁端面には凹線文（172），横ナデによる条線（173）が見られる。

D類

直立気味ないしは外反する複合口縁壺。

D1（170，171）は，口縁上端部を直立気味に拡張するもので，端面に強い横ナデを行っている。170は，胴部最大径を上位にもつ肩の張った体部で，最大径付近に刺突文を巡らせている。調整は，内面はシャープな横方向にヘラ削り，外面は最大径上半にナデ状の斜めのハケ目調整痕跡をとどめ，下半に縦方向のヘラ磨きを施している。共に，備後南部地域からの搬入資料の可能性が高い。

D2（168，169）は，口縁上端部を直立ないしは外反気味に拡張するもので，口縁端面に横ナデを施している。

D3（52）は，緩く外反する頸部に外反気味の口縁部をもつもので，口縁端面に凹線文を，肩部の沈線の上下にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施している。調整は，内面はヘラ削り，外面は縦方向のハケ目調整を施している。あげ底の底部C類で，胴部最大径はやや上位と考えられる。

D4（18，138）は，口縁上端を強く外反するもので，D2の168などと共に県北部などの山間部から山陰地域の要素が強いものである。

E類

緩く外反する頸部に内傾する口縁部をもつもの（145）。

F類

総じて器壁が厚く，口縁端面に凹線文などを施し，内傾する複合口縁壺として一括した。

F1（100，192）は，緩く外反する筒状の頸部に，やや内傾気味の口縁端面が付くもので，共に頸部内面にヘラ削りを施している。

F2（191，194）は，口縁部がやや外傾気味に立ち上がるもので，共に凹線文を施している。

F3（182，188～190，193）は，短めの頸部に，直立気味で主に上端を拡張する口縁部をもつもの。口縁端面に凹線文を施し，上端を丸く終えている。肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施すもの（189），クシ描文を施すもの（193）などがある。

F4（56，57，98，99，196～205，207～209）は，厚手で緩く外反する口縁部の上端を内傾気味に立ち上げ，上端部に平坦面をもつもので，196以外は口縁端面には幅広の凹線文を施している（図版51—c）。また，凹線文のなかには板状の原体などを用いた，強い横ナデで施したものと思われる痕跡を残すもの（図版51—d）[3]もある。拡張部が直立気味のもの（57，99，199，202～204），同

じく内傾度が強いもの（98，198，208，209），その中間的なもの（56，196，197，200，201，205，207）などがある。

凹線文以外の口縁部の装飾は比較的乏しく，端面にクシ描波状文を施すもの（201），縦のクシ描文を施すもの（207），頸部付近にヘラ描文を施すもの（203），クシ描波状文を施すもの（193，201）などがある。

F5（55，195，206）は，内傾する口縁上端部を外反するもの。全形のわかる55では，あげ底のB3類に，胴部最大径がやや上位にある肩の張った体部で，外面の調整は，肩部に斜め，胴部最大径付近に縦方向のヘラ磨き痕跡が見られる。また，195では粘土紐の貼り付けにより，口縁下端部を作り出している。

F6（53，134，211）は，内傾する口縁端面に，クシ描波状文を施すもので，134はほかの2点に比べ器壁も薄く小型である。

F7（212）は，ラッパ状に外反する口縁部に，内傾する口縁端面をもつもので，頸部の貼付け凸帯に2段の刺突文を施している。平底の底部B2類にあたる，不鮮明な底部痕跡をもつ不安定な平底で，胴部最大径をやや下位にもつ倒卵形を呈している。器面調整は，内外面とも縦ないしは斜め方向の比較的細かなハケ目調整で，外面胴部上半から縦方向のヘラ磨きを施している。また，小片の210も一応ここに分類しておく。

F類，なかでもF4～F7については，凹線文やクシ描文などで加飾する，比較的大型の内傾する複合口縁壺で，安芸南部地域では後期をとおして多く見られる資料である。また，F7の212については，安芸南部以西，とりわけ周防地域の弥生時代後期末葉[4]にあたる資料との類縁性が考えられる。

甕形土器

甕形土器は個体数99点で，口縁端部の拡張などで5分類した。

A類

くの字状に外反する単純口縁のもの（2）で，口径は不明だが217もこの可能性がある。

B類

口径が胴部最大径より大きく，長胴化した倒卵形を呈する。

B1（133）は，口縁端部を欠くが，くの字状に外反する単純口縁と考えられる。内面はヘラ削り後にナデ調整を，外面は縦方向のヘラ磨きを施している。平底の底部B2類が付き，焼成前の穿孔をもつ。

B2（131，346）は，C1に比べやや小型で，口縁上端部を拡張気味とする。内面は斜め方向のヘラ削り，外面は斜めから縦方向のヘラ磨きを施し，肩部に横ナデによる弱い稜をもつ。

C類

くの字状に外反し，口縁端部をやや肥厚気味とするもの。

C1（218，219）は，口縁部を強い横ナデ調整で仕上げ，頸部内面に明瞭な稜をもつ。頸部から

肩部にかけて凹線文を施すもの（219），刺突文を施すもの（221）がある。3，4もこれに分類されると思われる。

C2（58，59，104，220，227）は，短く直線的に外反する口縁上端をつまみ上げ気味とする。

C3（15，16，103，222～226，228，255，256）は，B2に比べ口縁部上端の拡張が増すもので，総じて肩部の張りは少ないものが目立つ。全体に器面の風化が著しいが，223では口縁部に縦のクシ描文を配し，肩部に貝殻によると考えられる崩れた鋸歯文を施している。255では，口縁部に凹線文を，肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施している。

D類

くの字状に短く外反し，口縁端部を上方に拡張し，端面に凹線文を施す。総じてB類に比べ頸部の屈曲が緩いものが目立つ。

D1（14，60，61，233～239，291）は，頸部の屈曲が緩く，口縁上端を肥厚し，内傾気味の端面をもつ。口縁部には凹線文を施し，肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施すもの（61，238，239）がある。調整では外面に縦方向のナデ状のハケ目調整を施すもの（236）がある。

D2（62～64，101，229～231，241～243，250～252）は，C1に比べ口縁上端の拡張が増し，B4と同様肩部の張りが少なくナデ肩のものが目立つ。口縁部に凹線文を施し，肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施すもの（231，243）がある。調整では，外面に縦方向のハケ目調整（229），ナデ状のハケ目調整（250），ヘラ磨き（243）を施すものがある。

D3（253，254）は，頸部の屈曲が強く，短く外反する口縁端面に2条程の凹線文を施す。

D4（66，106，244～247）は，ナデ肩の肩部から緩く外反し，口縁端部を上方に拡張する。端面には凹線文を施し，肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を施すもの（244，245）がある。C2に比べやや大型となる。風化が著しいが，232もこれに属するものと考えられる。

D5（248，249）は，C4に比べ口縁内部の屈曲と，肩部の強い張りがあげられる。口縁部に凹線文を施し，249では肩部に横，胴部上半から斜めのヘラ磨き調整を施す。

D6（65，137，240，283）は，頸部がやや間のびするもので，口縁端面は直立気味となり，凹線文を施す。

E類

口縁上端部を内傾気味に直立するもの。

E1（257～259，261～263，266，269，270，282）は，法量が小型の257～259，大型の269，270とその中間的なものに分かれる。

小型のものは，胴部最大径をやや上位付近にもち，胴部下半に縦，肩部に斜めから横のヘラ磨きを施す。大型のものは，頸部内面に特徴的な屈曲をもち，内傾気味に大きく立ち上がる口縁端面に凹線文を施すもの（270），強い横ナデを施すもの（269）がある。中間的なものは，口縁部が内傾するもの（261），直立気味のもの（262，263，266），外湾気味に立ち上がるもの（282）などがある。

胎土，焼成，調整などの特徴から，ここに分類したものの多くは，備後南部地域からの搬入資

料と考えられる。

E2（67，132，260，264，265，267，268，273）は，口縁上端部を拡張するもので，D1に類似する要素を示している。口縁部の施文は乏しく，口縁部には主に横ナデを施している。273では横ナデによる条線が残り，肩部にナデ状のハケ目調整を施している。

E3（105，271，272，274～281）は，D2に凹線文を施したもので，口径がやや小さめのもの（272，274，275）とやや大きめのものに分かれる。また278では，口縁端面にクシ描きの沈線文を縦に施している（図版51—a）。

破片資料の68，102なども，D2ないしはD3に分類されるものと思われる。

E4（284）は，くの字状に外反する口縁端部を内傾気味に拡張するもの。口縁端面に凹線文，肩部には，施文具を斜めに連続して押し当てた竹管文風の刺突文を2段施しており，口縁部内面に赤色化粧土の痕跡をとどめている。黒っぽい色調で，胎土に石英などの砂粒を多く含む。県北西部をはじめとした山間部域の特徴をもつものと考えられる。

F類

口縁上端部を外方に拡張するもの。

F1（286～290，292，293）は，緩く外反する口縁上端部を僅かにつまみ上げ，外傾する口縁端面をもつ。破片資料が多いが，口径に比べ胴部最大径がほぼ等しい（286，288，290）か，小さい（287，289）傾向がうかがえる。胎土が暗茶褐色系で，特徴的なグループである。

口縁部に凹線文を施す288，290，292の肩部には，クシ歯状工具による斜めの刺突文を施している。器面調整は，286，288で縦から斜め方向の細かなハケ目調整を，288では，胴部最大径付近に斜め方向のヘラ磨きを施している。

F2（17，139，285）は，口縁部上端が大きく外反する複合口縁のもので，285は肩部にクシ歯状工具による斜めの刺突文を交互に3列施している。器面調整は，17の胴部上半に斜め，下半に縦方向のヘラ磨きを，285では縦方向の細かなハケ目調整を施している。共に，頸部内面に横方向のヘラ磨きを施している。

285は，くすんだ灰褐色系の胎土で，長石，石英，雲母などの細粒を含み，口縁部内外面に横ナデによる条線をとどめている。山陰地域のいわゆる的場式[5]にあたる搬入資料と考えられる。

鉢形土器

鉢形土器は個体数70点で，脚台付鉢（高杯）系，浅鉢（広口鉢）系，深鉢系に大別した。

脚台付鉢（高杯）系

A類

脚部B類に広口の浅鉢を載せた形をとる294があげられる。脚柱部内面は上部までヘラ削りし，上面がナデによりドーム状となるが，接合痕跡から円盤充塡法をとる可能性がある。杯受け部外面は弧状，内面は放射状，たちあがり部は横方向のヘラ磨きを施し，口縁端部を上方に拡張している。

B類

杯たちあがり部上面が拡張し平坦面をもつもので，深い受け部をもつ。310は上面に凹線文を施し，314は高杯形土器A1類の杯部の形態をとる。

C類

高杯形土器B2・3類に近い杯部をもつが，総じて受け部がやや深めで直線的となり，厚手の作りとなる。

C1（295～298）は，杯たちあがり部がほぼ直立し，上端部を僅かに拡張する。たちあがり部外面に凹線文を施すもの（295）もあるが，高杯形土器と同様施文に乏しい。調整は，杯受け部外面に放射状のヘラ削りをとどめるもの，内面に弧状・放射状のヘラ磨きを施すもの（295，298）がある。

C2（299～303，305）は，たちあがり部が外反気味となるもので，受け部外面（299，301）に加えて内面にもヘラ削りをとどめるもの（302）がある。脚台部C3類が付き，脚台部にかけて縦方向のヘラ磨きを施す。高杯形土器D1類と同様，凸帯を貼り付けてたちあがり部の屈曲部を形成するもの（303）がある。

D類

杯たちあがり部が強く外反し上端部に平坦面をもつ（315～318）。317，318では深い体部（杯部）をもつ。312もこの形態に属するものと考えられる。

E類

内湾気味に立ち上がる深めの杯部外面に，たちあがり部の屈曲部の段をとどめたもので，口縁部上端に面をもつ（304，306）。115，311もこの形態に属するものと考えられる。

浅鉢（広口鉢）系

A類

平底で，深く直線的に立ち上がる杯部外面に段をもち，短く直立気味に外反する端部をもつ（307～309）。型式的には脚台付鉢系E類から変化したものであるが，平底であることから浅鉢系の分類に入れた。

B類

319は，胴部最大径で強い張りをもち，内面の胴部下半にヘラ削り，外面上半にハケ目調整を施す。備後南部の後期前半期に特徴的な鉢形土器の形態である。

C類

肩部に張りがなく，くの字状に外反する単純口縁で，内面はヘラ削り，外面はナデ調整を施している（331，332）。

D類

総じて頸部径が胴部最大径に近いため，肩部に張りがなく，口縁に直立する端面をもつ。

D1（327～330）は，短く外反する口縁に直立する端面をもつもの（327，328），上端部を僅かに拡張するもの（329，330）があり，後者の頸部から肩部付近に，クシ歯状工具による斜めの刺

突文を施している。器壁は厚く作られている。

D2（128，140，320，321，370）は，胴部最大径と頸部径との差がなく，短く外反する口縁上端部を拡張気味とする。140は口縁端面に凹線文を，128，320，370は肩部に斜めの刺突文を施している。

D3（333，334）は，D1の大型の形態をとる。

E類

肩部の張りが僅かで，頸部内面にシャープな稜をもち，内湾気味に外反する口縁端部に面をもつ（335～337）。336，337は，端面に細い凹線文を施している。

F類

肩部の張りの弱さなどはD，E類に似るが，口縁端部の拡張が特徴となる。

F1（322～326）は，325以外は，直立気味の口縁端面に凹線文を施す。調整は，内外面に横方向のヘラ磨きを施すもの（322，323），内面にヘラ削りを施すもの（324～326）がある。322については，胎土，調整などから，備後南部地域からの搬入資料の可能性がある。

F2（112，338～343）は，F1に比べ大型で，口縁端部を上下にやや拡張する。340の端面にはハケ目原体などによると考えられる横ナデによる条線（図版51—b）が，ほかは凹線文が施されている。内面はヘラ削りで，340では稜をもつシャープな削りを行っている。平底の底部C3類の458，459などが削りのシャープさ，胎土，焼成，色調などで近似し，これに対応するものと考えられる。また，112，338，339肩部には斜めの刺突文を施している。

深鉢系

A類

胴部の張りが小さく，直立気味に短く外反する単純口縁で，肩部に横ナデによる弱い稜をもつ（216，354）。

B類

小型で，短く外反する口縁端部を拡張気味とする。

B1（71，348，351）は，口縁上端部を若干つまみ上げ気味とし，肩部に横ナデによる弱い稜をもつ。

B2（347，349）は，下端部をつまみ出し気味とし，内傾する端面をもつ。347の肩部にはクシ描きの波状文を施している。

C類

胴部最大径で比較的明瞭な稜をもち，口縁上端部をつまみ上げ気味とする（72，344，345）。368もこの形態に属するものと考えられる。

D類

小型で口縁上端部に平坦面をもつもの（69，70，350）。69は直線的に立ち上がり，70はくの字状の外反部が肥厚し，350はB類に短い直口部が付いた形で，頸部に円孔をもつ。便宜的に分類したが，形態的にはまとまりがない。

このほか，74，76，364，367 などがあるが，いずれも断片的な資料である。

器台形土器

器台形土器は，筒状の胴部に外反する口縁部と脚部をもつもの（372～375）と，鼓形器台（146）がある。

前者は，施文では胴部上半に幅広の沈線文をもつもの（375），据部付近に複数の円孔をもつもの（372），口縁部端面に波状文を施すもの（374）などがある。

後者は，筒部径が小さく，脚台部の稜をもたないもので，外面にナデ調整，内面にヘラ削りを施している。

高杯形土器

高杯形土器は，杯部の個体数 41 点に搬入品の脚部 1 点を加えた 42 点があり，杯たちあがり部の状況から 5 分類した。なお，ほかの脚部については，杯部との対応関係が不明なことと，鉢形土器脚台部との区別が困難なものが多いため，個体数には加えていない。

A 類

口縁部上面が拡張し，平坦面をもつもので，備後南部的な要素が強い。

A 1（376～378）は，杯たちあがり部が逆三角形を呈し，上部の平坦面に凹線文を施す。

A 2（383）は，上部の平坦面が狭く，杯たちあがり部がやや深い。

377 については胎土，焼成などから同地域からの搬入資料と考えられる。

B 類

浅めの杯受け部に，比較的短く直立ないしは外反気味のたちあがり部をもつもので，たちあがり部の外反は総じて弱い。また，杯受け部は直線的もしくは緩く外反気味のものが目立つ。

B 1（22，385，386，398）は，杯たちあがり部の口縁端部を丸くおさめる。

B 2（379）は，杯たちあがり部外面に凹線文を施す。

B 3（21，107，380～382，384，389）は，杯たちあがり部が直立気味に外反し，端部に平坦面をもつ。このうち，380，382 については杯受け部が浅い。また，380 の脚部接合は円盤充塡法により，382 は中実の脚柱部を接合している（図版 51—i・j）。389 は B 3 と B 5 の中間的な形態を示している。

B 4（79，387，388）は，杯たちあがり部外面の屈曲がやや強く，杯部内面がボール状のカーブをもつ。このうち 388 は全体に厚手の作りで，脚柱部は中実の接合をとっている。据部内面の高さは浅く，端部を上下に拡張し凹線文を施しており，全面に赤色化粧土を塗布している。

B 5（108，390，391）は，杯たちあがり部端がやや外反し，上部の平坦面が内傾気味となり，内面に段をもつ。脚柱部内面の上端はナデによりドーム状を呈している（図版 51—k）。

調整については，脚柱部に成形段階の面取り痕と考えられるもの（390）や，縦方向のヘラ削り痕を残すもの（387）なども見られるが，多くは縦方向のヘラ磨きと考えられる。杯部は，受け部内

外面で放射状・弧状ヘラ磨きをとるものが多く，共にたちあがり部付近で横方向のヘラ磨きがある。内面では，杯たちあがり部に縦または斜め方向のヘラ磨きを施すもの（382，384，389）もある。

多くの個体で，杯受け部外面のヘラ磨き以前の縦・弧状・横方向などのヘラ削り痕が確認される（図版51—iなど）。387は，ヘラ削りをそのまま残し，削り端にあたる杯部の屈曲部付近に横ナデを施している。また，杯部内面に横方向のヘラ削り痕をとどめるもの（388，390）も見られる。

C類

杯たちあがり部内面に弱い段をもち，口縁端部にかけてやや肥厚気味に外反する。

C1（80，392，395，396）は，総じてB類の杯たちあがり部にあたる部分が短く不明確となり，口縁端部が外反する。全形のわかる392では，中実の脚柱部に短く外反する裾部をもち，裾部内面の高さは極めて低い。調整は，杯部内外面に弧状・横方向のヘラ磨き，脚部から杯受け部外面にかけて縦方向のヘラ磨きを施している。

C2（143，399）は，口縁部が直線的に広く外反する。

D類

杯たちあがり部内面の段は不明瞭もしくはほとんど失われ，口縁端部にかけて緩やかに外反する。

D1（82，393，394，401）は，やや短く外反するもので，杯部の内外面には弧状・放射状・横方向などのヘラ磨きを施しているが，杯部受け部外面に脚部からのヘラ削りを続けたもの（82），同じくナデ状のハケ目調整を施したもの（393）もある。

全形のわかる394では，中実の脚柱部に短く外反する裾部をもち，裾部内面の高さは極めて低い。調整は，杯部内面に一方向及び横方向のヘラ磨きを施す。脚部外面には成形時の面取りが残り，杯部外面にかけてナデ状のハケ目調整痕跡が見られる。

また，401の杯受け部外面のたちあがり部との段は，貼り付けにより形成されている。

D2（81，109，402）は，D2の401口縁部を大きく外反させた形をとる。

D3（397）は，杯たちあがり部が短く直線的に終えるもので，内外とも放射状のヘラ磨きを施している。

E類

杯受け部内面が水平に近く，浅い受け部からボール状に近いカーブで内面の段に至り，杯たちあがり部は直線的に強く外反する（400，403～406）。

400は，やや小型で杯たちあがり部内面の段から外反部にかけて肥厚気味に内湾し，外反するたちあがり部の拡張の度合いは少ない。401は，ほかの2点がくすんだ茶褐色系の胎土であるのに対して，乳褐色系の明るく細かな胎土で，器壁の厚さ，調整，全体的なシャープさなどで異なる。406は，杯たちあがり部内面の段から水平に近く大きく外反する。杯部の復元口径は36.2cmで，ほかの高杯形土器に比べて大きい。接点はないが，杯部，脚柱部，脚端部の各部位が遺存しており，円盤充塡法をとるものとしては，全形のわかる唯一の資料である。これと近似する胎土，色調，調整をとるものとしては393，400，401があげられる。

脚部・脚台部

AからD類まで4分類したうち，高杯形土器に対応すると考えられるもの（A～C2類）を脚部，鉢形土器に対応すると考えられるもの（C3～D類）を脚台部と呼ぶ。

A類

B類以下の分類にあてはまらないもので，407は，脚端部を下方にやや拡張し円孔をもつ。調整は内面にヘラ削り，外面には縦方向のヘラ磨きが見られ，赤色化粧土が塗布されている。緻密な茶褐色系の胎土で，備後南部を含めた備中地域などからの搬入資料と考えられるが，対応する杯部はない。

83は，脚端部下方に大きく拡張し，端面に凹線文を，裾部にヘラ描文を施している。

B類

総じて長脚の脚柱部からラッパ状に開く裾部をもち，脚部の接合で分類した。

B1（408，409）は，杯部と脚部の接合に円盤充填法をとるもの（図版51—f）で，408は，内面上半に絞り目，下半にヘラ削り痕をとどめる。外面は，縦方向の細かなハケ目調整の上に，縦方向のヘラ磨きを行い，裾部には弧状のヘラ磨きを施しており，端部の拡張はない。杯部は408内面に放射状，409外面に弧状ヘラ磨きを施している。

高杯形土器B3類の380，E類の403，406が対応する。

B2（110，111，410）では円盤充填痕跡は見られず，内面上部がナデにより水平ないしはドーム状を呈している。端部が遺存する111では，端部下方を更に外反させ，裾部外面に段をもった形となる。111では内面のヘラ削りが上部まで及んでいる。また，111では複数の円孔が1段，410では2段認められる。

高杯形土器B5類の390，D1類の82が対応する。

このほかに，杯部との接合部を欠く411～413などがB類のものと考えられる。このうち，411はほかの脚部類に比べて径が大きく，端部の平坦面に凹線文を施しており，外面にヘラ削り痕を残した高杯形土器の杯部の可能性もある。

C類

長脚系の脚柱部の中実化と，その短脚化が見られるもの。

C1（84，414，416）は，脚柱部上半が中実で，内面のヘラ削りが上部に及ぶもので，脚端部を脚柱部裾に巻きつけるように接合している（図版51—g）。

高杯形土器B1類の386，B3類の382，B4類の387が対応する。

このうち382では，中実の脚柱部を杯部に接合後，杯部外面の脚部周辺に粘土を貼り付けた可能性が高い（図版51—j）。

C2（415，417，418）は，脚柱部がほぼ中実化し脚裾部内面が極めて低くなるものと考えられる。

高杯形土器B4類の388，B5類の391，C1類の392，D1類394が対応する。393についても杯部の形態や脚柱部径の大きさなどからD1類の可能性がある。

C3（420）は，形態的にはC2の小型にあたり，短く外反する脚端部を丸く終える。

脚台付鉢系C2類の301が対応するものと考えられる。

C4（85，419，427）は，杯部との接合部からラッパ状に開き脚端部に至るもので，427は杯部に接合した，脚柱部にあたる粘土の外面に，粘土板を巻きつけて脚台部を成形している（図版51—h）。

C類に属すると考えられる脚端部は，422，430と，1，421，432～435，437のグループ，86，87，423～426，428，429，431のグループなどがあげられる。このうち，422，430は不明確だが，421，437はC3に，1と432～435は，同じく脚裾部内面が平底化したものと考えられ，脚台付鉢系C2類の302を対応させておく。また，後者のグループは概ねC4に対比させておく。

D類

鉢形土器類の脚台部と考えられるが，対応する体部は不明である。

D1（88，436，442～446）は，脚裾部が短くのび端部を丸く終えるもので，粘土紐を貼り付けた445，446までも一括した。88は体部内面が平坦で，横方向のヘラ磨きを施しており，広口の鉢形土器の脚台部と考えられる。

D2（438～441）は，脚端部に平坦面をもつものを一括した。440は，体部外面下端にタタキ目と思われる痕跡をとどめている。

底部

平底

A類

底部付近で内湾気味となるもの（447～449）。

B類

体部のたちあがりがやや急で，底部との屈曲部が明瞭なもの（116，450，451），境がやや不明瞭なもの（461～463），大型で屈曲が明瞭なもの（452～454）などがある。

C類

B類に比べて体部のたちあがり角度が小さく，屈曲部が明瞭なもの（23），同じくやや不明瞭なもの（90，92，118，136，147，464～466），大型で明瞭なもの（144，455～460）などがある。

あげ底

A類

平底と同様に，底部付近で内湾気味となるもの（89，119）。

B類

体部のたちあがりがやや急で，底部との屈曲部が明瞭なもの（93，117，468～471），同じくやや不明瞭なもの（91，94，487），大型のもの（473～479）などがある。

C類

B類に比べて体部のたちあがり角度が小さく，屈曲部が明瞭なもの（472，480～486），大型のもの（95）などがある。

底部は，明瞭なあげ底は少なく，また，平底とあげ底の差も少ない。底部の大小と，体部の傾斜角度の差でまとめられる。

調整では，内面は概ねヘラ削りを施すが，ハケ目調整痕をとどめるもの（470）もある。外面は，板状工具による面取り痕をとどめるもの（457，459，460，465），ハケ目調整（454，455，476，478）及びハケ状工具によるナデ状の痕跡をとどめるもの（456），ヘラ磨きを施すもの（90，95，147）などがある。また，479下半には横方向の粗いハケ目もしくはタタキ痕跡のような調整痕が残されている。

手づくね土器

資料数が少ないため，便宜的に2分類した。

A類

球形もしくは半球形の体部に不明瞭な平底をもつもの。

A1（357，358）は，半球形で不明瞭な平底をもつもの。押圧成形後，外面にナデ調整を施している。

A2（77，78，359，360，363）は，不明瞭な平底の球形から半球形の体部に，外反する口縁部をもつもの。押圧成形後，外面にナデ調整を施しており，内面にヘラ削り痕跡をとどめるもの（77）もある。

B類

口径より胴部径が小さく，外反する口縁部をもち，深鉢の形態をとる（352，353，355，356）。押圧成形後，外面にナデ調整を施しており，内面にヘラ削り痕跡をとどめるもの（352，353）もある。

このほか，破片資料の361，362，365が，手づくね土器と同一の胎土，焼成，調整である。

土製品

弥生土器に伴う土製品として120，488の2点がある。

120は，現存長3.4cm，幅2.15cm，厚さ1.9cm，重量15.36gの土製品で，上下両端を欠いている。断面はいびつな楕円形で，緩いカーブをもち，背面側に幅5mm程度の縦の面取りを行い，斜めのヘラ描きの刺突文を配している。ややすぼみ気味の一端では，内面側にかけて斜落痕跡がある。本来の形態は不明であるが，人の手と肩を欠く装飾した腕の部分，または勾玉などの可能性が考えられる。

488は，現存長4.3cm，幅1.9cm，厚さ2.4cm，重量15.2gの土製勾玉で，下端を欠いている。上下及び両側面を中心に面取りし，中程から緩くカーブし，穿孔は両方から行っている。

2　古式土師器

古式土師器は，SB11，SB12，SB14，SK3などから出土した30点余りを報告した。資料数が少ないため，器種の分類にとどめた。

壺形土器

123は，頸部が細く立ち上がる直口壺で，頸部から上を欠く。胴部は扁平で最大径をほぼ中位にもち，肩部に斜めのヘラ描文の痕跡をとどめている。底部は低いあげ底状を呈し，赤色化粧土の痕跡が認められる。

26，121，122は球体の体部から，ラッパ状に直線的に外反する広口壺で，内面はシャープなヘラ削りを，外面には縦方向のヘラ磨きを施している。

甕形土器

27は，ナデ肩で，胴部最大径をほぼ中位にもついびつな球体で，くの字状に外反する単純口縁をもつ。調整は，内面の胴部上半までを縦に，肩部に横方向のヘラ削りを，外面は主に縦方向の細かなハケ目調整を行っている。破片資料の124もここに分類した。

30，32，127，155は，ナデ肩で，やや胴の張った球体の体部と考えられ，くの字状に外反する口縁端部に内傾気味の面をもつ。32は，肩部に横ナデの不明瞭な稜をもつ。これらの甕形土器は，いわゆる布留0式[6]と呼ばれる，初期布留式土器群の甕形土器である。

20，125，154は，外反する複合口縁のもので，山陰系の甕形土器口縁部である。破片資料のため詳細は不明であるが，一応，初期布留式土器群に伴う可能性のあるものとして分類した。

鉢形土器

29，35，126は，ほぼ球体の体部に，広口の単純口縁をもつ。

36～38は，ボール状の杯部に直立気味で直線的に外反する単純口縁をもつもので，38は杯部内面にヘラ削りを行っている。

31，39～44は，浅いボール状の杯を呈するもので，浅めでやや小型のもの（39～42）と，深めでやや大型のもの（31，43，44）がある。器面調整は，主にナデ調整を行うが，内面にヘラ磨きを施すもの（31），ハケ目調整を施すもの（43），外面下半に成形時の押圧痕跡をとどめるもの（44）などもある。また，42～44外面には成形時のものと考えられる縦方向の細かな亀裂が見られる。

高杯形土器

33，34は，ラッパ状に直線的に開く脚部に，ボール状の杯部をもつもので，34の脚部内面にはヘラ削り痕跡をとどめている。

土製品

古式土師器に伴う土製品として129がある。最大長4.0cm，幅4.0cm，厚さ2.15cm，重量31.5gの土製紡錘車で，穿孔は一方向から行っている。

石器類（第48～51図，図版49・50）

石器類は，SX1を中心に46点出土し，うち図示可能な25点を報告した。以下，分類別に概要を述べる。

打製石器類

打製石器は，総数35点出土した。未報告の21点を含めて，全て流紋岩系もしくは凝灰岩系などの石材が用いられている。

石鏃（490～492）

490は凹基の三角形，491は平基の三角形，492は柳葉形の石鏃である。490は素材剝片の主要剝離面を縦方向に，492は横方向に用い，共に対向する辺の表裏を入れ替えて調整を行っており，表裏面の中央部に平坦な剝離面を残している。また，491は未製品である。490，491はSX1，492はSB7からの出土である。

楔形石器・同削片（494～497）

494は縦長剝片，495は横長剝片を素材としている。共に敲打側の辺が内反り，刃部側の辺が外反りしている。敲打側の辺の潰れが著しく，裁断面を有している。496，497は楔形石器の削片で，496は器面を広くとどめ，主要剝離面下端にバルブをもつ。497は裁断面にあたる面の中央の節理部分から剝離したもので，全てSX1からの出土である。

使用痕のある剝片（493，499）

縦長状の不定形な剝片を素材とし，背面構成では493が主要剝離面と逆方向の剝離痕で，499は節理面をとどめている。493はSB11，499はSX1からの出土である。

剝片（498，500，501）

498は，背面下端に極めて平滑な研磨面をとどめており，砥石を転用した石核から剝離された可能性がある。剝離時に，打面側を欠損しているが，背面には打面の一部と，主要剝離面と同一方向及び直交方向の剝離痕をとどめている。

500，501は同質の石材で，500は平坦な剝離痕を打面としている。背面構成では，500は主要剝離面と同一方向及び直交方向，501は同一方向を示し，共に素材の分割面と思われる平坦な剝離面をとどめている。498はSK1，ほかはSX1からの出土である。

ハンマーストーン（513，514）

513は，背面及び周囲に平坦な面をとどめており，立方体の自然礫を分割した板状の剝片を素材とする。一辺に広い剝離面をとどめており，この面の自然面との縁辺と，これに対向する辺の稜線部分に敲打痕が集中する。また，ほかの一面にも著しい敲打痕跡が認められる。514は，棒状

の自然円礫を用い，その一辺の稜部と一端に敲打痕跡をとどめている。513はSK2，514はSX1からの出土である。

磨製石器類

磨製石器は，石斧類と砥石の11点を報告した。使用石材は前者が細粒閃緑岩類，後者が半花崗岩類である。

部分磨製石斧（502）

502は，矩形で刃部部分のみを研磨した部分磨製の石斧である。成形段階の剝離が粗いため，刃部に偏りがあり，基部側には高まりを残している。研磨部分は表裏の刃縁部のみで，背面側中央に残る平滑な面は，自然面の可能性がある。SX1からの出土である。

太型蛤刃石斧（503～507）

504は折損した刃部，505は同じく体部の破片である。研磨は入念に仕上げられている。503も折損した刃部，506は刃部を欠いている。共に敲打具に転用されており，503では刃部部分と折損面の稜部に著しい敲打痕跡をとどめている。また，506の両側面と体部の一面には，敲打痕とは異なる，極めて浅い横方向の研磨面の乱れがある。部位及びその状況から，石斧の着柄痕跡の可能性が高い。

また，507は太型蛤刃石斧の未製品の基部側の折損資料で，全面に成形段階の敲打痕跡があり，節理面で折損している。503，507はSB8，504はSX1，505，506はSB9からの出土である。

砥石（508～512）

508以外は折損資料であるが，512以外は破損後に再利用している。主要な研磨面（以下，主研磨面と略）が平坦な510～512と，緩いカーブをもつ508，509に分かれる。特に508では，主に長軸方向の擦痕が残る主研磨面が，強い外反りを示している。砥石としての利用を考えると，背面も外反りするため，不安定である。一方の短辺及び側辺のそれに接する部分，裏面の一部などにも研磨面が残されている。背面に残された剝離痕及び敲打痕跡の状況からみて，折損後の再利用，もしくはほかの石製品の転用などの可能性もある。なお，508，509は被熱しており，509は剝離面の一部が被熱時に剝落している。508はSB12，509～511はSX1，512はSB7からの出土である。

(註)

(1) 古式土師器との区分については，ここでは布留0式期導入以前と考えられる在地的な土器群までとした。また，分類にあたっては，資料中に備後南部をはじめ複数の地域の要素が見られ，器面が風化した破片資料が中心であることから，同一器種でも分類基準に差が生じている部分もある

(2) ハケ目原体でナデたような調整痕跡をとどめるもので，「板ナデ」などと呼ばれている。当遺跡では，資料の遺存状態がよくないため，「ナデ状のハケ目調整」という表現で一括した

(3) 当該期の壺形土器などに施される凹線文については，「疑似凹線」として区別されることが多い。当遺跡では，資料の遺存状態がよくないため，ここでは201の例も含めて凹線文として一括しておく

(4) 小野忠熙ほか『吹越遺跡第2次調査概要』 山口県平生町教育委員会 1972年など

(5) 近藤 正，前島己基「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻4号 日本考古学会 1972年

(6) 寺沢 薫「近畿古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県教育委員会 1986年

第1表　SK1，SK2，SX1の出土土器構成表

	壺形土器	甕形土器	鉢形土器	高杯形土器	脚台形土器	脚・脚台部	底　部	手づくね土器	土製品	断片等不詳資料	搬入資料
SK1 報告総数　47点	8	11	4	4	—	6	7	2	—	5	—
土製品までの点数　42点 同　比率	19.0%	26.2%	9.5%	9.5%	—	14.3%	16.7%	4.8%	—		
SK2 報告総数　27点	3	5	2	3	—	2	4	—	1	5	2
土製品までの点数　20点 同　比率	15.0%	25.0%	10.0%	15.0%	—	10.0%	20.0%	—	5.0%		
SX1 報告総数　341点	55	78	59	31	4	40	41	10	1	13	9
土製品までの点数 319点 同　比率	17.2%	24.5%	18.5%	9.7%	1.3%	12.5%	12.9%	3.1%	0.3%		

第2表　SX1出土土器の器種別構成表（混入・破片等不詳資料を除く319点を対象とした）

①　壺形土器（55点）

	小分類点数	同 比	類別 点数	同 比
A1	2	3.6%	6	10.9%
A2	3	5.5%		
A3	1	1.8%		
A4	—	—		
B1	3	5.5%	11	20.0%
B2	3	5.5%		
B3	3	5.5%		
B4	2	3.6%		
C1	6	10.9%	8	14.5%
C2	2	3.6%		
D1	2	3.6%	4	7.3%
D2	2	3.6%		
D3	—	—		
D4	—	—		
E	—	—	—	—
F1	1	1.8%	26	47.3%
F2	2	3.6%		
F3	5	9.1%		
F4	13	23.7%		
F5	2	3.6%		
F6	1	1.8%		
F7	2	3.6%		

②　甕形土器（78点）

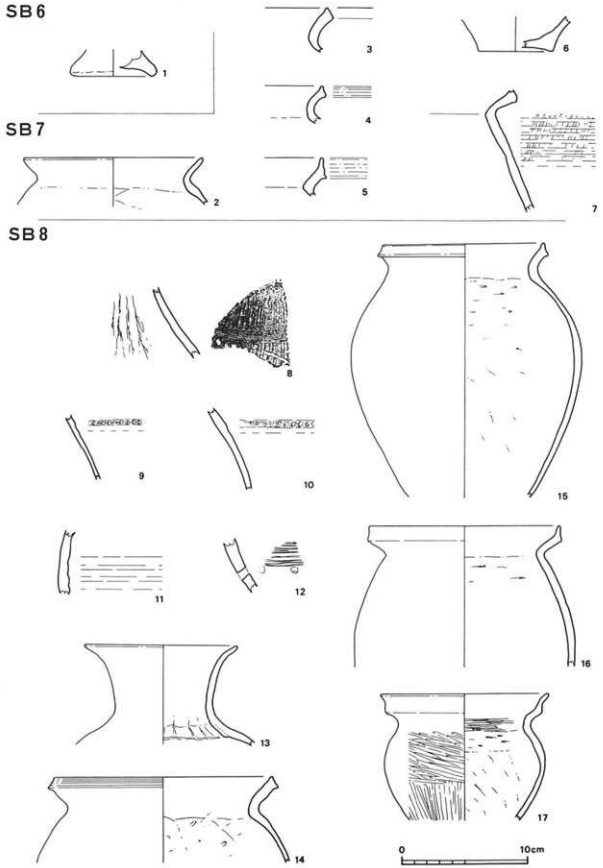
	小分類点数	同 比	類別 点数	同 比
A	1	1.3%	1	1.3%
B1	—		1	1.3%
B2	1	1.3%		
C1	3	3.8%	13	16.6%
C2	2	2.6%		
C3	8	10.2%		
D1	8	10.2%	28	35.9%
D2	9	11.5%		
D3	2	2.6%		
D4	5	6.4%		
D5	2	2.6%		
D6	2	2.6%		
E1	10	12.8%	27	34.6%
E2	6	7.7%		
E3	10	12.8%		
E4	1	1.3%		
F1	7	9.0%	8	10.3%
F2	1	1.3%		

③　鉢形土器（59点）

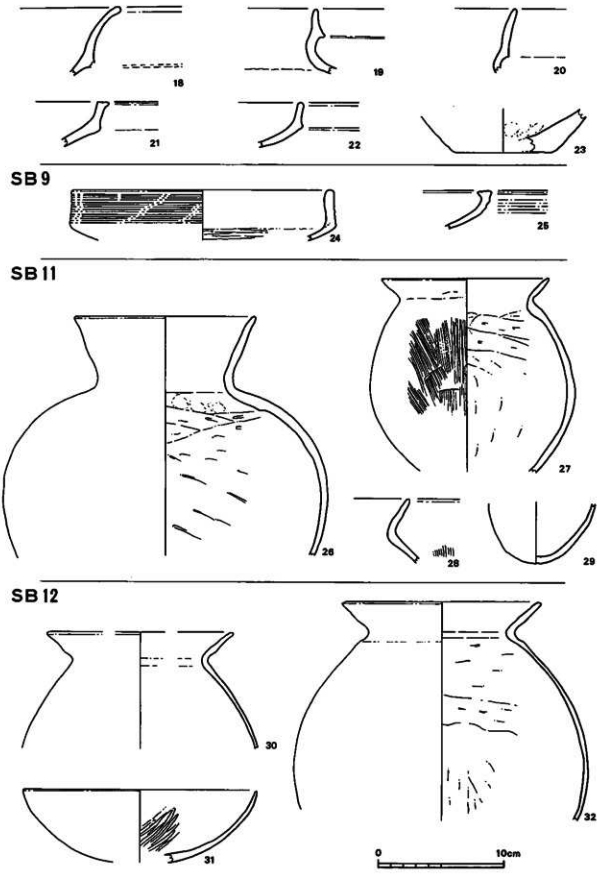
		小分類点数	同 比	類別 点数	同 比	系別 点数	同 比
脚台付鉢系	A	1	1.7%	1	1.7%	21	35.6%
	B	2	3.4%	2	3.4%		
	C1	4	6.8%	10	17.0%		
	C2	6	10.2%				
	D	5	8.4%	5	8.4%		
	E	3	5.1%	3	5.1%		
浅鉢系	A	3	5.1%	3	5.1%	29	49.1%
	B	1	1.7%	1	1.7%		
	C	2	3.4%	2	3.4%		
	D1	4	6.8%	9	15.3%		
	D2	3	5.1%				
	D3	2	3.4%				
	E	3	5.1%	3	5.1%		
	F1	5	8.4%	11	18.6%		
	F2	6	10.2%				
深鉢系	A	2	3.4%	2	3.4%	9	15.3%
	B1	2	3.4%	4	6.8%		
	B2	2	3.4%				
	C	2	3.4%	2	3.4%		
	D	1	1.7%	1	1.7%		

④　高杯形土器（31点）

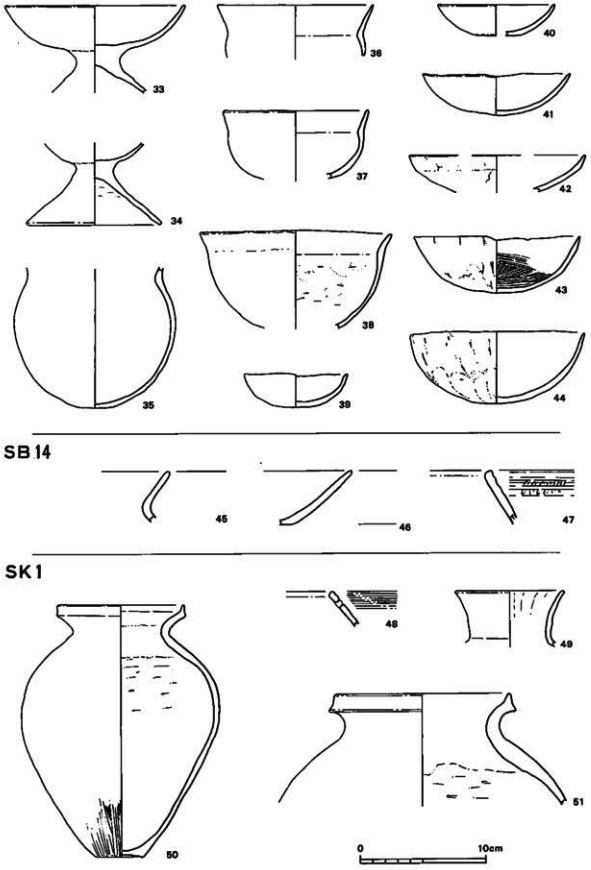
	小分類点数	同 比	類別 点数	同 比
A1	3	9.7%	4	12.9%
A2	1	3.2%		
B1	3	9.7%	13	42.0%
B2	1	3.2%		
B3	4	12.9%		
B4	2	6.5%		
B5	3	9.7%		
C1	3	9.7%	4	12.9%
C2	1	3.2%		
D1	3	9.7%	5	16.1%
D2	1	3.2%		
D3	1	3.2%		
E	5	16.1%	5	16.1%



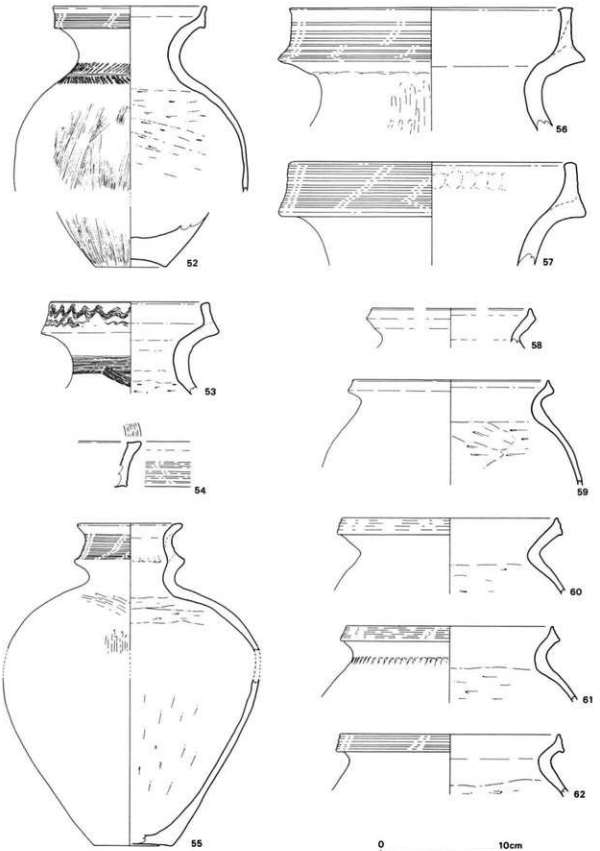
第18図　出土遺物実測図（1）（1：3）



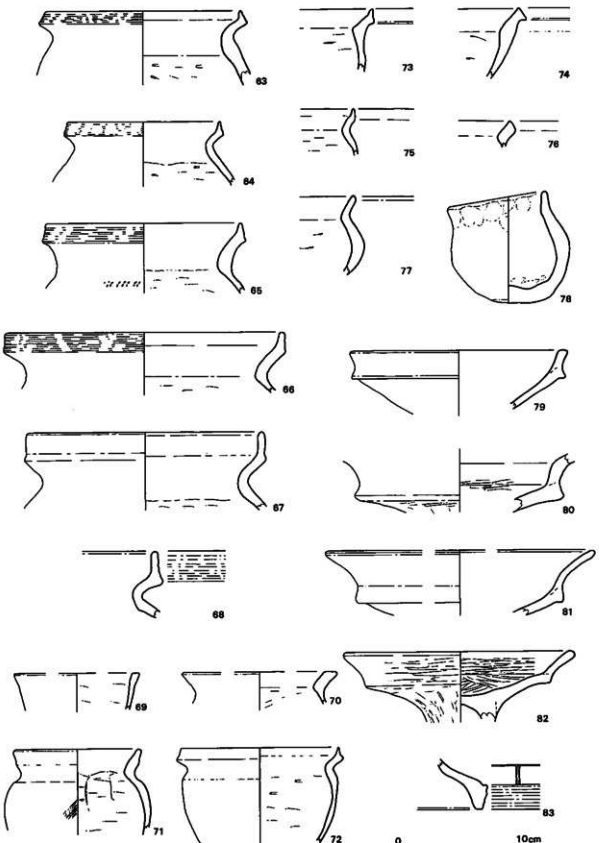
第19図　出土遺物実測図（2）（1：3）



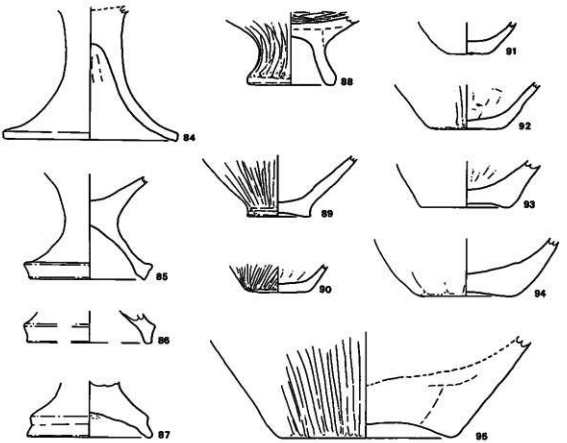
第20図　出土遺物実測図（3）（1：3）（50は1：6）



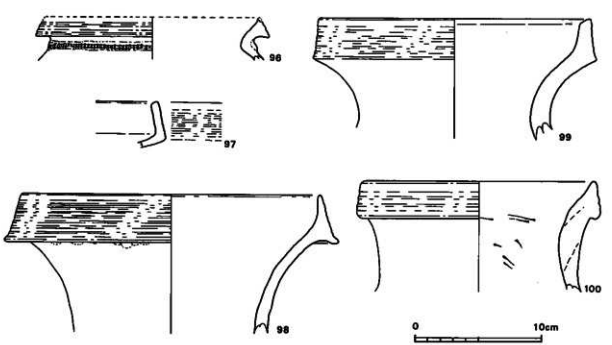
第21図　出土遺物実測図（4）（1：3）（52，53，55は1：6）



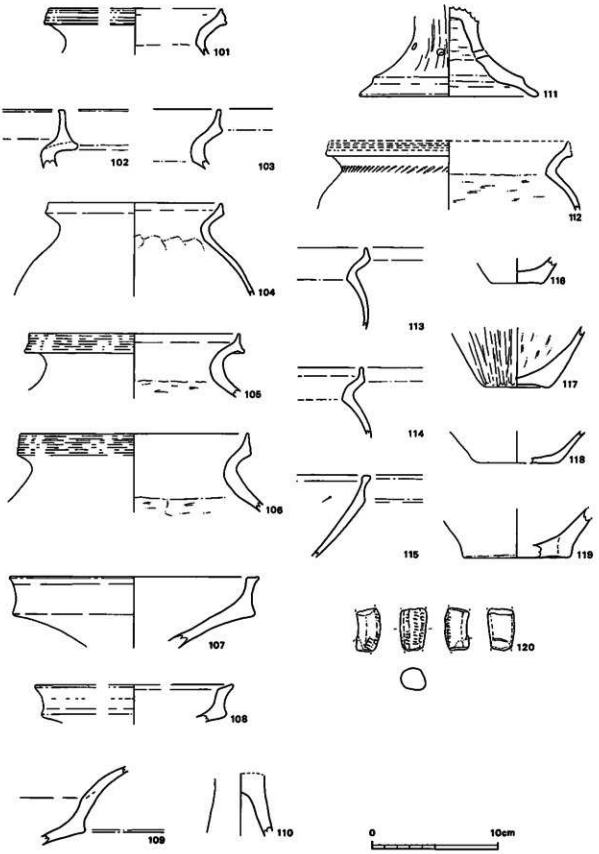
第22図　出土遺物実測図（5）（1：3）



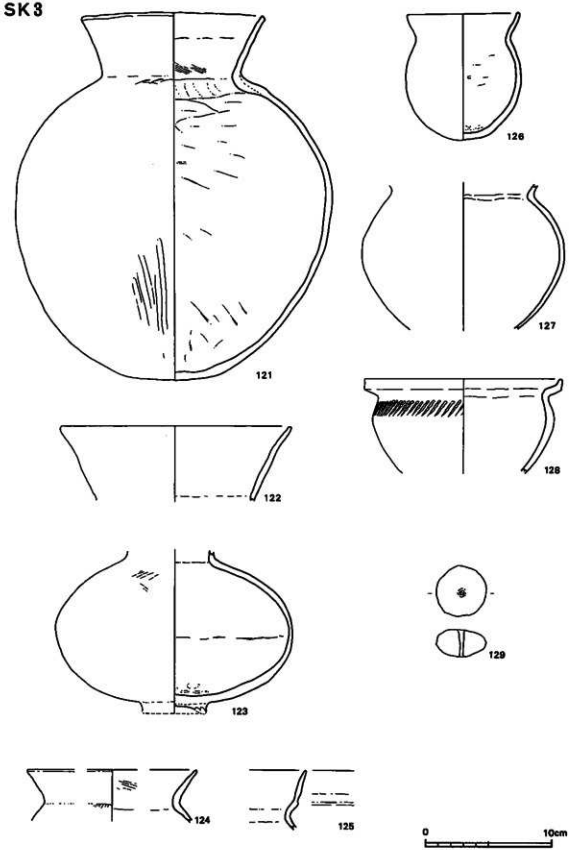
SK2



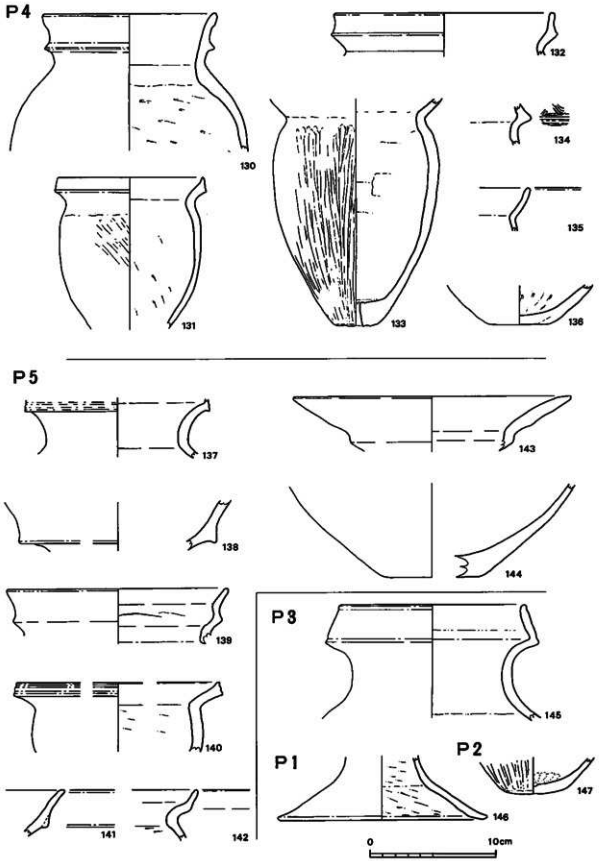
第23図　出土遺物実測図（6）（1：3）



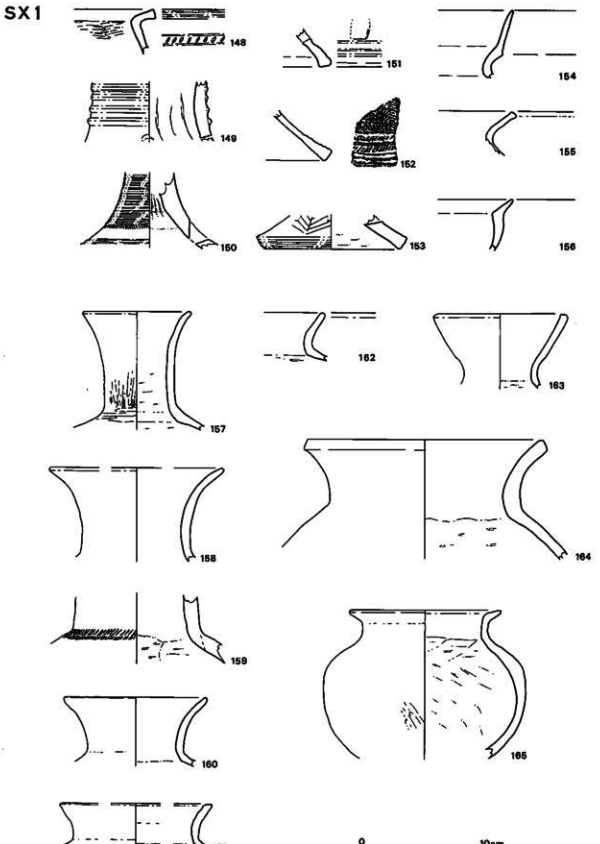
第24図　出土遺物実測図（7）（1：3）



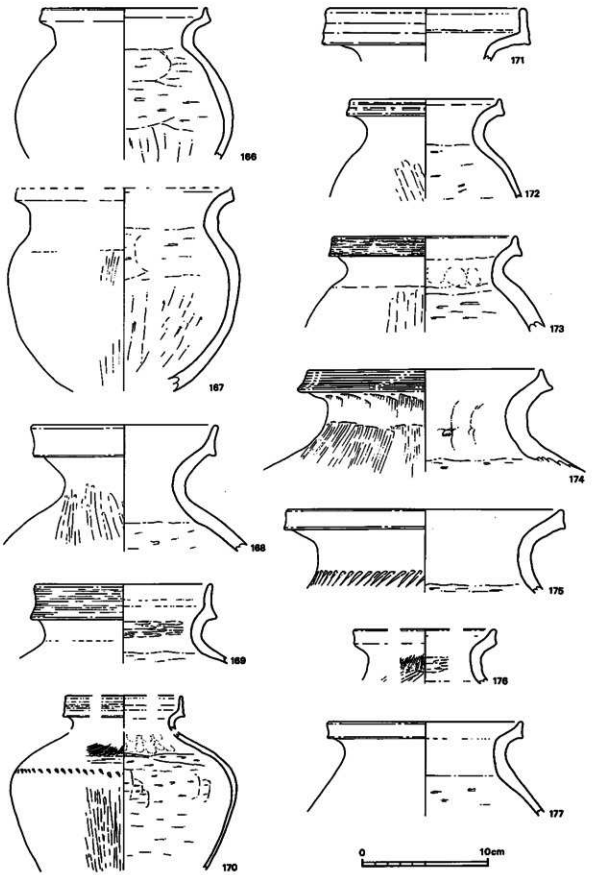
第25図　出土遺物実測図（8）（1：3）



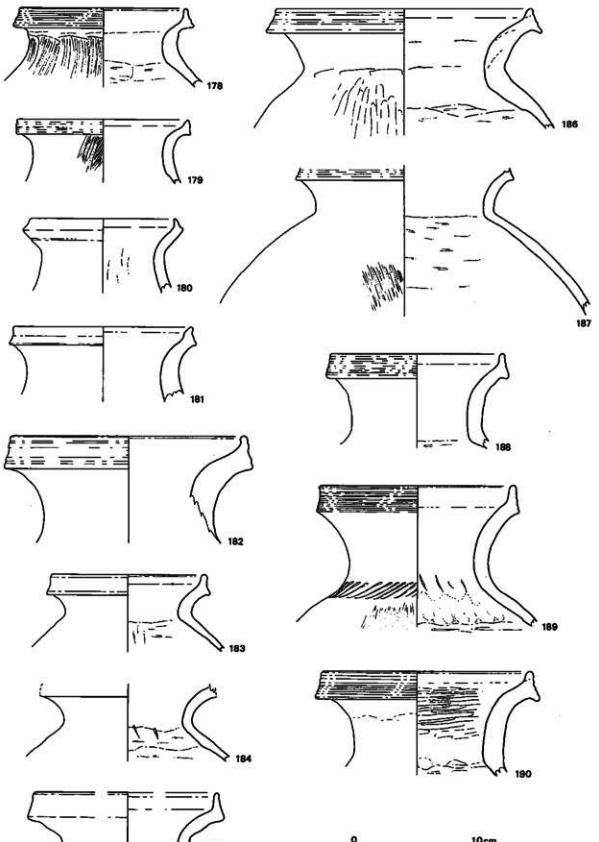
第26図　出土遺物実測図（9）（1：3）



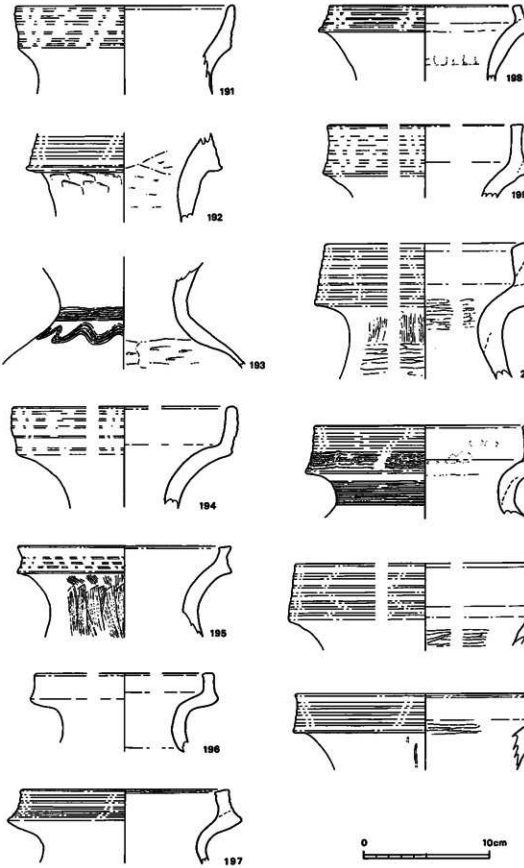
第27図　出土遺物実測図（10）（1：3）



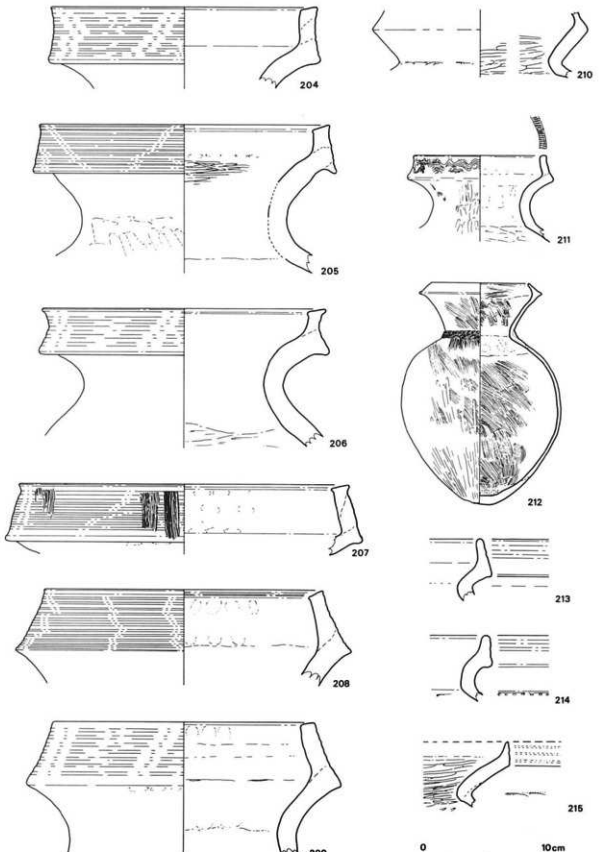
第 28 図　出土遺物実測図 (11) (1 : 3) (170 は 1 : 6)



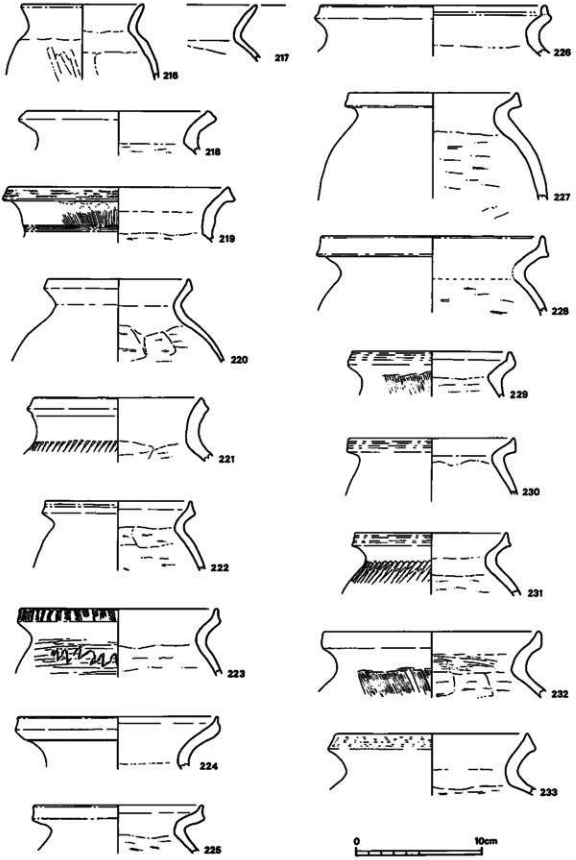
第29図　出土遺物実測図（12）（1：3）



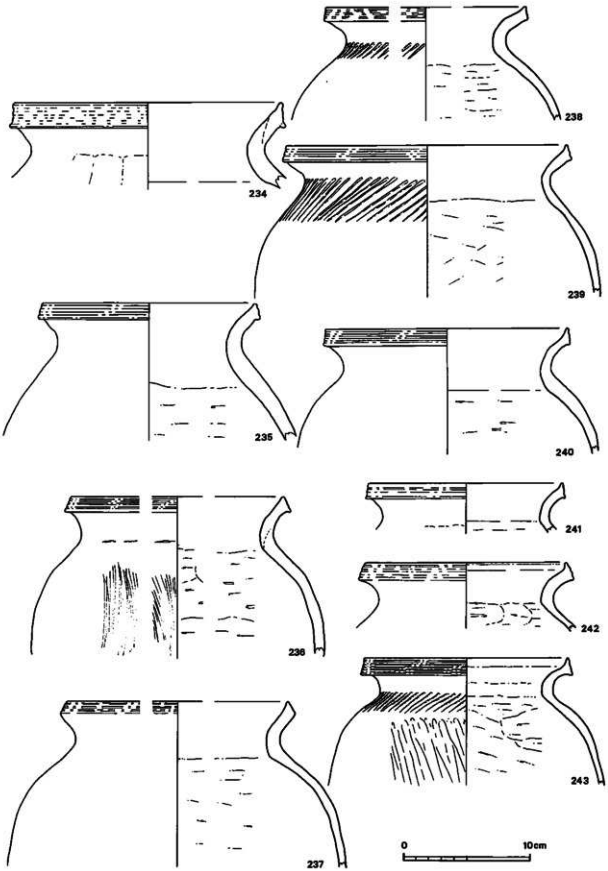
第30図　出土遺物実測図（13）（1：3）



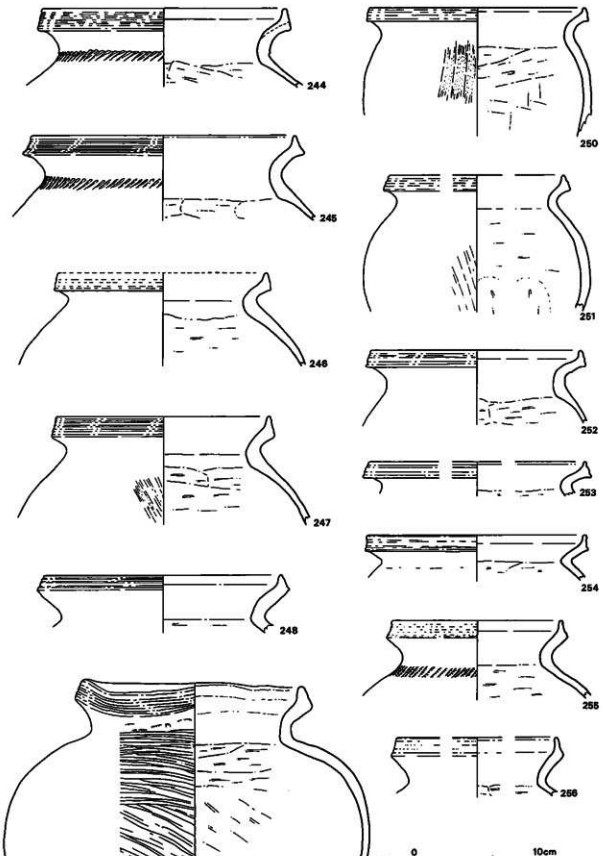
第 31 図　出土遺物実測図（14）（1：3）（211，212 は 1：6）



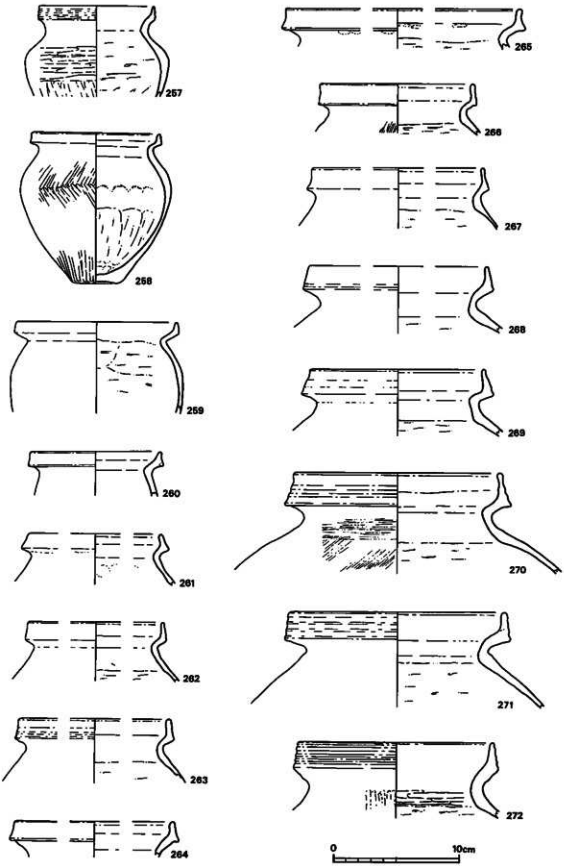
第32図　出土遺物実測図（15）（1：3）



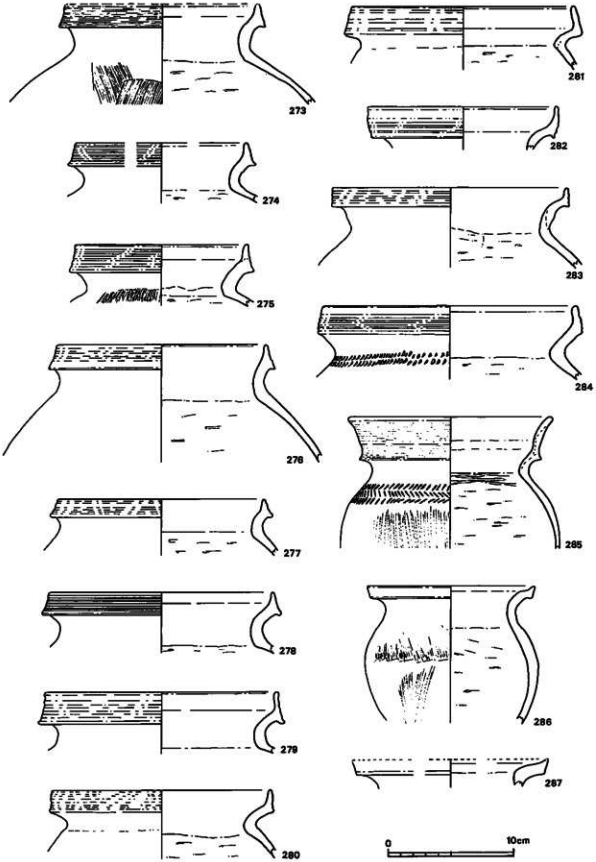
第33図　出土遺物実測図（16）（1：3）



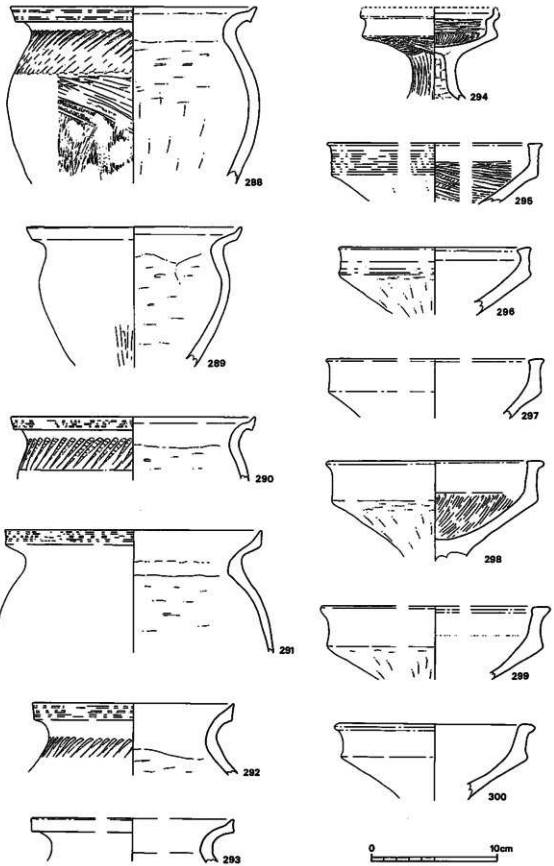
第34図　出土遺物実測図（17）（1：3）



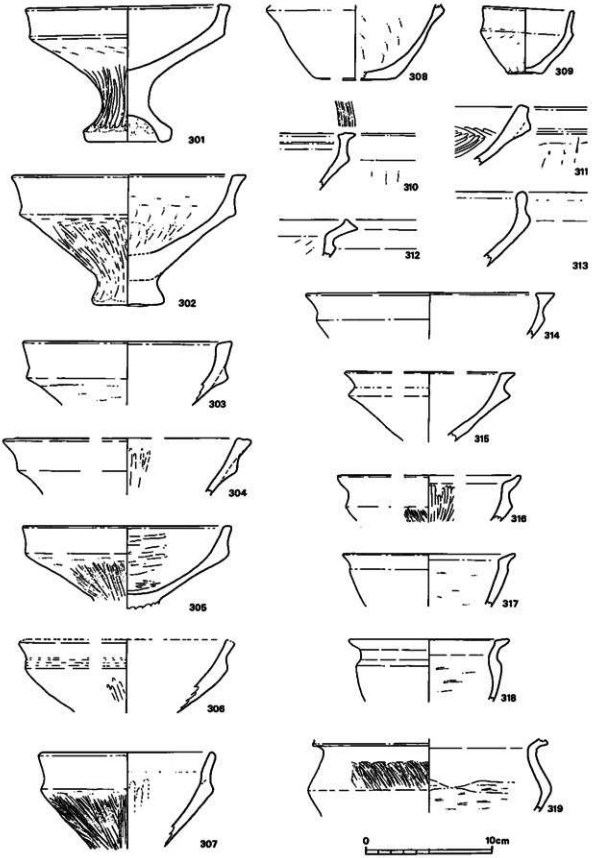
第35図　出土遺物実測図（18）（1：3）



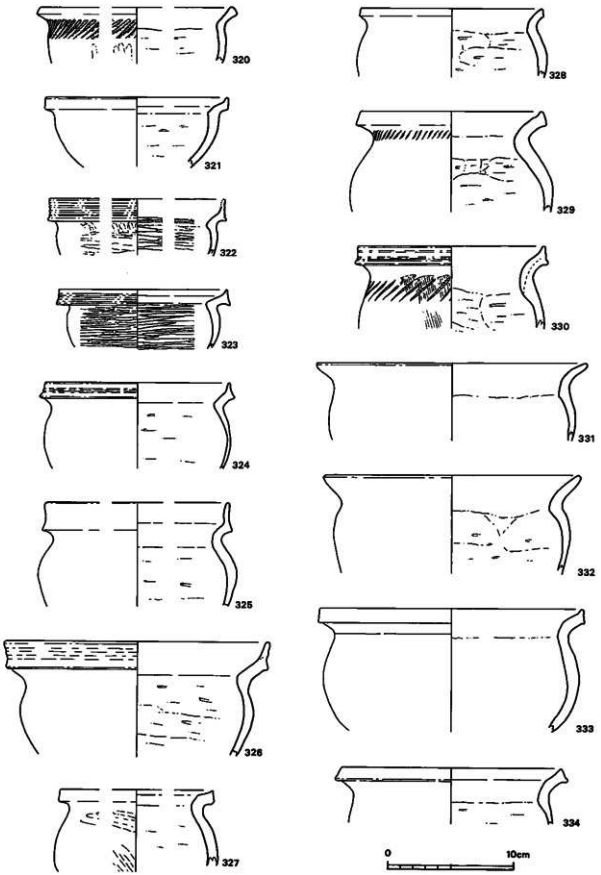
第36図　出土遺物実測図（19）（1：3）



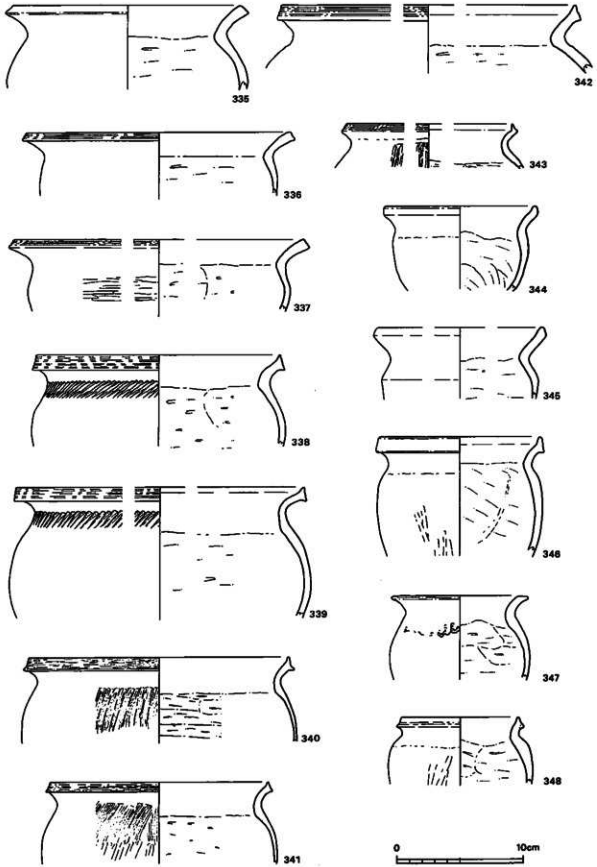
第37図　出土遺物実測図（20）（1：3）



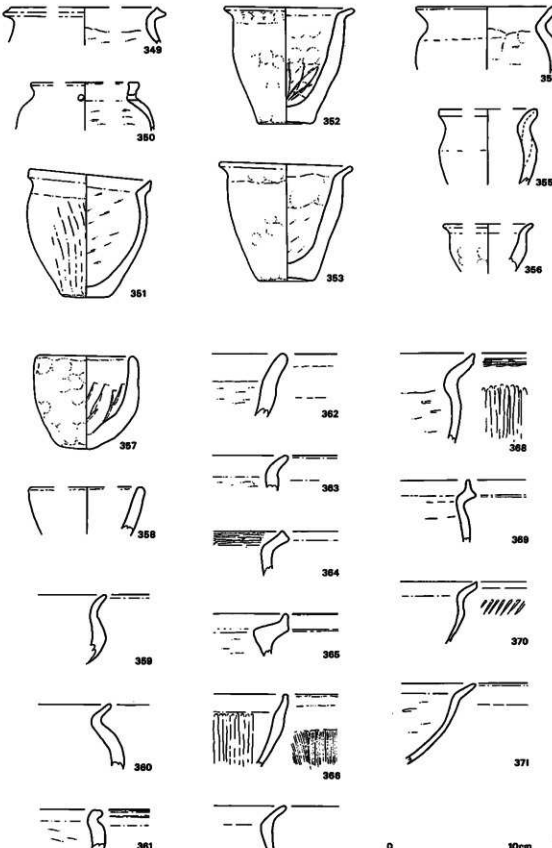
第38図　出土遺物実測図（21）（1：3）



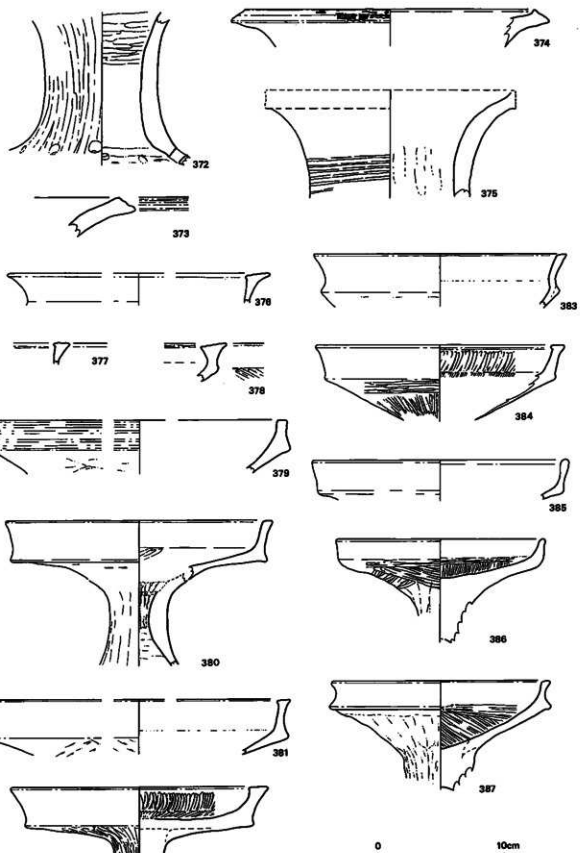
第39図　出土遺物実測図（22）（1：3）



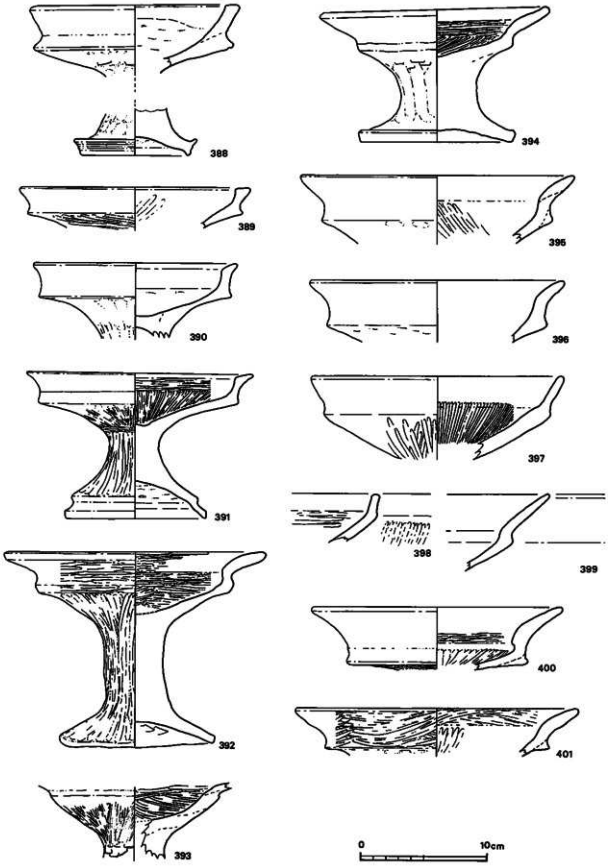
第40図　出土遺物実測図（23）（1：3）（343は1：6）



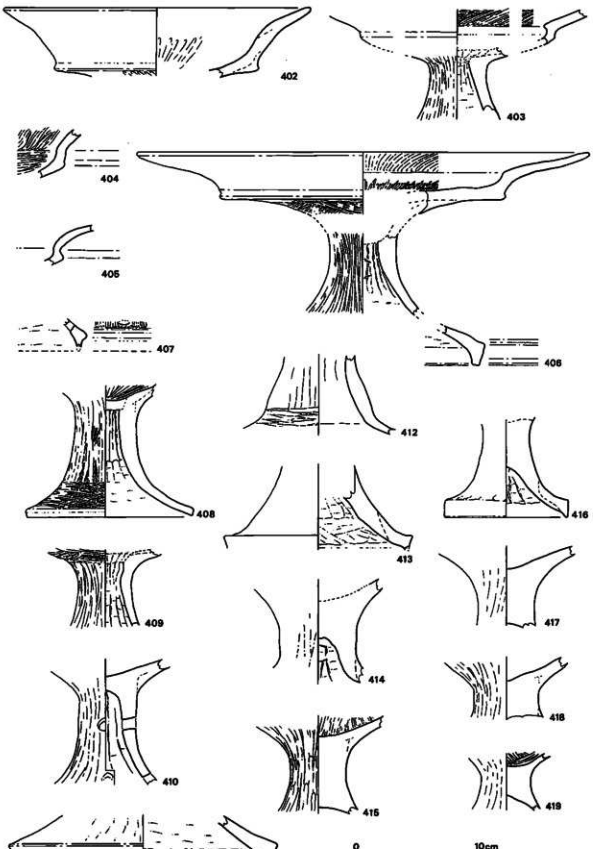
第41図　出土遺物実測図（24）（1：3）



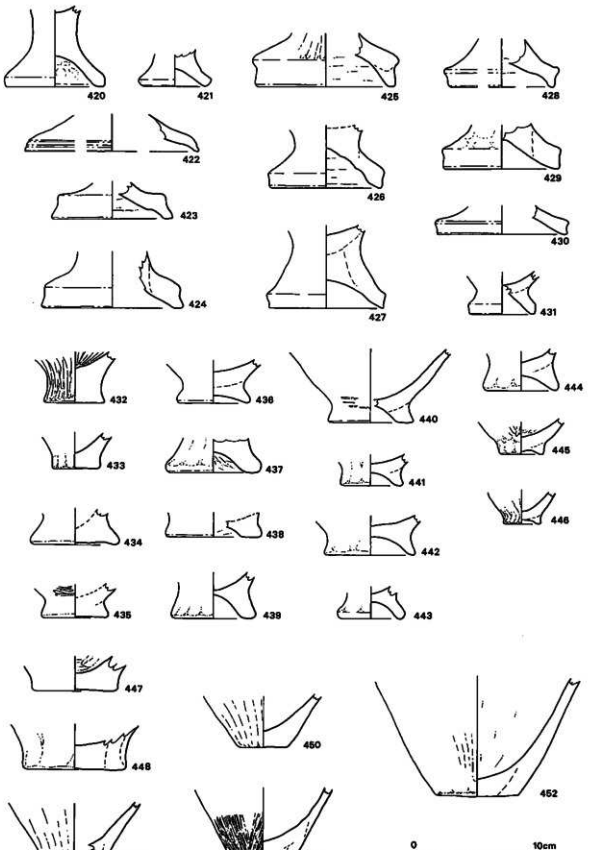
第42図　出土遺物実測図（25）（1：3）



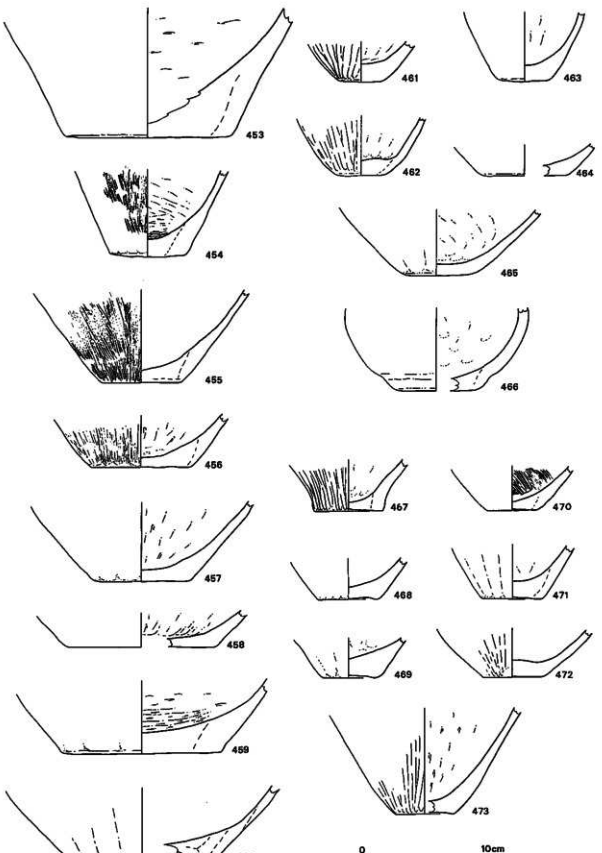
第43図　出土遺物実測図（26）（1：3）



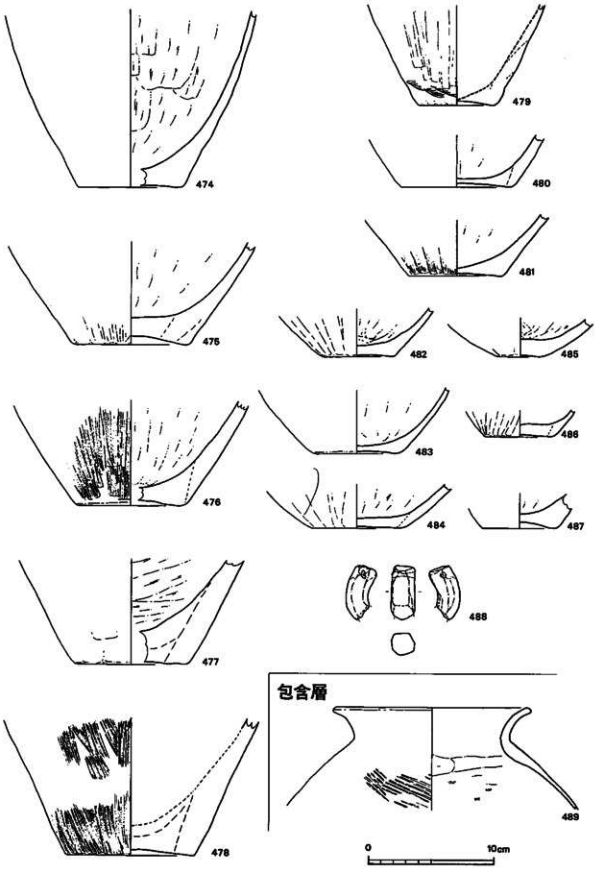
第44図　出土遺物実測図（27）（1：3）



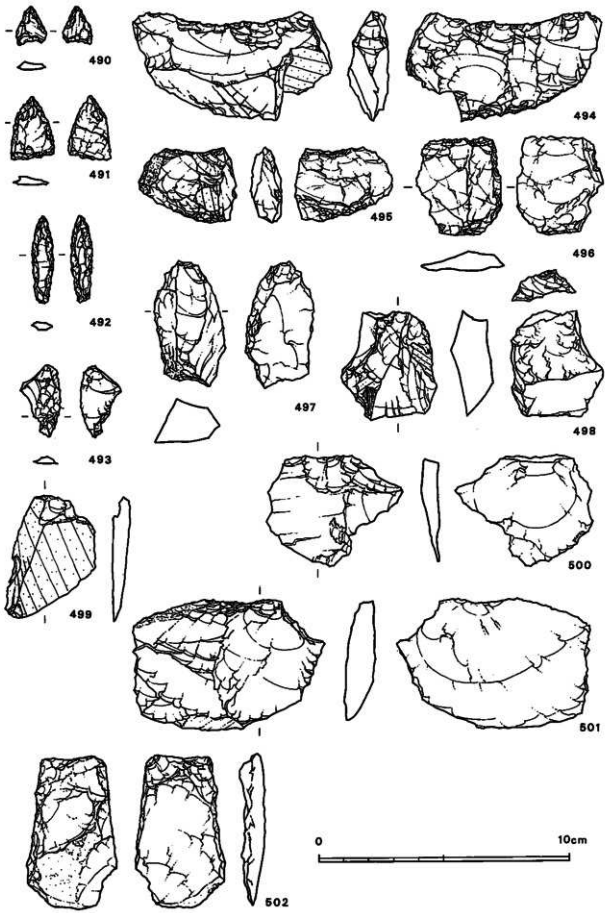
第45図　出土遺物実測図（28）（1：3）



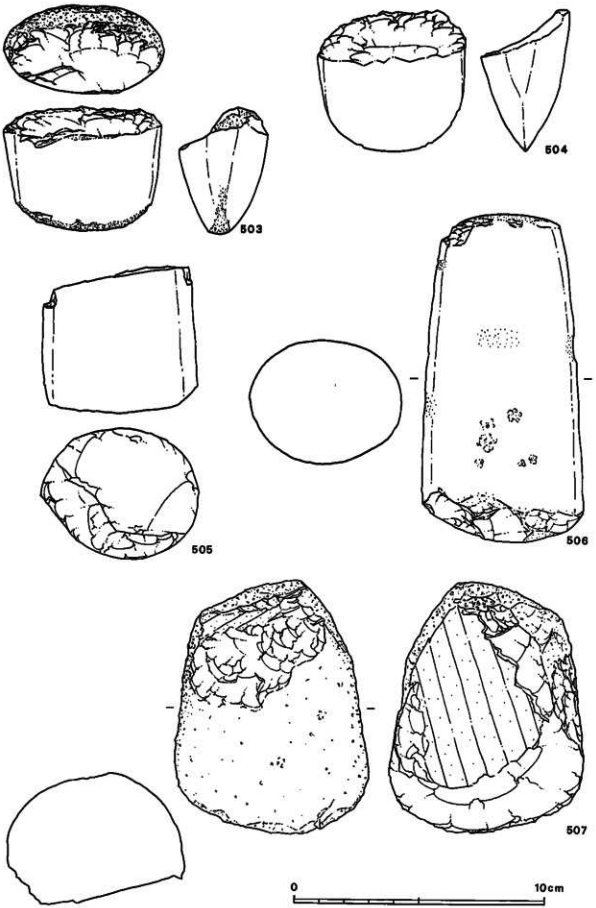
第46図　出土遺物実測図（29）（1：3）（454は1：6）



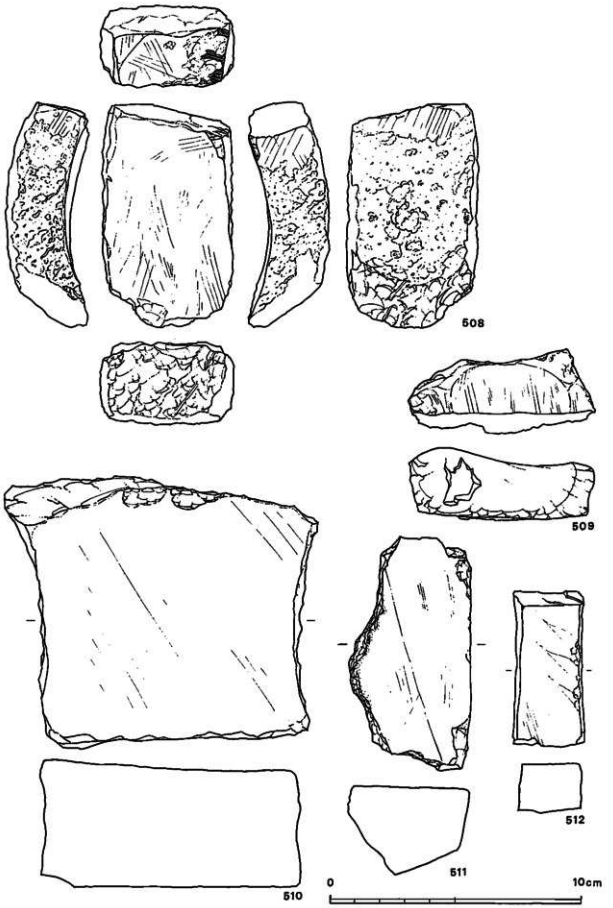
第47図　出土遺物実測図（30）（1：3）（479は1：6）



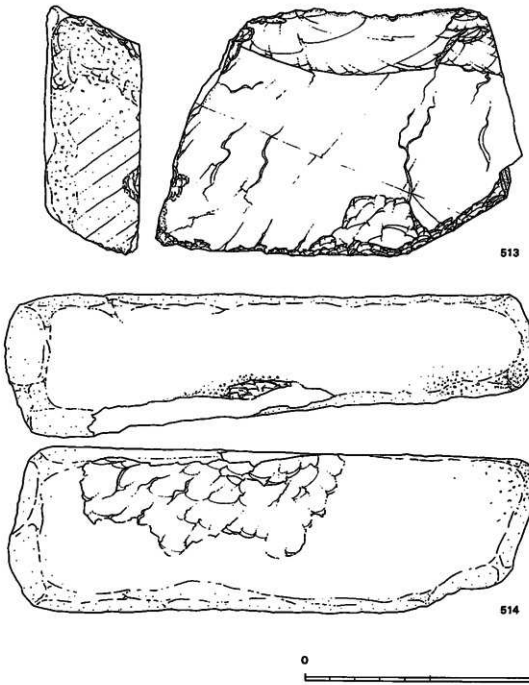
第48図　出土遺物実測図（31）（2：3）



第49図　出土遺物実測図（32）（2：3）



第50図　出土遺物実測図（33）（2：3）



第51図　出土遺物実測図（34）（2：3）

第3表　出土土器類観察表

（単位はcm，最大値を表示，カッコ内は復元値，ケズリ…ヘラ削りの略，ミガキ…ヘラ磨きの略，ハケ目…ハケ目調整の略）

出土遺構等名称	報告番号	器　種	法量 口径	法量 胴径	法量 底径・脚端径	法量 器高	形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
SB6	第18図1	脚・脚台部C3類	−	−	(6.20)	−	押圧成形後ナデ。	砂粒含む・淡乳灰色	普通・1/4片
SB7	第18図2	甕形土器A類	(14.20)	−	−	−	内面ケズリ方向不明。	細砂粒含む・明橙褐色	風化・1/4片
	第18図3	口縁部	−	−	−	−		砂粒やや目立つ・淡橙灰色	風化著しい・小片
	第18図4	口縁部	−	−	−	−	口縁端面に細い凹線3条を施す。	砂粒含む・淡橙灰色	良好・小片
	第18図5	口縁部	−	−	−	−	直立し上方に拡張する口縁端面に不明瞭な凹線2条を施す。	砂粒若干含む・淡茶灰褐色	風化気味・小片
	第18図6	底部	−	−	(6.00)	−		砂粒含む・茶灰色	普通・1/3片
	第18図7	甕形土器	−	−	−	−	肩部に7条の凹線文と斜めの刺突文を施す。	粗砂粒目立つ・暗茶褐色	風化著しい・小片
SB8	第18図8	壺形土器	−	−	−	−	肩部内面に絞り目，外面は板ナデ後クシ描沈線文と斜め方向のヘラ描沈線文を施す。	砂粒若干含む・淡赤褐色	良好・小片
	第18図9	甕形土器	−	−	−	−	凹線文に挟まれた不明瞭な凸帯に刺突文を施す。	粗粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・小片
	第18図10	甕形土器	−	−	−	−	凹線文に挟まれた不明瞭な凸帯に刺突文を施す。	粗砂粒若干含む・淡灰色	風化著しい・小片
	第18図11	壺形土器	−	−	−	−	頸部下半に幅広の凹線文を施す。	砂粒若干含む・淡乳灰色	普通・小片
	第18図12	脚部	−	−	−	−	脚裾部にヘラ描沈線文と円孔を施す。	微砂粒若干含む・淡褐色	普通・小片
	第18図13	壺形土器A2類	(12.00)	−	−	−	肩部内面に接合痕と絞り目。	粗砂粒若干含む・黄褐色	風化著しい・4/5片
-P1	第18図14	甕形土器D1類	(17.40)	−	−	−	口縁端面に2条の凹線文，内面にケズリ。	粗砂粒多く目立つ・淡茶褐色	普通・1/4片
-P1	第18図15	甕形土器C3類	12.60	(18.00)	−	−	内面にケズリ，外面胴部最大径付近にスス付着，口縁端部を上方につまみ上げる。	粗砂粒多く目立つ・淡黄褐色	風化気味・底部を欠く
	第18図16	甕形土器C3類	(15.10)	(17.40)	−	−	内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/5片
-P1	第18図17	甕形土器F2類	(13.40)	(12.90)	−	−	内面に体部ケズリ，頸部に横のミガキ，外面胴部下半に縦にミガキの後，上半に斜めのミガキ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・1/2片
	第19図18	壺形土器D4類	−	−	−	−	鋭く外反する二重口縁で口縁下端部を欠く。	粗砂粒若干含む・橙褐色	普通・小片
	第19図19	口縁部	−	−	−	−	口縁端部を上方に拡張，内面にケズリ。	粗砂粒僅か含む・淡褐色	普通・小片
	第19図20	口縁部	−	−	−	−	やや薄めで直立気味の二重口縁。	砂粒僅か含む・淡褐色	普通・小片
	第19図21	高杯形土器B3類	−	−	−	−	口縁端部を外方に拡張し平坦面をもつ。	粗砂粒若干含む・淡赤褐色	風化著しい・小片
	第19図22	高杯形土器B1類	−	−	−	−	杯たちあがり部は直立気味で端部を丸く終える。	粗砂粒若干含む・淡橙灰色	風化著しい・小片
	第19図23	平底・底部C1類	−	−	(7.80)	−	底部内面に指頭圧痕残る。	粗砂粒若干含む・赤褐色	良好・1/2片
SB9	第19図24	高杯形土器	(10.70)	−	−	−	杯たちあがり部外面に7条の凹線文，杯部内面に横のミガキ。	粗砂粒やや多く含む・黒褐色	風化気味・1/3片
	第19図25	高杯形土器	−	−	−	−	ボール状の杯部外面に3条の幅広凹線文，上端部内外に拡張し2条の凹線文を施す。	砂粒僅か含む・橙褐色	普通・小片
SB11 -P1	第19図26	広口壺形土器	(17.20)	(25.75)	−	−	内面シャープなケズリで頸部屈曲部直下に押圧痕。	粗砂粒若干含む・淡茶灰色	風化著しい・1/3片
SB11	第19図27	甕形土器	13.30	16.40	−	−	内面にケズリ，外面に縦の細かなハケ目，口縁屈曲部に接合痕，胴部付近にスス付着。	砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・2/3片
	第19図28	口縁部	−	−	−	−	肩部外面にやや粗いハケ目。	粗砂粒若干含む・淡橙白色	普通・小片
	第19図29	底部	−	−	−	−	押圧成形とナデによる不明瞭な丸底の底部。	粗砂粒多く含む・淡乳橙色	風化・2/3片
SB12	第19図30	甕形土器	(14.40)	−	−	−	外面に僅かな膨らみをもち直線的に外反する口縁端部に横ナデによる面をもつ。	粗砂粒若干含む・淡乳橙色	風化著しい・1/6片
	第19図31	鉢形土器	(18.70)	−	−	−	ボール状の杯部，内面斜めのミガキで端部を丸く終える。	砂粒含みキメ細か・黒褐色	風化気味・1/3片
	第19図32	甕形土器	(15.30)	(23.60)	−	−	内面にケズリ，外面頸部を強く横ナデし，直線的に外反する口縁端部に横ナデによる面をもつ。	砂粒若干含む・淡黒褐色	風化気味・1/4片
	第20図33	高杯形土器	(12.20)	−	−	−	ボール状の杯部にラッパ状の脚部をもつ，杯部内面は丁寧なナデもしくはミガキ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・2/3片
	第20図34	高杯形土器	−	−	(11.00)	−	ボール状の杯部にラッパ状の脚部をもつ，脚部内面にケズリの後ナデ。	粗砂粒多く含む・淡赤褐色	風化気味・1/2片
	第20図35	鉢形土器	−	(12.90)	−	−	丸底で球状の体部に広目の口縁部をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/2片
	第20図36	鉢形土器	(12.30)	(11.20)	−	−	胴部の張りは僅かで長く直線的な口縁部をもつ。	砂粒含みキメ細か・淡乳橙色	風化著しい・1/6片
	第20図37	鉢形土器	(11.50)	(10.80)	−	−	ボール状の杯部に直線的な口縁部をもち端部を丸く終える。	砂粒少くキメ細か・淡赤褐色	風化著しい・1/3片
	第20図38	鉢形土器	15.20	14.10	−	−	ボール状の杯部に直線的な口縁部をもつ，内面にケズリ後ナデ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・底部を欠く
	第20図39	鉢形土器	8.20	−	3.70	2.65	ボール状の杯部で不明瞭な平底をもつ。	砂粒若干含む・淡赤橙色	普通・完形
	第20図40	鉢形土器	9.40	−	3.40	2.50	ボール状の杯部で不明瞭な平底をもつ。	砂粒少くキメ細か・淡黒褐色	風化・2/3片
	第20図41	鉢形土器	11.80	−	−	3.30	ボール状の杯部で不安定な丸底をもつ。	砂粒少くキメ細か・淡黒褐色	風化気味・完形
	第20図42	鉢形土器	(14.40)	−	−	−	ボール状の杯部で外面に成形時の小亀裂あり。	砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/5片
	第20図43	鉢形土器	13.20	−	−	4.50	ボール状の杯部で外面に成形時の小亀裂，内面にハケ目後，底部に一方向の暗文風ミガキ。	砂粒少くキメ細か・淡黒褐色	風化気味・完形
	第20図44	鉢形土器	14.00	−	−	5.70	ボール状の杯部で外面に成形時の小亀裂，下半に押圧痕。	砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・完形
SB14	第20図45	口縁部	−	−	−	−	くの字状に直線的に外反する口縁部。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・小片出
	第20図46	口縁部	−	−	−	−	杯たちあがり部は受部から鋭く直線的に外反し端部を丸く終える。	砂粒若干含む・橙褐色	風化著しい・小片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SB14	第20図47	壺形土器	−	−	−	−	直線的に内傾する口縁端部外面に3条の幅広の凹線文と斜めの刺突文を施す。	砂粒若干含む・淡乳灰色	風化著しい・小片
SK1	第20図48	壺形土器	−	−	−	−	直線的に内傾する口縁端部外面に4条の凹線文と円孔を施す。	砂粒若干含む・淡乳褐色	風化著しい・小片
	第20図49	壺形土器A2類	(8.50)	−	−	−	緩く直立気味に外反する口縁端部を丸く終え，内面にかすかな絞り目をとどめる。	粗砂粒若干含む・黄褐色	風化著しい・1/4片
	第20図50	壺形土器B2類	19.80	31.40	7.40	40.00	くの字状に外反する口縁上端部を丸く終える。内面にケズリ，外面下に縦のハケ調製後縦のミガキ。	粗砂粒若干含む・明橙褐色	風化気味・完形
	第20図51	壺形土器B4類	(13.90)	−	−	−	緩く短く外反する口縁上端部を丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化著しい・1/6片
	第21図52	壺形土器D3類	24.00	37.20	−	11.10	口縁端面に5条の凹線文，肩部沈線文上下にクシ歯状工具の刺突文，外面に斜めハケ調製，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化気味・ほぼ完形
	第21図53	壺形土器F6類	24.70	−	−	−	口縁端面に2段に波状のクシ描沈線文を施す。内面にケズリ，頸部外面に横方向のクシ歯状工具の条線。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	良好・口縁部のみ完存
	第21図54	口縁部	−	−	−	−	外傾する口縁端面と上端面に細条の凹線文を施す。	粗砂粒若干含む・乳褐色	良好・小片
	第21図55	壺形土器F5類	15.80	49.00	12.40	52.00	強く外反する口縁端面に8条の凹線文を施す。内面にケズリ，外面は肩部に斜め，胴部に縦のミガキ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	良好・ほぼ完形
	第21図56	壺形土器F4類	(22.60)	−	−	−	口縁端面に8条の凹線文を施す。頸部外面上部にハケ状工具痕と縦のミガキ痕。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	良好・1/4片
	第21図57	壺形土器F4類	(22.20)	−	−	−	口縁端面に8条の凹線文を施し，内面に押圧痕をとどめる。	粗砂粒多く含む・乳褐色	風化気味・1/5片
	第21図58	甕形土器C2類	(12.60)	−	−	−	口縁は外面に膨らみをもち直線的に外反し，口縁上端部をつまみ上げ丸く終える。	粗砂粒若干含む・暗褐色	良好・1/8片
	第21図59	甕形土器C2類	(15.80)	−	−	−	短く外反する口縁上端部をつまみ上げ丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・暗茶褐色	風化著しい・1/4片
	第21図60	甕形土器D1類	(17.10)	−	−	−	直線的に外反する口縁両端を拡張し2条の凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・1/3片
	第21図61	甕形土器D1類	(16.40)	−	−	−	直線的に外反する口縁両端を拡張し3条の凹線文を，頸部に刺突文を施す。内面にケズリ。	砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・1/4片
	第21図62	甕形土器D2類	(17.40)	−	−	−	短く外反する口縁両端を拡張し3条の凹線文を施す，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・明橙褐色	風化気味・1/5片
	第22図63	甕形土器D2類	(15.40)	−	−	−	短く外反する口縁上端を拡張し3条の細い凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・明橙褐色	風化著しい・1/5片
	第22図64	甕形土器D2類	(12.10)	−	−	−	短く外反する口縁の上端を内傾気味に拡張し3条の細い凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・橙褐色	風化著しい・1/3片
	第22図65	甕形土器D6類	(15.40)	−	−	−	外反する口縁上端を内傾気味に拡張し3条の浅い凹線文を，肩部に刺突文を施す。内面にケズリ。	砂粒少くキメ細か・淡乳灰色	風化著しい・1/8片
	第22図66	甕形土器D4類	21.80	−	−	−	くの字状に外反する口縁の上端を上方に拡張し4条の不明瞭な凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡黒褐色	風化気味・4/5片
	第22図67	甕形土器E2類	(18.60)	−	−	−	くの字状に外反する口縁の上端を上方に拡張し丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙灰褐色	風化著しい・1/4片
	第22図68	口縁部	−	−	−	−	くの字状に外反し上方に拡張し4条の不明瞭な凹線文を施す。内面ケズリ方向不明。	粗砂粒やや多く目立つ・淡乳褐色	風化・小片
	第22図69	深鉢系D類	(10.00)	−	−	−	直立気味に外反する口縁の上端を水平に拡張する。内面にケズリ，外面にミガキと思われる。	砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・1/8片
	第22図70	深鉢系D類	(12.20)	−	−	−	くの字状に外反する肉厚な口縁の上端を水平に拡張する。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く目立つ・淡橙褐色	良好・1/8片
	第22図71	深鉢系B1類	(9.80)	(11.70)	−	−	頸部を強く横ナデし外反する口縁外面が膨らみ上端を丸く終え，内面にケズリ，外面に斜めナデ状ハケ目。	粗砂粒若干含む・暗橙褐色	良好・1/4片
	第22図72	深鉢系C類	(12.60)	(12.40)	−	−	短い肩部からくの字状に外反する口縁の端を上方に拡張する。内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・赤橙色	良好・1/4片
	第22図73	口縁部	−	−	−	−	頸部は緩く直立し，上方につまみ上げる口縁端面に横ナデの条線をとどめる。内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・乳褐色	良好・小片
	第22図74	口縁部	−	−	−	−	内傾する口縁端面の直下に強い横ナデを施す。内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・橙褐色	普通・小片
	第22図75	口縁部	−	−	−	−	緩く外反する口縁の端を上方に拡張し上端を丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・淡灰褐色	風化気味・小片
	第22図76	口縁部	−	−	−	−	くの字状に外反し肥厚する口縁の端を上方に拡張し，内傾する端面をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・小片
	第22図77	手づくね土器A2類	−	−	−	−	器壁はやや肉厚で，くの字状に外反する単純口縁，内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・小片
	第22図78	手づくね土器A2類	7.80	9.40	4.50	8.80	直立気味の単純口縁で，胴部の張りは少なく不明瞭な底部をもつ。口縁内外と底部内面に押圧痕。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・1/3片
	第22図79	高杯形土器B4類	(17.10)	−	−	−	直線的な坏受け部から，外反する杯たちあがり部は，強い横ナデにより上下端で突出する稜をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙灰色	風化気味・1/5片
	第22図80	高杯形土器C1類	−	−	−	−	杯たちあがり部上端が強く外反する。受け部内面に横の細いミガキ，外面にケズリ後に横のミガキ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化・1/5片
	第22図81	高杯形土器D2類	(21.00)	−	−	−	杯たちあがり部上端が緩い段をもち大きく外反し端部を丸く終える。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/6片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SK1	第22図82	高杯形土器D1類	16.80	—	—	—	杯たちあがり部内面に横，受け部に弧状ミガキ，外面は脚から受け部へケズリ，立上り部に横のミガキ。	粗砂粒やや多く目立つ・淡橙褐色	良好・2/3片
	第22図83	脚・脚台部A類	—	—	—	—	脚裾部を外湾気味に下方に拡張し端面に3条の不明瞭な凹線文，裾部にヘラ描沈線文を施す。	砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・小片
	第23図84	脚・脚台部C1類	—	—	13.70	—	杯部接合面で剥離，脚柱部内面は丁寧なナデで絞り目痕跡をとどめる。	粗砂粒やや多目立つ・乳褐色	風化気味・2/3片
	第23図85	脚・脚台部C4類	—	—	9.20	—	短くハの字状に開く脚端部を横ナデにより拡張，内面はナデ調整，杯接合部内面が窪む。	砂粒若干含む・赤橙色	風化著しい・脚部のみ完
	第23図86	脚・脚台部C4類	—	—	(9.40)	—	脚端部を下方に拡張し端部外面に横ナデ施す。	粗砂粒多く目立つ・くすんだ淡橙褐色	良好・1/5片
	第23図87	脚・脚台部C4類	—	—	9.80	—	脚端部に段をもち，押圧成形後ナデを施す。	粗砂粒多く含む・淡橙色	風化著しい・脚部のみ完存
	第23図88	脚・脚台部D1類	—	—	6.80	—	内面は杯受け部を乱雑なミガキ，脚柱部はナデ，外面は面取り後に縦のミガキ。	砂粒若干含む・淡乳橙褐色	良好・脚部のみ完存
	第23図89	あげ底・底部A類	—	—	5.00	—	やや作出し気味の浅い上げ底で，外面は縦，下端を横のミガキ。	砂粒やや目立つ・淡乳灰褐色	風化気味・底部のみ完存
	第23図90	平底・底部C2類	—	—	5.00	—	内面に縦のケズリ，外面に斜めの丁寧なミガキ。	細砂粒含みキメ細か・赤褐色	良好・底部のみ完存
	第23図91	あげ底・底部B2類	—	—	3.30	—	僅かに上げ底で輪郭は不明瞭。	砂粒多く含む・くすんだ淡黄褐色	風化気味・底部のみ完存
	第23図92	平底・底部C2類	—	—	(6.00)	—	僅かに上げ底で輪郭は不明瞭。内面に縦・斜めのケズリ，外面に縦のミガキ。	砂粒やや目立つ・乳灰白色	良好・1/2片
	第23図93	あげ底・底部B1類	—	—	7.00	—	肉厚で直線的な体部に浅い上げ底をもつ。内面に縦のケズリ。	砂粒多く含む・明橙褐色	良好・3/4片
	第23図94	あげ底・底部B2類	—	—	7.60	—	肉厚で外湾する体部下部に工具による面取り痕を残す。	砂粒多く含む・くすんだ淡茶褐色	良好・底部のみ完存
	第23図95	あげ底・底部C2類	—	—	13.80	—	肉厚で直線的な体部に深い上げ底をもつ。外面に太いミガキ。	粗砂粒多くモロい・乳灰白色	風化気味・2/3片
SK2	第23図96	甕形土器	(17.00)	—	—	—	内傾する口縁端面に凹線文を，頸部の貼付け突帯文に刺突文を施す。	砂粒やや目立つ・淡橙褐色	風化気味・1/5片
	第23図97	高杯形土器	—	—	—	—	直線的に内傾する杯たちあがり部外面に細く不明瞭な凹線文を施す。	粗砂粒やや目立つ・淡乳黒褐色	風化著しい・小片
	第23図98	壺形土器F4類	(23.90)	—	—	—	ラッパ状の頸部に，主に内傾し上方に拡張する口縁端面に8条の凹線文を，下端に押圧痕を残す。	粗砂粒やや目立つ・淡暗橙褐色	風化著しい・1/5片
	第23図99	壺形土器F4類	(23.20)	—	—	—	外反する頸部に，上端を内傾気味に直立する口縁をもち，端面に不明瞭な8条の凹線文を施す。	粗砂粒やや多く含む・明橙褐色	風化著しい・1/5片
	第23図100	壺形土器F1類	(16.20)	—	—	—	直立気味の頸部に内傾気味の口縁をもち，端面に不明瞭な3条の凹線文を施す。内面にケズリ痕。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・1/4片
	第24図101	甕形土器D2類	(13.70)	—	—	—	くの字状に緩く外反する頸部に，内傾し上方に拡張気味の口縁をもち，端面に2条の凹線文を施す。	粗砂粒若干含む・橙赤褐色	普通・1/5片
	第24図102	口縁部	—	—	—	—	頸部は短く外反し，口縁上端を上方に拡張，口縁内外に横ナデを施し内傾する口縁端面をもつ。	粗砂粒多く含む・暗赤褐色	良好・小片
	第24図103	口縁部	—	—	—	—	頸部は緩く外反し，口縁上端を外方に若干拡張，端部を丸く終える。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化著しい・小片
	第24図104	甕形土器C2類	(13.70)	—	—	—	頸部はくの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げる。内面のケズリ方向は不明。	粗砂粒やや多く含む・淡乳橙褐色	風化・1/5片
	第24図105	甕形土器E3類	(16.80)	—	—	—	頸部は緩く外反，内傾気味に両端を若干拡張する口縁端面に3条の凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡暗橙褐色	風化気味・1/5片
	第24図106	甕形土器D4類	(18.20)	—	—	—	頸部は短く外反，口縁上端を上方に拡張，直立気味の口縁端面に4条の浅い凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化著しい・1/5片
	第24図107	高杯形土器B3類	(19.90)	—	—	—	杯受け部は直線的で，たちあがり部は強く内湾し上端に平坦面をもつ。	粗砂粒多く含む・淡桃褐色	風化著しい・1/5片
	第24図108	高杯形土器B5類	(15.60)	—	—	—	内湾する杯たちあがり部は，上端に内傾する平坦面をもつ。	粗砂粒やや多く含む・淡橙灰褐色	風化著しい・1/6片
	第24図109	高杯形土器D2類	—	—	—	—	杯受け部は直線的で，たちあがり部は下端で屈曲し内湾気味に広く外反する。	粗砂粒含む・淡橙灰褐色	風化著しい・小片
	第24図110	脚・脚台部B2類	—	—	—	—	脚裾部にかけてやや広がり気味の中空の脚柱部で，杯部との接合面で剥離している。	粗砂粒やや多く含む・淡桃褐色	風化著しい・脚柱部のみ遺存
	第24図111	脚・脚台部B2類	14.00	—	—	—	短い脚柱部からラッパ状に開く裾部に段をもち端部を丸く終える。内面にケズリ，外面にミガキ痕と円孔。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・脚柱部ほぼ遺存
	第24図112	浅鉢系F2類	(19.20)	—	—	—	くの字状に外反する頸部に内傾気味に拡張する口縁端。内面にケズリ，頸部外面に斜めの刺突文を施す。	粗砂粒多く含む・淡桃褐色	風化著しい・1/6片
	第24図113	口縁部	—	—	—	—	頸部をくの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げ丸く終える。	粗砂粒若干含む・淡橙灰褐色	風化気味・小片
	第24図114	口縁部	—	—	—	—	頸部をくの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げ丸く終える。	砂粒若干含む・淡黄褐色	普通・小片
	第24図115	口縁部	—	—	—	—	深い杯部から外面で緩い段をもち内湾するたちあがり部に至り，端部で若干肥厚する。	粗砂粒多く含む・淡暗橙色	風化著しい・小片
	第24図116	平底・底部B1類	—	—	(4.00)	—	底部に若干の凹凸あり。	粗砂粒多く含む・赤褐色	風化気味・1/4片

出土遺構等名称	報告番号	器　種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SK2	第24図117	あげ底・底部B1類	−	−	−	−	やや直線的な体部から，浅いあげ底に至る。内面にケズリ，外面に縦のミガキ。	粗砂粒若干含む・淡黒褐色	良好・1/3片
	第24図118	平底・底部C2類	−	−	(7.20)	−	外湾気味の体部から，浅く不明瞭なあげ底に至る。内外面共に調整不祥。	粗砂粒やや多く含む・暗褐色	風化気味・1/4片
	第24図119	あげ底・底部A類	−	−	(8.10)	−	底面の接合ラインで僅かに窪み気味となる。内面にナデ調整。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化気味・1/5片
	第24図120	不明土製品	現存長 3.40	現存幅 2.15	現存厚 1.90	重量 15.36g	縦に面取りを行ない緩くカーブする。背面に4列の細かな刺突文を施す。両端を欠く。	砂粒若干含む・淡暗乳褐色	普通
SK3	第25図121	広口壺形土器	14.30	25.00	−	29.40	くの字状の単純口縁で体部は肩が張る球形。内面はケズリで頸部内面に斜めのハケ目痕，外面縦のミガキ。	砂粒若干含む・淡乳黒灰色	風化気味・完形
	第25図122	広口壺形土器	18.40	−	−	−	ラッパ状に開く，くの字状の単純口縁で，口縁端部を丸く終える。頸部の屈曲部付近に円孔を施す。	粗砂粒多く含む・淡黒灰褐色	風化気味・2/3片
	第25図123	直口壺形土器	−	19.00	(5.00)	−	扁平な胴部に高台状の上げ底。内面胴部に接合痕，底部に押圧痕。外面胴部にハの字状の刺突文，赤彩痕。	粗砂粒若干含む・淡橙灰白色	風化・頸部を欠く
	第25図124	甕形土器	(13.40)	−	−	−	くの字状の単純口縁で，口縁端部を丸く終える。内外面にハケ目痕跡。	粒若干含む・淡白褐色	風化気味・1/6片
	第25図125	口縁部	−	−	−	−	薄めで，やや直立気味の二重口縁。	粗砂粒若干含む・淡乳灰褐色	風化著しい・小片
	第25図126	鉢形土器	8.90	9.10	−	−	緩く外反する単純口縁に，胴の張りの少ない丸底の体部をもつ。内面にケズリ，底部に押圧痕。	粗砂粒若干含む・淡橙灰褐色	普通・4/5片
	第25図127	甕形土器	−	(16.00)	−	−	胴部にやや張りのある体部で，頸部はくの字状に外反する。	粗砂粒若干含む・淡灰白色	風化著しい・2/3片
	第25図128	浅鉢系D2類	(15.50)	(14.50)	−	−	胴部最大径から短い肩部を経て強く外反する頸部となる。口縁上端をつまみ上げ，外面肩部に斜め刺突文。	粗砂粒若干含む・淡橙色	普通・1/6片
	第25図129	土製紡錘車	直径 4.00	厚さ 2.15	重量 31.50g		中央部で膨らみ気味の円盤中央に一方向から穿孔。	粗砂粒やや多く含む・淡茶褐色	良好・完形
P4	第26図130	直口壺A4類	(14.00)	−	−	−	直立気味に緩く外反する単純口縁で口縁端部を丸く終え，頸部外面に貼付け突帯文を施す。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡黄色	風化著しい・1/3片
	第26図131	甕形土器B2類	(12.20)	(11.20)	−	−	外反し口縁上端部をつまみ上げる。体部は長胴形で内面ケズリ，外面にミガキ，頸部横ナデ，スス付着。	砂粒多く含む・茶褐色	風化・1/6片
	第26図132	甕形土器E2類	(17.60)	−	−	−	頸部はくの字状に外反し，口縁上端を上方に拡張し丸く終える。	砂粒若干含む・淡黄褐色	普通・1/5片
	第26図133	甕形土器B1類	−	13.10	3.60	−	くの字状に外反する頸部に，長胴形の体部で不安定な平底となり，焼成前に穿孔。外面に縦のミガキ。	微砂粒多く含む・橙褐色	風化気味・口縁部を欠く
	第26図134	壺形土器F6類	−	−	−	−	上方に内傾する口縁端面にクシ描波状文を施す。	微砂粒多く含む・黄灰色	普通・小片
	第26図135	口縁部	−	−	−	−	外湾気味に外反し口縁端部を丸く終える。	胎土はキメ細か・淡橙褐色	普通・小片
	第26図136	平底・底部C2類	−	−	4.50	−	やや不明瞭な平底で，内面にケズリ。	砂粒多く含む・黄褐色	普通・底部のみ遺存
P5	第26図137	甕形土器D6類	−	−	−	−	頸部は緩く外反し，上方に拡張する口縁端面に不明瞭な凹線文を施す。	粗砂粒若干含む・淡白褐色	風化著しい・小片
	第26図138	壺形土器D4類	−	−	−	−	やや厚めの外反する二重口縁で，端部を欠く。調整は不詳。	粗砂粒若干含む・淡灰色	良好・1/6片
	第26図139	甕形土器F2類	(15.50)	−	−	−	口縁部内面に段をもち，上端部が外反する二重口縁で，内面に接合痕跡をとどめる。	粗砂粒若干含む・淡黒褐色	風化気味・1/3片
	第26図140	浅鉢系D2類	(16.00)	−	−	−	胴部の張りが無く，口縁端面に2条の不明瞭な凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒若干含む・淡乳褐色	風化・1/6片
	第26図141	口縁部	−	−	−	−	外反する二重口縁で，端部を丸く終える。	砂粒若干含みキメ細か・淡橙褐色	風化著しい・小片
	第26図142	口縁部	−	−	−	−	屈曲部の不明瞭な複合口縁で端部を丸く終える。内面にケズリ，外面に斜めのハケ痕。	粗砂粒多く含む・淡灰茶褐色	風化気味・小片
	第26図143	高杯形土器C2類	(22.20)	−	−	−	杯受け部から，肥厚しつつ大きく直線的に外反し端部を丸く終える。	砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/6片
	第26図144	平底・底部C3類	−	−	(8.00)	−	輪郭がやや不明瞭な平底，体部はやや外湾気味。	砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・1/5片
P3	第26図145	壺形土器E類	(14.80)	−	−	−	緩く外反する頸部に内傾する二重口縁で端部を丸く終える。調整は不詳。	微砂粒若干含む・淡灰色	風化気味・1/4片
P1	第26図146	鼓形器台	−	−	(16.80)	−	ハの字状に外反し端部を丸く終える。内面に横のケズリ。	微砂粒多く含む・淡灰褐色	風化気味・1/3片
P2	第26図147	平底・底部C2類	−	−	4.80	−	輪郭がやや不明瞭な平底。内面に押圧痕，外面に縦のミガキ。	微砂粒若干含む・茶褐色	風化気味・底部のみ遺存
SX1	第27図148	甕形土器	−	−	−	−	くの字状に外反し，口縁を肥厚し2条の細い凹線文，肩部に凹線文と刺突文を施す。内面に横のミガキ。	砂粒若干含む・くすんだ淡乳褐色	良好・小片
	第27図149	脚部	−	−	−	−	緩く広がる脚柱部に4条の貼付け突帯文を，下部に円孔を施す。内面ケズリの後ナデ，絞り目をとどめる。	砂粒若干含みキメ細か・暗褐色	良好・1/6片
	第27図150	脚部	−	−	−	−	脚柱部に多条の凹線文と刺突文を，裾部に凹線文を施し三角形と思われる透孔をもつ。内面に絞り目。	微砂粒多く含む・暗茶褐色	良好・1/5片
	第27図151	脚部	−	−	−	−	脚端部にかけてやや外湾気味となり，裾部に方形と思われる透孔と不明瞭な凹線文を施す。	砂粒多く含む・淡乳灰橙色	風化気味・小片
	第27図152	脚部	−	−	−	−	端部で肥厚し脚端付近に凹線文と刻目文を施す。刻目文の一部は弧状に展開する。	砂粒若干含みキメ細か・淡乳灰褐色	風化・小片
	第27図153	脚部	(10.80)	−	−	−	脚裾部に方形と思われる透孔と綾杉状のヘラ描文を配し，脚端面に3条の凹線文を施す。内面横のケズリ。	砂粒多く含む・淡黒褐色	良好・1/6片
	第27図154	口縁部	−	−	−	−	薄めで，やや直立気味の二重口縁。調整は不詳。	粗砂粒若干含む・淡乳灰白色	風化著しい・小片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SX1	第27図155	口縁部	—	—	—	—	くの字状に緩く外反し，端部に面をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	普通・小片
	第27図156	口縁部	—	—	—	—	ボール状の体部から，くの字状に外反し端部を丸く終える。外面にタタキ状の痕跡をとどめる。	砂粒若干含みキメ細か・淡橙褐色	風化・小片
	第27図157	壺形土器A1類	8.30	—	—	—	端部にかけ緩く外反。内面は横のケズリで頸部に横ナデ，外面は頸部に縦ハケ目の後ミガキ，赤彩痕あり。	砂粒若干含みキメ細か・赤褐色	風化気味・頸部のみ遺存
	第27図158	壺形土器A2類	(13.70)	—	—	—	緩くラッパ状に外反し端部を丸く終える。調整は不詳。	砂粒若干含みキメ細か・淡乳灰白色	風化著しい・1/7片
	第27図159	壺形土器A1類	—	—	—	—	体部からほぼ直立する頸部をもち，肩部に2条の刺突文を施す。内面に横のケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・1/3片
	第27図160	壺形土器A2類	(11.20)	—	—	—	緩くラッパ状に短く外反し，端部を丸く終える。調整は不詳。	砂粒若干含みキメ細か・淡乳灰褐色	風化・1/3片
	第27図161	壺形土器A2類	(11.80)	—	—	—	緩くラッパ状に短く外反し，端部に面をもつ。赤彩痕あり。	微砂粒多く含む・淡乳灰褐色	風化気味・小片
	第27図162	壺形土器A2類	—	—	—	—	緩くラッパ状に短く外反し，端部を丸く終える。	砂粒多く含む・赤橙褐色	風化著しい・小片
	第27図163	壺形土器A3類	(9.90)	—	—	—	外湾ぎみにラッパ状に短く外反し，端部に面をもつ。	砂粒多く含む・淡乳橙色	風化気味・1/5片
	第27図164	壺形土器B3類	18.80	—	—	—	緩くラッパ状に短く外反し，端部に面をもつ。	粗砂粒多く含む・淡赤褐色	風化著しい・口縁のみ完存
	第27図165	壺形土器B1類	12.00	16.10	—	—	肩部の張るいびつな球体で，短い頸部から外反する口縁部をもつ。外面にミガキ痕あり。	砂粒やや多く含む・淡乳橙色	風化著しい・底部を欠く
	第28図166	壺形土器B1類	(13.00)	(17.30)	—	—	ナデ肩でいびつな球体で，短い頸部から外反し口縁上端部をつまみ上げる。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・1/4片
	第28図167	壺形土器B1類	(19.00)	(18.40)	—	—	肩の張りが少ないいびつな球体で，短い頸部から外反し口縁上端部をつまみ上げる。外面にハケ目痕。	粗砂粒多く含む・赤褐色	風化著しい・1/6片
	第28図168	壺形土器D2類	14.50	—	—	—	緩くラッパ状に外反し，口縁上端部を拡張する複合口縁。肩部にミガキ，内面にケズリ。	微砂粒多く含む・淡黄赤褐色	風化・口縁のみ完存
	第28図169	壺形土器D2類	(13.90)	—	—	—	頸部は直立気味に外反し，外反気味に拡張する口縁上端に至る。口縁端面に横ナデ，頸部内面にミガキ。	粗砂粒やや多く含む・淡暗灰褐色	良好・1/6片
	第28図170	壺形土器D1類	(19.80)	(37.00)	—	—	口縁端面に強い横ナデ。最大が径上位で肩が張る。肩部に刺突文，上半にナデ状ハケ目，下半にミガキ。	微砂粒少なくキメ細か・淡乳灰色	風化気味・1/3片
	第28図171	壺形土器D1類	(15.60)	—	—	—	上方に拡張する口縁端面に強い横ナデ，端部を丸く終える。	微砂粒若干含みキメ細か・淡乳褐色	良好・1/4片
	第28図172	壺形土器C2類	(11.90)	—	—	—	ナデ肩で緩く外反し，口縁上端部をつまみ上げる。外面にミガキ，内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・橙褐色	風化ぎみ・1/3片
	第28図173	壺形土器C2類	14.40	—	—	—	緩く短く外反し，口縁上端部をつまみ上げる。口縁端面に横ナデ，肩部にナデの後，下半にミガキ。	砂粒少ない・くすんだ暗褐色	普通・1/2片
	第28図174	壺形土器B4類	18.60	—	—	—	緩く短く外反し，口縁端面に凹線文，外面にナデ状のハケ目を施し，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡赤褐色	良好・口縁のみ完存
	第28図175	壺形土器B4類	21.80	—	—	—	緩く外反し，口縁端面に横ナデ，肩部に刺突文，内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・くすんだ暗灰褐色	良好・1/2片
	第28図176	壺形土器C1類	(11.20)	—	—	—	頸部から短く外反し，口縁端面に横ナデ，外面にハケ目とミガキ，頸部内面にミガキ。	砂粒少ない・淡乳赤褐色	風化気味・1/3片
	第28図177	壺形土器C1類	(15.30)	—	—	—	ナデ肩で緩く短く外反し，口縁上端部をつまみ上げる。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・くすんだ橙茶褐色	風化気味・1/4片
	第29図178	壺形土器C1類	(13.20)	—	—	—	ナデ肩で緩く短く外反し，口縁上端部をつまみ上げ端面に凹線文。外面にナデ状ハケ目，内面にケズリ。	砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・1/6片
	第29図179	壺形土器C1類	(13.60)	—	—	—	短目の頸部から短く外反し，口縁上端部をつまみ上げ端面に凹線文。外面にナデ状ハケ目。	砂粒やや多く含む・くすんだ赤茶褐色	風化気味・1/3片
	第29図180	壺形土器C1類	(11.60)	—	—	—	短目の頸部から短く外反し，口縁上端部をつまみ上げる。内面に絞り目残る。	粗砂粒多く含む・淡赤褐色	風化著しい・1/6片
	第29図181	壺形土器C1類	(14.20)	—	—	—	短目の頸部から短く外反し，口縁上端部をつまみ上げる。	砂粒若干含む・明淡橙褐色	風化著しい・1/7片
	第29図182	壺形土器F3類	(18.40)	—	—	—	大きく緩く外反し，口縁上端部をつまみ上げ端面に凹線文を施す。	砂粒多く含む・淡乳赤褐色	風化著しい・1/3片
	第29図183	壺形土器B2類	(12.10)	—	—	—	くの字状に外反する口縁に横ナデを加え上端を拡張気味とし丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化気味・1/4片
	第29図184	壺形土器B2類	—	—	—	—	くの字状に外反する口縁を上方に拡張する。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・暗乳褐色	風化著しい・1/5片
	第29図185	壺形土器B2類	(14.40)	—	—	—	緩く外反し口縁を上方に拡張する。	砂粒多く含む・明淡橙色	風化気味・1/6片
	第29図186	壺形土器B3類	(20.20)	—	—	—	肩部からくの字状に外反し，口縁両端部を拡張，端面に凹線文を施す。外面にミガキ，内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・くすんだ淡灰褐色	風化気味・1/4片
	第29図187	壺形土器B3類	—	—	—	—	肩部からくの字状に外反し，口縁端上部を拡張，端面に凹線文を施す。外面ナデ状ハケ目，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化著しい・1/4片
	第29図188	壺形土器F3類	(13.80)	—	—	—	頸部は直立気味に外反，口縁上端部を拡張，端面に凹線文を施す。	砂粒若干含む・淡乳灰褐色	風化気味・1/6片
	第29図189	壺形土器F3類	15.30	—	—	—	肩の張った肩部から緩く外反し，口縁端部を上方に拡張し，端面に凹線文を施す。頸部に刺突文。	粗砂粒多く含む・淡乳橙色	風化気味・口縁のみ完存
	第26図190	壺形土器F3類	15.50	—	—	—	肩の張った肩部から緩く外反し，口縁両端部を拡張し，端面に凹線文を施す。口縁内面にミガキ。	粗砂やや粒多く含む・暗橙褐色	普通・口縁のみ完存
	第30図191	壺形土器F2類	17.20	—	—	—	緩く直立気味に外反し，口縁上端部を外反気味に拡張し，端面に凹線文を施す。	粗砂粒多く含む・淡乳黄褐色	風化著しい・1/2片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SX1	第30図192	壺形土器F1類	—	—	—	—	緩く直立気味に外反し，内傾気味に拡張し端面に太い凹線文を施す。頸部外面にナデ調整，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	普通・1/3片
	第30図193	壺形土器F3類	—	—	—	—	肩の張った肩部から緩く外反し，内面にクシ描波状文などを施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化著しい・頸部のみ完存
	第30図194	壺形土器F2類	(17.80)	—	—	—	緩く外反し，外湾気味に口縁上端部を拡張し，端面に凹線文を施す。	砂粒多く含む・淡乳黄赤褐色	風化著しい・1/3片
	第30図195	壺形土器F5類	(17.00)	—	—	—	緩く外反する口縁上端に面をもち，下端は粘土紐を貼りつけ，端面に凹線文を施す。外面にハケ目。	砂粒多く含む・淡乳灰白色	普通・1/4片
	第30図196	壺形土器F4類	(14.20)	—	—	—	緩く外反する口縁上端を直立し，内外に横ナデを施す。	砂粒多く含む・淡橙褐色	風化気味・1/8片
	第30図197	壺形土器F4類	(16.50)	—	—	—	短く内傾する複合口縁で，端面と上端部平坦面に凹線文を施す。	粗砂粒含む・淡乳橙褐色	良好・1/3片
	第30図198	壺形土器F4類	15.20	—	—	—	短く内傾する複合口縁で，端面に凹線文を施し，上端部に平坦面をもつ。	砂粒多く含む・淡乳黄白色	風化著しい・口縁のみ完存
	第30図199	壺形土器F4類	(17.20)	—	—	—	内傾気味に直立する複合口縁で，端面に凹線文を施し，上端部に平坦面をもつ。	砂粒含む・淡乳橙白色	風化著しい・小片
	第30図200	壺形土器F4類	(15.70)	—	—	—	直線的に内傾する複合口縁で，端面に凹線文を施す。頸部外面にハケ目後ミガキ，内面もミガキ。	粗砂粒含む・くすんだ淡乳褐色	良好・1/3片
	第30図201	壺形土器F4類	17.70	—	—	—	内傾気味に直線的に内傾する複合口縁で，端面に凹線文とクシ描波状文を，頸部に横ナデの条線を施す。	粗砂粒多く含む・くすんだ橙褐色	良好・2/3片
	第30図202	壺形土器F4類	(20.60)	—	—	—	直線的に内傾する複合口縁で，端面に凹線文を施す。内面にミガキ。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡乳褐色	風化気味・1/4片
	第30図203	壺形土器F4類	(20.60)	—	—	—	短く直線的に直立する複合口縁で，端面と上端部平坦面に凹線文を施す。頸部にヘラ描文を施す。	砂粒少なくキメ細か・淡乳灰褐色	良好・1/4片
	第31図204	壺形土器F4類	21.20	—	—	—	やや内湾気味に直立する複合口縁で，端面に凹線文を施し，上端部に面をもつ。	粗砂粒多く含む・淡乳黄褐色	風化著しい・2/3片
	第31図205	壺形土器F4類	23.00	—	—	—	やや内傾気味に直線的に内傾する複合口縁で，端面に凹線文，内面にミガキを施し，押圧痕を残す。	粗砂粒含む・淡乳橙褐色	普通・1/2片
	第31図206	壺形土器F5類	21.80	—	—	—	上端部が強く外反する複合口縁で，端面に凹線文を施し，上端部に面をもつ。内面にミガキ。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・2/3片
	第31図207	壺形土器F4類	26.20	—	—	—	直線的に内傾する複合口縁で，上端面を外方につまみ出す。端面に凹線文と縦のクシ描文を施す。	砂粒多く含む・淡乳褐色	良好・1/2片
	第31図208	壺形土器F4類	(22.20)	—	—	—	やや内湾気味に内傾する複合口縁で，端面と上端部平坦面に凹線文を施す。内面に押圧痕を残す。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・1/4片
	第31図209	壺形土器F4類	20.80	—	—	—	やや内湾気味に内傾する複合口縁で，端面に凹線文を施す。内面に押圧痕を残す。上端部に面をもつ。	粗砂粒多く含む・淡乳黄白色	風化著しい・口縁のみ完存
	第31図210	壺形土器F7類か	—	—	—	—	肩部からくの字状に外反し内傾する複合口縁で，内面にミガキ。	砂粒やや多く含む・淡乳褐色	良好・1/6片
	第31図211	壺形土器F6類	20.00	—	—	—	やや内湾気味に内傾する複合口縁で，端面にクシ描波状文を，上端面にヘラ描文を施す。	砂粒含む・淡乳褐色	風化著しい・口縁のみ完存
	第31図212	壺形土器F7類	15.40	25.40	35.20	3.10	不明瞭な平底の倒卵形。ラッパ状に外反し内傾する複合口縁。頸部凸帯に2段刺突文。内外面にハケ目。	微砂粒多く含む・くすんだ茶褐色	良好・完形
	第31図213	口縁部	—	—	—	—	内傾する端面を上方に拡張し端部を丸く終える。外面に横ナデを加える。	砂粒やや多く含む・くすんだ淡橙褐色	風化気味・小片
	第31図214	口縁部	—	—	—	—	端面を上方に拡張し端部を丸く終える。端面に凹線文，肩部に刺突文などを施す。	粗砂粒やや含む・淡灰褐色	風化気味・小片
	第31図215	口縁部	—	—	—	—	強く外反する口縁端部を上方につまみ上げ，端面に凹線文を施す。内面にミガキ。	微砂粒やや含む・暗橙褐色	良好・小片
	第32図216	深鉢系A類	(9.40)	—	—	—	くの字状に外反する単純口縁で，肩部にナデの稜をもち胴部にミガキ。	微砂粒やや含む・赤橙褐色	良好・1/4片
	第32図217	口縁部	—	—	—	—	くの字状に外反する単純口縁で，端部を丸く終える。	砂粒少なくキメ細か・淡橙褐色	風化・小片
	第32図218	甕形土器C1類	(14.40)	—	—	—	くの字状に外反し内傾する端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒少なくキメ細か・くすんだ淡褐色	良好・1/5片
	第32図219	甕形土器C1類	(17.40)	—	—	—	段をもち外反する口縁端を肥厚し内傾する端面をもつ。外面はハケ目の上に細い凹線文，内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・くすんだ淡乳褐色	良好・1/3片
	第32図220	甕形土器C2類	(11.20)	—	—	—	肩の張った肩部からくの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げ内傾する端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒含む・淡乳褐色	風化著しい・1/6片
	第32図221	甕形土器C1類	(13.30)	—	—	—	くの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。肩部に刺突文，内面にケズリ。	砂粒目立つ・くすんだ橙褐色	風化気味・1/6片
	第32図222	甕形土器C3類	11.60	—	—	—	くの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・淡褐色	風化著しい・1/2片
	第32図223	甕形土器C3類	(15.60)	—	—	—	くの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げ端面にクシ描文，肩部に貝殻複線による崩れた鋸歯文を施す。	粗砂粒やや含む・茶褐色	良好・1/5片
	第32図224	甕形土器C3類	(15.80)	—	—	—	くの字状に外反し，口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。外面に沈線文あり。	砂粒目立つ・赤茶褐色	風化気味・1/6片
	第32図225	甕形土器C3類	13.40	—	—	—	緩く外反し，口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・明橙褐色	風化著しい・1/2片
	第32図226	甕形土器C3類	(27.90)	—	—	—	緩く短く外反し，口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・くすんだ茶褐色	良好・1/3片

出土遺跡等名称	報告番号	器種	法量 口径	法量 胴径	法量 底部・脚部径	法量 器高	形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
SX1	第32図227	壺形土器C2類	13.40	—	—	—	厚手で、緩く短く外反し、口縁上端をつまみ上げる端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒やく含む・淡黄褐色	風化著しい・1/2片
	第32図228	壺形土器C3類	(17.50)	—	—	—	緩く外反し、口縁上端をつまみ上げ端部を丸く終える。内面にケズリ。	砂粒やや含む・暗褐色	良好・1/6片
	第32図229	壺形土器D2類	(12.40)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、口縁端面に凹線文を、外面にハケ目。	粗砂粒やや多く含む・橙褐色	風化気味・1/5片
	第32図230	壺形土器D2類	(13.00)	—	—	—	ナデ肩の肩部からくの字状に開き、直立する口縁端面に凹線文を施す。	砂粒多く含むがキメ細か・橙褐色	風化気味・1/4片
	第32図231	壺形土器D2類	(12.00)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、口縁端面に凹線文、肩部に櫛突文を施す。内面にケズリ。	砂粒やや含む・橙褐色	風化著しい・1/6片
	第32図232	壺形土器D4類	(17.10)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、口縁端をつまみ上げる。外面にハケ目、内面にケズリとハケ目成。	粗砂粒やや多く含む・淡褐色	良好・1/4片
	第32図233	壺形土器D4類	(15.20)	—	—	—	くの字状に外反し、肥厚気味の端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く含む・淡黒褐色	風化気味・1/6片
	第33図234	壺形土器D1類	(21.20)	—	—	—	くの字状に外反し、肥厚気味に直立する端面に凹線文を施す。外面にナデ状ハケ目の単位が残る。	粗砂粒多く含む・淡黒褐色	風化著しい・1/3片
	第33図235	壺形土器D1類	(16.80)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、肥厚気味に内傾する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒含む・暗褐褐色	風化気味・1/4片
	第33図236	壺形土器D1類	(16.80)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、肥厚気味に内傾する端面に凹線文を施す。外面にナデ状ハケ目。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡灰色	風化著しい・1/5片
	第33図237	壺形土器D1類	(17.40)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、肥厚気味に内傾する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡赤褐色	風化・1/7片
	第33図238	壺形土器D1類	(15.80)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、肥厚気味に内傾する端面に凹線文を、肩部に櫛突文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・明褐褐色	風化著しい・1/6片
	第33図239	壺形土器D1類	(22.30)	(27.50)	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張気味に内傾する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・黄褐色	風化気味・1/4片
	第33図240	壺形土器D6類	(19.20)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張気味に直立する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く含む・淡黒褐色	風化著しい・1/4片
	第33図241	壺形土器D2類	(15.40)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張気味に直立する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く含む・淡橙褐色	風化著しい・1/6片
	第33図242	壺形土器D2類	(16.00)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・淡赤褐色	良好・1/3片
	第33図243	壺形土器D2類	(16.20)	—	—	—	緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を、肩部に櫛突文を施す。外面ミガキ、内面ケズリ。	砂粒多く含むがキメ細か・淡橙褐色	良好・1/3片
	第34図244	壺形土器D4類	(19.20)	—	—	—	緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を、肩部に櫛突文を施す。内面にケズリ。	砂粒やや含む・淡灰黒色	風化著しい・1/5片
	第34図245	壺形土器D4類	(20.90)	—	—	—	緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を、内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・暗灰黒色	風化気味・1/4片
	第34図246	壺形土器D4類	(16.50)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・淡灰黒色	風化著しい・1/4片
	第34図247	壺形土器D4類	(16.90)	—	—	—	くの字状に緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。外面ナデ状ハケ目、内面ケズリ。	粗砂粒やや含む・くすんだ褐暗褐色	良好・1/3片
	第34図248	壺形土器D5類	(18.80)	—	—	—	くの字状に外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡橙褐色	良好・1/6片
	第34図249	壺形土器D5類	17.30	29.20	—	—	肩が張り、くの字状に外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。外面ミガキ、内面ケズリ。	細砂粒多く含む・淡橙褐色	良好・胴部下半を欠く
	第34図250	壺形土器D2類	(17.00)	(18.20)	—	—	緩く外反し、上端を拡張する直立気味の端面に凹線文を施す。外面にケズリ後ハケ目。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く含む・暗茶褐色	風化気味・1/4片
	第34図251	壺形土器D2類	(13.80)	(18.10)	—	—	緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。外面にナデ状ハケ目。内面にケズリ。	粗砂粒やや多く含む・暗橙褐色	風化気味・1/7片
	第34図252	壺形土器D2類	16.70	—	—	—	緩く外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を施す。	内面にケズリ。粗砂粒やや含む・黒褐色	風化気味・2/3片
	第34図253	壺形土器D3類	(17.20)	—	—	—	くの字状に外反し、拡張気味に内傾する端面に凹線文を施す。	内面にケズリ。砂粒やや含む・淡橙灰色	風化気味・1/8片
	第34図254	壺形土器D3類	17.20	—	—	—	くの字状に外反し、上端を拡張する直立気味の端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	微細砂多く含む・くすんだ暗灰茶褐色	良好・4/5片
	第34図255	壺形土器C3類	(13.30)	—	—	—	緩くの字状に外反し、上端を拡張する内傾気味の端面に凹線文を、肩部に櫛突文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・茶褐色	風化気味・1/4片
	第34図256	壺形土器C3類	(12.70)	—	—	—	くの字状に外反し、上端を拡張する内傾気味の端面をもつ。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・淡灰黒色	良好・1/6片
	第35図257	壺形土器E1類	9.00	11.50	—	—	肩の張る体部に、上端を拡張する端面に凹線文を施す。外面は胴部を縦下手を横ミガキ、内面にケズリ。	砂粒やや含む・淡灰黒色	風化気味・1/2片
	第35図258	壺形土器E1類	10.00	11.90	3.60	11.90	胴部最大径が上位のあげ底で、口縁上端を直立して拡張。外面は胴部横位・縦・斜めミガキ、内面ケズリ。	砂粒やや含むがキメ細か・淡黒褐色	良好・完形
	第35図259	壺形土器E1類	(12.80)	(13.70)	—	—	ナデ肩の体部で、口縁上端を直立して拡張する。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・淡橙褐色	風化・1/5片
	第35図260	壺形土器E2類	(10.20)	—	—	—	肩部の張りがなく、くの字状に外反し、ナデにより口縁上端をつまみ上げる。内面にナデ。	粗砂粒多い・暗褐色	良好・1/5片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SX1	第35図261	甕形土器E1類	(10.60)	−	−	−	くの字状に短く外反し，口縁上端を内傾して拡張する。内面に押圧痕跡。	砂粒やや含む・暗橙褐色	風化気味・1/7片
	第35図262	甕形土器E1類	(10.70)	−	−	−	くの字状に短く外反し，口縁上端を直立して拡張する。内面にケズリ。	砂粒やや含む・乳褐色	風化著しい・1/6片
	第35図263	甕形土器E1類	(11.60)	−	−	−	短く外反し，口縁上端を直立して拡張，端面に凹線文痕跡を残す。内面にケズリ。	砂粒やや含む・淡黄褐色	風化気味・1/7片
	第35図264	甕形土器E2類	(12.60)	−	−	−	くの字状に外反し，横ナデにより口縁上端を直立して拡張し，端部を丸く終える。	砂粒含むがキメ細か・淡灰褐色	風化気味・1/4片
	第35図265	甕形土器E2類	(19.60)	−	−	−	くの字状に外反し，横ナデにより内湾気味に口縁上端を直立して拡張し，端部を丸く終える。内面ケズリ。	細砂粒多い・淡乳褐色	風化気味・1/7片
	第35図266	甕形土器E1類	12.10	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を直立して拡張，端面を横ナデし，端部を丸く終える。外面ハケ目，内面にケズリ。	砂粒含むがキメ細か・淡乳明褐色	良好・1/2片
	第35図267	甕形土器E2類	(13.60)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に直立して拡張，端面を横ナデし，端部を丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・淡暗褐色	風化・1/8片
	第35図268	甕形土器E2類	(14.10)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に直立して拡張，端面を横ナデし，端部を丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・明淡橙褐色	風化著しい・1/8片
	第35図269	甕形土器E1類	(13.80)	−	−	−	内面に短い頸部の状の段をもち，横ナデを施し口縁上端を内傾気味に拡張する。内面にシャープなケズリ。	粗砂粒含むがキメ細か・明橙褐色	良好・1/3片
	第35図270	甕形土器E1類	16.20	−	−	−	緩く外反し，横ナデを施し口縁上端を内傾気味に拡張し，端部を丸く終える。内面にシャープなケズリ。	砂粒含むがキメ細か・淡乳橙褐色	良好・1/2片
	第35図271	甕形土器E3類	(17.00)	−	−	−	くの字状に外反し，口縁上端を直立して拡張，端部を丸く終え端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・明橙褐色	風化著しい・1/2片
	第35図272	甕形土器E3類	(15.40)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を直立気味に拡張，端面に凹線文を施す。外面にミガキ痕，内面にミガキとケズリ。	砂粒やや含む・くすんだ暗茶褐色	良好・1/4片
	第36図273	甕形土器E2類	15.40	−	−	−	直立気味に緩く外反，横ナデを施し口縁上端を内傾気味に拡張。外面にナデ状ハケ目，内面にケズリ。	砂粒やや多く含む・くすんだ赤灰褐色	風化著しい・2/3片
	第36図274	甕形土器E3類	(13.50)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に拡張，端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒やや含む・黒褐色	良好・1/8片
	第36図275	甕形土器E3類	(13.60)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に拡張，端面に凹線文を施す。外面にナデ状ハケ目，内面にケズリ。	砂粒含むがキメ細か・淡橙色	風化気味・1/3片
	第36図276	甕形土器E3類	(16.60)	−	−	−	直立気味に緩く外反，口縁上端を内傾気味に拡張，端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙灰褐色	風化著しい・1/6片
	第36図277	甕形土器E3類	(16.40)	−	−	−	短く外反し，口縁上端を内傾気味に拡張，端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡橙灰色	風化気味・1/4片
	第36図278	甕形土器E3類	17.70	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に拡張，端面にクシ描沈線文を施す。内面にケズリ。	細砂粒多い・淡暗橙褐色	普通・1/2片
	第36図279	甕形土器E3類	(18.60)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を内傾気味に大きく拡張，端面に凹線文を施す。	粗砂粒含む・淡乳褐色	風化気味・1/6片
	第36図280	甕形土器E3類	(14.40)	−	−	−	くの字状に外反し，口縁上端を直立して拡張，端面に凹線文を施す。肩部に横ナデの後，内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡橙褐色	風化・1/5片
	第36図281	甕形土器E3類	(17.60)	−	−	−	くの字状に外反し，口縁上端を内傾気味に大きく拡張，端面に不明瞭な凹線文を施す。内面にケズリ。	細砂粒多い・淡乳灰褐色	風化著しい・1/5片
	第36図282	甕形土器E1類	(15.00)	−	−	−	緩く外反し，口縁上端を外湾気味に拡張，端面に凹線文を施す。	砂粒含むがキメ細か・淡乳褐色	風化著しい・1/6片
	第36図283	甕形土器D6類	(18.60)	−	−	−	外面に段をもち緩く外反し，口縁上端を直立して拡張，端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	細砂粒多く含む・淡乳褐色	風化気味・1/5片
	第36図284	甕形土器E4類	(20.00)	−	−	−	くの字状に外反，口縁上端を内傾気味に拡張，端面に凹線文。肩部に2段の竹管文，内面ケズリと赤彩痕。	砂粒多く含む・黒褐色	良好・1/5片
	第36図285	甕形土器F2類	(15.80)	−	−	−	外反する複合口縁で，外面に細かなハケ目の後，肩部に3段のクシ歯状刺突文，内面にミガキとケズリ。	砂粒多く含む・暗乳灰褐色	良好・1/4片
	第36図286	甕形土器F1類	13.20	13.90	−	−	緩く外反，口縁上端を外方に肥厚，外傾する端面をもつ。外面は縦・斜めのハケ目，内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡橙茶褐色	風化気味・1/2片
	第36図287	甕形土器F1類	(15.60)	−	−	−	水平に短く外反し，口縁端上を外方に肥厚，外傾する端面をもつ。	細砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化著しい・1/8片
	第37図288	甕形土器F1類	(19.60)	(20.10)	−	−	ナデ肩で緩く外反，口縁上端を外方に肥厚，外傾する端面に凹線文，肩部にクシ歯状刺突文，内面ケズリ。	砂粒少ない・淡明橙褐色	良好・1/6片
	第37図289	甕形土器F1類	(17.20)	(15.80)	−	−	肩部に張りがなく，緩く外反し口縁上端を外方に肥厚，外傾する端面をもつ。外面ミガキ痕，内面ケズリ。	砂粒多く含む・暗茶褐色	風化気味・1/5片
	第37図290	甕形土器F1類	(19.40)	−	−	−	ナデ肩で緩く外反，口縁上端を外方に肥厚，外傾する端面に凹線文，肩部にクシ歯状刺突文，内面ケズリ。	粗砂粒多く含む・暗茶褐色	風化著しい・1/5片
	第37図291	甕形土器D1類	(20.40)	−	−	−	ナデ肩で緩く外反し，口縁上端を外方に肥厚，直立する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡明橙褐色	風化著しい・1/5片
	第37図292	甕形土器F1類	(16.00)	−	−	−	くの字状に緩く外反し，口縁上端を外方に肥厚，端面に凹線文，肩部にクシ歯状刺突文，内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡橙灰色	風化著しい・1/6片
	第37図293	甕形土器F1類	(16.20)	−	−	−	くの字状に緩く外反し，口縁上端を外方に肥厚，直立する端面をもつ。	比較的キメ細か・暗茶褐色	良好・1/6片
	第37図294	脚台付鉢系A類	−	10.70	−	−	杯部は胴部で強く張る広口鉢で，杯部外面を弧状，内面を放射状・横，脚部に縦のミガキ。赤彩痕あり。	砂粒若干含む・淡乳橙褐色	風化気味・口縁と脚端部欠く

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SX1	第37図295	脚台付鉢系C1類	(17.00)	ー	ー	ー	たちあがり上端に平坦面，外面に凹線文を施す。受け部外面にケズリ，内面に弧状のミガキ。	砂粒若干含む・くすんだ黄橙灰色	風化気味・1/6片
	第37図296	脚台付鉢系C1類	14.80	ー	ー	ー	杯内面がボール状，たちあがり外面に強い横ナデ，受け部外面に縦・横のケズリ。	粗砂粒やや多く含む・淡黄橙褐色	風化著しい・1/2片
	第37図297	脚台付鉢系C1類	(17.20)	ー	ー	ー	深めの受け部から直線的に立ち上がり，上端部に平端面をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/6片
	第37図298	脚台付鉢系C1類	17.30	ー	ー	ー	たちあがり外面に強い横ナデを加え端部をつまみ出す。受け部内面に一方向のミガキ，外面にケズリ。	砂粒やや多く含む・淡乳灰褐色	風化著しい・2/3片
	第37図299	脚台付鉢系C2類	(18.00)	ー	ー	ー	内湾するたちあがり部の上面を，外方に拡張気味とする。受け部外面にケズリ。	砂粒やや多く含む・淡橙褐色	風化著しい・1/8片
	第37図300	脚台付鉢系C2類	(15.60)	ー	ー	ー	内湾するたちあがり部の上面を，外方に拡張気味とする。	砂粒やや多く含む・くすんだ暗赤褐色	風化著しい・1/5片
	第38図301	脚台付鉢系C2類	16.00	ー	6.70	10.90	低い脚台部内面に押圧痕，外面押圧成形後ミガキ，杯受け部外面に横のケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化気味・完形
	第38図302	脚台付鉢系C2類	18.30	ー	5.20	10.30	平底で短い脚台部から，杯受け部にかけ放射状のミガキ。外面ミガキ下と内面に縦・横のケズリ。	粗砂粒多く含む・明橙褐色	風化気味・完形
	第38図303	脚台付鉢系C2類	(16.60)	ー	ー	ー	口縁端部上面にかけて肥厚し平坦面をもつ。受け部との屈曲部は粘土紐を接合。受け部外面にケズリ。	比較的キメ細か・明橙褐色	風化著しい・1/4片
	第38図304	脚台付鉢系E類	(19.60)	ー	ー	ー	杯受け部から直線的に延び，端部は肥厚し平坦面に凹線文を施す。受け部との屈曲部は粘土紐を接合。	比較的キメ細か・暗茶褐色	風化気味・1/8片
	第38図305	脚台付鉢系C2類	(16.60)	ー	ー	ー	ボール状の杯部外面に粘土紐を接合し受け部との屈曲部を成す。外面にハケ目，内面にミガキを施す。	砂粒多く含む・淡乳明橙色	風化気味・1/3片
	第38図306	脚台付鉢系E類	(16.00)	ー	ー	ー	杯受け部から直線的に延び，端部に面をもつ。たちあがり部下半に不明瞭な凹線文，受け部にミガキ。	粗砂粒多く含む・暗橙褐色	風化著しい・1/7片
	第38図307	浅鉢系A類	(13.50)	(13.80)	ー	ー	たちあがり部屈曲に段をもち，受け部から直線的に延び端部を丸く終える。外面にケズリ後ナデ状ハケ目。	粗砂粒若干含む・淡乳橙褐色	風化気味・1/4片
	第38図308	浅鉢系A類	ー	ー	(6.10)	ー	不明瞭な平底から直線的に延びる受け部をもち，たちあがり部との段をとどめる。内面に縦のケズリ。	砂粒多いがキメ細か・淡桃褐色	風化気味・1/5片
	第38図309	浅鉢系A類	7.10	7.40	2.80	5.30	あげ底から直線的に延び，たちあがり部は外反気味に直立，端部を丸く終え，外面にケズリ痕，内外ナデ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	良好・完形
	第38図310	脚台付鉢系B類	ー	ー	ー	ー	深い受け部から直線的に延び，たちあがり部上面を外方に拡張し凹線文を施す。外面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙灰色	風化・小片
	第38図311	脚台付鉢系E類	ー	ー	ー	ー	皿状の杯部外面に粘土紐を付け，たちあがり部を形作る。内面に斜めのミガキ，外面にケズリを施す。	砂粒若干含む・暗乳灰褐色	良好・小片
	第38図312	脚台付鉢系D類	ー	ー	ー	ー	受け部から大きく外反し，たちあがり部両端を肥厚し内傾する端面をもつ。内面にケズリ痕。	粗砂粒多く含む・淡黄褐色	風化・小片
	第38図313	口縁部	ー	ー	ー	ー	深い受け部に屈曲部の緩い段をもち，直立気味に立ち上がる端部を丸く終える。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化・小片
	第38図314	脚台付鉢系B類	(19.80)	ー	ー	ー	杯たちあがり部が逆三角形状で，上面に平坦面をもつ。	砂粒少なくキメ細か・明乳褐色	風化著しい・1/7片
	第38図315	脚台付鉢系D類	(13.30)	ー	ー	ー	深い受け部から直線的に延び，たちあがり部上面を外方に拡張し平坦面を，屈曲部で強い段をもつ。	粗砂粒若干含む・淡橙褐色	風化著しい・1/7片
	第38図316	脚台付鉢系D類	(14.40)	ー	ー	ー	ボール状の杯内部上面に段により，内傾する端面をもつ。内面にミガキ，外面にナデ状ハケ目。	砂粒目立つ・くすんだ橙褐色	良好・1/4片
	第38図317	脚台付鉢系D類	(13.60)	ー	ー	ー	深い受け部から直線的に延び，たちあがり部は短く外反する単純口縁状となる。内面にケズリ。	砂粒目立つ・淡灰褐色	風化著しい・1/3片
	第38図318	脚台付鉢系D類	12.40	11.60	ー	ー	深い受け部から緩く外反するたちあがり部上端に面をもち，端部を外方につまみ出す。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳褐色	風化著しい・1/2片
	第38図319	浅鉢系B類	ー	(19.50)	ー	ー	ナデ肩で胴部最大径に強い張りをもち，外反し端部上を拡張する。外面にナデ状ハケ目，内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡褐色	風化気味・1/6片
	第39図320	浅鉢系D2類	(15.00)	(14.20)	ー	ー	半球状の体部から緩く外反し，肥厚気味の端面をもつ。肩部にクシ歯状工具の刺突文，内面にケズリ。	砂粒含む・くすんだ茶褐色	良好・1/6片
	第39図321	浅鉢系D2類	(14.50)	(12.90)	ー	ー	半球状の体部から短く外反し，口縁上端を拡張し，直立する端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒含む・淡橙褐色	風化気味・1/6片
	第39図322	浅鉢系F1類	(13.80)	(12.80)	ー	ー	半球状の体部から短く外反し，口縁上端を拡張し，端面に凹線文を施す。内外共主に横の丁寧なミガキ。	キメ細か・淡乳灰褐色	良好・1/7片
	第39図323	浅鉢系F1類	(14.30)	(13.10)	ー	ー	半球状の体部から短く外反し，口縁上端を拡張し，端面に凹線文を施す。内外共に横の丁寧なミガキ。	砂粒含むがキメ細か・黒褐色	良好・1/5片
	第39図324	浅鉢系F1類	(14.60)	(15.60)	ー	ー	肩部に張りがなく，緩く外反し口縁上端部を拡張し，内傾する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡赤褐色	良好・1/6片
	第39図325	浅鉢系F1類	(14.40)	(15.70)	ー	ー	肩部の張りが少なく，短く外反し口縁上端部を直立気味に大きく拡張する。内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡茶褐色	風化著しい・1/6片
	第39図326	浅鉢系F1類	(20.80)	(18.50)	ー	ー	肩部の張りが少なく，くの字状に外反し，口縁端面は外傾気味に拡張し，凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化著しい・1/7片
	第39図327	浅鉢系D1類	(12.10)	(13.00)	ー	ー	球形の体部から，短く外反し上端部を肥厚し直立する端面をもつ。外面は縦・斜めのミガキ，内面ケズリ。	砂粒やや含む・淡赤褐色	風化気味・1/8片
	第39図328	浅鉢系D1類	(14.20)	(15.20)	ー	ー	肩部の張りが少なく，短く外反し口縁上端部を肥厚し直立する端面をもつ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・明淡橙褐色	風化気味・1/3片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量 口径	法量 胴径	法量 底部-胴径	法量 器高	形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
SX1	第39図329	浅鉢系D1類	(14.20)	(16.20)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反し，口縁端部は内傾気味に肥厚する。頸部に刺突文，内面にケズリ。	砂粒多く含む・赤褐色	風化著しい・1/5片
	第39図330	浅鉢系D1類	(14.80)	(14.80)	—	—	緩く外反した口縁上端を拡張，直立する端面に凹線文を施す。肩部に刺突文，外面にヘラ目，内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ暗茶褐色	良好・1/5片
	第39図331	浅鉢系C類	(20.50)	(19.60)	—	—	肩部の張りがなく，緩く外反する単純口縁をもつ。内面にケズリ。	砂粒少なくキメ細か・淡赤褐色	風化気味・1/5片
	第39図332	浅鉢系C類	(20.10)	(18.80)	—	—	肩部の張りがなく，緩く外反する単純口縁をもつ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡橙色	良好・1/5片
	第39図333	浅鉢系D3類	(21.00)	(20.40)	—	—	肩部の張りがなく，緩く外反し口縁上端部を肥厚し直立する端面をもつ。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡乳橙褐色	風化気味・1/5片
	第39図334	浅鉢系D3類	(17.40)	—	—	—	肩部の張りがなく，緩く外反し口縁端部を肥厚し内傾する端面をもつ。内面にケズリ。	粗砂粒含む・乳灰褐色	風化気味・1/5片
	第40図335	浅鉢系E類	(18.00)	(19.10)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反し内傾する端面をもつ。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・黄褐色	風化著しい・1/5片
	第40図336	浅鉢系E類	(21.08)	(18.90)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反，内傾する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡明褐色	風化著しい・1/5片
	第40図337	浅鉢系E類	(22.88)	(20.80)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反，内傾する端面に凹線文を施す。外面に横のミガキ，内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡褐色	風化気味・1/7片
	第40図338	浅鉢系F2類	(19.40)	(20.20)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反，肥厚し内傾する端面に凹線文を施す。肩部に刺突文，内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳灰色	風化気味・1/6片
	第40図339	浅鉢系F2類	(23.00)	(24.00)	—	—	胴部でやや張り，〈の字状に外反，端部を拡張する端面に凹線文を施す。肩部に刺突文，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・暗茶褐色	風化気味・1/5片
	第40図340	浅鉢系F2類	41.40	43.80	—	—	肩部の張り好少なく，〈の字状に外反，端部を拡張し端面に横ナデ，外面にナデ状ヘラ目，内面ケズリ。	粗砂粒多く含む・淡褐色	良好・1/2片
	第40図341	浅鉢系F2類	34.60	36.50	—	—	肩部の張り好少なく，緩く外反，上端部を拡張し端面に凹線文を施す。外面にナデ状ヘラ目，内面ケズリ。	粗砂粒多く含む・乳橙褐色	風化気味・1/2片
	第40図342	浅鉢系F2類	(23.20)	—	—	—	肩部が張り，〈の字状に外反，上端部をやや拡張する端面に凹線文を施す。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡黄褐色	風化・1/7片
	第40図343	浅鉢系F2類	(26.40)	—	—	—	肩部が張り緩く外反，上端部を拡張する端面に凹線文を施す。外面はハケ目後ミガキ，内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡黄褐色	風化気味・1/8片
	第40図344	深鉢系C類	(11.80)	(10.70)	—	—	肩部の張り好少なく緩く外反，上端部を肥厚気味に丸く終える。肩部に横ナデの後，内面にケズリ。	砂粒含む・明褐褐色	風化気味・1/3片
	第40図345	深鉢系C類	(13.10)	(12.00)	—	—	ナデ首で，胴部最大径に膨をもつ。〈の字状に長く外反，上端部を肥厚気味に丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡乳灰褐色	風化気味・1/7片
	第40図346	壺形土器B2類	(12.80)	(13.10)	—	—	胴部の張り好少なく，〈の字状に外反，上端部をやや拡張する。肩部横ナデの後，外面ミガキ，内面ケズリ。	粗砂粒含む・淡褐色	風化気味・1/6片
	第40図347	深鉢系B2類	(9.40)	(11.20)	—	—	肩部の張り好少なく，緩く外反，上端に平坦面をもつ。胴部にクシ描波状文，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・黄褐色	風化気味・1/4片
	第40図348	深鉢系B1類	(9.40)	(11.45)	—	—	胴部の張り好少なく，口縁は上方に拡張，外面に凸帯を付け下端を作出す。肩部に横ナデの後，内面ケズリ。	粗砂粒多く含む・淡黄褐色	風化気味・1/4片
	第41図349	深鉢系B2類	(11.60)	—	—	—	短く外反し，口縁上端をつまみ上げ，下端を丸く終える。内面にケズリ。	粗砂粒目立つ・橙褐色	風化気味・1/8片
	第41図350	深鉢系B1類	(8.40)	—	—	—	胴部の張り好少なく，直立する口縁上端に平坦面をもつ。頸部に凹孔をもつ。内面にケズリ。	砂粒やや目立つ・淡橙褐色	風化著しい・1/8片
	第41図351	深鉢系B1類	9.60	9.50	4.00	10.10	張りがない胴部からの字状に外反，上端部をつまみ上げる，外面は太目のミガキ，内面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡橙褐色	風化気味・完形
	第41図352	手づくね土器B類	10.00	8.80	4.10	9.30	あげ底で開き気味の深い体部から，短く外反する単純口縁をもつ。押圧成形後内面にケズリ。器壁は厚手。	砂粒少ない・くすんだ橙褐色	良好・4/5片
	第41図353	手づくね土器B類	10.20	9.10	4.20	9.40	あげ底で開き気味の深い体部から，短く外反する単純口縁をもつ。押圧成形後内面にケズリ。器壁は厚手。	砂粒少し含む・くすんだ橙褐色	良好・2/3片
	第41図354	深鉢系A類	10.80	11.40	—	—	肩張に横ナデの後をもち，〈の字状に外反し端部を丸く終える。内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡橙褐色	風化著しい・1/2片
	第41図355	手づくね土器B類	(7.80)	(7.80)	—	—	胴部に張りをもち，〈の字状に外反し端部に膨をもつ。器壁は厚手。	砂粒含むがキメ細か・くすんだ暗茶褐色	良好・1/6片
	第41図356	手づくね土器B類	(6.90)	(6.20)	—	—	半球状の体部から短く外反し，口縁端部を丸く終える。外面に押圧痕。	粗砂粒多く含む・黒灰色	風化著しい・1/3片
	第41図357	手づくね土器A1類	7.30	8.40	2.60	7.40	不安定な平底のコップ状を呈する。押圧成形後内面にケズリ。器壁は厚手。	細砂粒目立つ・くすんだ淡橙褐色	良好・2/3片
	第41図358	手づくね土器A1類	(8.80)	—	—	—	開き気味で端部を丸く終える。器壁は厚手。	粗砂粒含む・暗褐色	風化気味・1/8片
	第41図359	手づくね土器A2類	—	—	—	—	胴部にやや張りをもち，〈の字状に外反し端部を丸く終える。器壁は厚手。	砂粒少し含む・橙褐色	風化著しい・小片
	第41図360	手づくね土器A2類	—	—	—	—	胴部に張りをもち，〈の字状に外反し端部を丸く終える。器壁は厚手。	砂粒多く含む・明褐褐色	風化気味・小片
	第41図361	口縁部	—	—	—	—	肩部に横ナデの後をもち，〈の字状に短く外反し，上端に面をもち端部を丸く終える。内面ケズリ。厚手。	細砂粒目立つ・暗橙褐色	良好・小片
	第41図362	口縁部	—	—	—	—	肩部で張い膨をもち直線的に外反し端部を丸く終える。内面にケズリ。器壁は厚手。	砂粒含む・赤茶褐色	良好・小片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底径・脚端径	器高			
SX1	第41図363	手づくね土器A2類	—	—	—	—	短く外反し，口縁端部を丸く終える。内面にケズリ。器壁は厚手。	砂粒含む・暗橙褐色	良好・小片
	第41図364	口縁部	—	—	—	—	くの字状に短く外反し，内傾する口縁端部をもつ。内面に横のミガキ。	砂粒多く含む・暗灰橙褐色	良好・小片
	第41図365	口縁部	—	—	—	—	緩く短く外反し，口縁上端部を拡張気味とするが，頸部内面が肥厚し強く屈曲している。内面にケズリ。	粗砂粒含む・淡橙褐色	良好・小片
	第41図366	口縁部	—	—	—	—	口縁部下で緩い屈曲をもち端部に至る。外面にハケ目，内面にミガキ。	砂粒少し含む・暗橙褐色	良好・小片
	第41図367	口縁部	—	—	—	—	緩く短く外反し，口縁上端部を丸く終える。内面にケズリ。	砂粒少し含む・淡褐色	風化気味・小片
	第41図368	口縁部	—	—	—	—	張りがない胴部から，くの字状に外反し，外傾する口縁端部に横ナデを加える。外面ミガキ，内面ケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡褐色	良好・小片
	第41図369	口縁部	—	—	—	—	張りがない胴部から，くの字状に短く外反し，口縁上端部を拡張する。	砂粒含む・暗黄褐色	良好・小片
	第41図370	浅鉢系D2類	—	—	—	—	半球状の体部から短く外反し，口縁端部をつまみ上げる。胴部にクシ歯状工具の刺突文，内面に押圧痕。	粗砂粒含む・橙褐色	風化気味・小片
	第41図371	口縁部	—	—	—	—	ボール状の杯部から，くの字状に外反し，端部を丸く終える。内面にケズリ。	砂粒多く含む・暗橙褐色	風化気味・小片
	第42図372	器台形土器	—	9.00	—	—	筒状の胴部上半を緩く，下半を急に外反し，裾部に円孔を施す。外面と内面上半をミガキ，下半をケズリ。	粗砂粒多く含む・乳褐色	風化気味・胴部のみ完存
	第42図373	器台形土器	—	—	—	—	外反する口縁端部を内傾し凹線文を施す。	砂粒含む・乳黄白色	風化気味・小片
	第42図374	器台形土器	(23.20)	—	—	—	外反する口縁端部に横ナデを加え，内傾する端面にクシ描波状文を施す。	砂粒含むがキメ細か・淡乳黄褐色	良好・1/4片
	第42図375	器台形土器	—	12.80	—	—	筒状の胴部上半を緩く外反し，上端部を肥厚気味の口縁となる。筒状に太目のヘラ描沈線文を施す。	砂粒多く含む・暗橙色	風化著しい・1/4片
	第42図376	高杯形土器A1類	(21.00)	—	—	—	杯たちあがり部上端を大きく拡張し，平坦面に凹線文を施す。	砂粒多く含む・暗茶褐色	風化著しい・1/7片
	第42図377	高杯形土器A1類	—	—	—	—	杯たちあがり部上端を拡張し，平坦面をもつ。	キメ細か・明赤橙色	良好・小片
	第42図378	高杯形土器A1類	—	—	—	—	杯たちあがり部上端を拡張し，平坦面に凹線文を施す。	砂粒若干含む・くすんだ暗茶褐色	良好・小片
	第42図379	高杯形土器B2類	(23.40)	—	—	—	内湾気味に直立，上端に平坦面をもつ。たちあがり部外面に凹線文を施す。受け部外面にケズリ。	粗砂粒多く含む・淡乳褐色	風化気味・1/8片
	第42図380	高杯形土器B3類	(22.20)	—	—	—	受け部外面にケズリ，内面にミガキ，脚部外面にミガキ，内面上半に絞り目と円盤充填痕，下半にケズリ。	砂粒多く含む・明赤褐色	風化気味・1/3片
	第42図381	高杯形土器B3類	(24.20)	—	—	—	杯たちあがり部は内湾気味に外反，端部に面をもつ。受け部外面にケズリ。	砂粒多く含む・淡赤褐色	風化著しい・1/8片
	第42図382	高杯形土器B3類	(20.40)	—	—	—	杯たちあがり部は内湾気味に外反，端部に面。杯部内面は放射状，外面はケズリ後，脚にかけミガキ。	粗砂粒含む・淡橙褐色	良好・1/3片
	第42図383	高杯形土器A2類	(20.20)	—	—	—	屈曲部に強い稜をもち，直線的に外反し上端に面をもつ。受け部外面にケズリ。	砂粒若干含む・淡明褐色	風化気味・1/4片
	第42図384	高杯形土器B3類	(19.60)	—	—	—	直線的に外反し上端に平坦面をもつ。杯部内面に放射状のミガキ，受け部外面にナデ状ハケ目後ケズリ。	粗砂粒多く含む・赤茶褐色	良好・1/4片
	第42図385	高杯形土器B1類	(20.40)	—	—	—	杯たちあがり部は外反気味に立ち上がり端部を丸く終える。	粗砂粒多く含む・赤褐色	風化著しい・1/7片
	第42図386	高杯形土器B1類	(16.60)	—	—	—	杯たちあがり部は短く立ち上がり端部を丸く終える。杯内外面に一方向・横・弧状のミガキ。脚部は中実。	粗砂粒若干含む・くすんだ橙褐色	良好・脚端部を欠く
	第42図387	高杯形土器B4類	17.20	—	—	—	杯たちあがり部は強く外反し端部を丸く終える。杯内面に横のミガキ。外面から脚にケズリ。脚部は中実。	砂粒若干含む・乳橙褐色	風化気味・2/3片
	第43図388	高杯形土器B4類	16.40	—	8.30	—	杯たちあがり部は直線的に外反し上端に平坦面。脚端面に凹線文。外面押圧痕，杯内面にケズリ。赤彩。	砂粒多く含む・くすんだ暗赤褐色	良好・完形
	第43図389	高杯形土器B3類	(18.00)	—	—	—	杯たちあがり部は短く外反し上端に平坦面，杯内外面にミガキ。	粗砂粒若干含む・暗茶褐色	風化気味・1/4片
	第43図390	高杯形土器B5類	16.10	—	—	—	杯たちあがり部内面に段をもち，端部を外方に拡張。外面は脚から杯部にかけケズリ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・乳橙褐色	風化気味・1/4片
	第43図391	高杯形土器B5類	17.40	—	11.00	11.60	杯たちあがり部上端を外反。脚端は2段。杯部外面ナデ状ハケ目，脚部ミガキ。杯部内面螺旋状ミガキ。	粗砂粒多く含む・暗橙褐色	良好・完形
	第43図392	高杯形土器C1類	20.70	—	12.10	15.40	杯屈曲部から肥厚し大きく外反。外面に縦・横ミガキ。杯部内面に横・弧状のミガキ。脚部は中実。	砂粒多く含む・くすんだ乳灰褐色	良好・完形
	第43図393	高杯形土器D1類	—	—	—	—	杯たちあがり部の屈曲がほとんど失われる。外面にナデ状ハケ目，杯部内面に弧状のミガキ。脚部は中実。	砂粒若干含む・くすんだ暗茶褐色	良好・2/3片
	第43図394	高杯形土器D1類	17.80	—	12.00	10.70	杯屈曲部から肥厚し大きく外反。脚部は中実で面取り痕残す。杯内外面に一方向・横のミガキ。	砂粒多く含む・赤褐色	良好・完形
	第43図395	高杯形土器C1類	(21.80)	—	—	—	屈曲部に強い稜をもち，肥厚気味に外反。杯内外面に斜めのミガキ。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡暗褐色	風化気味・1/4片
	第43図396	高杯形土器C1類	(20.20)	—	—	—	屈曲部に強い稜をもち，肥厚気味に外反。	粗砂粒多く含む・くすんだ褐色	風化気味・1/6片
	第43図397	高杯形土器D3類	(19.80)	—	—	—	屈曲部で緩い段をもち，杯たちあがり部は直線的で端部を丸く終える。杯内外面に放射状のミガキ。	砂粒多く含む・淡暗茶褐色	良好・1/6片
	第43図398	高杯形土器B1類	—	—	—	—	屈曲部から短く直線的なたちあがり部をもつ。杯内外面に縦・横のミガキ。	キメ細か・赤褐色	良好・小片

出土遺構等名称	報告番号	器種	法量				形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
			口径	胴径	底部・脚端部	器高			
SX1	第43図399	高杯形土器C2類	—	—	—	—	屈曲部から線的に大きく外反。	砂粒多く含む・淡橙褐色	風化著しい・小片
	第43図400	高杯形土器E類	(20.00)	—	—	—	ほぼ水平な杯受け部から肥厚気味に大きく外反。外面に弧状，内面に放射状・横のミガキ。	細砂粒目立つ・くすんだ淡茶褐色	良好・1/6片
	第43図401	高杯形土器D1類	(22.40)	—	—	—	屈曲部に強い稜をもち，肥厚気味に外反。たちあがり部内外面に弧状ミガキ。受け部内面に放射状ミガキ。	細砂粒目立つ・くすんだ淡茶褐色	良好・1/6片
	第44図402	高杯形土器D2類	(24.10)	—	—	—	ほぼ水平な杯受け部から大きく外反。受け部外面に斜め，内面に放射状のミガキ。	細砂粒目立つ・淡乳褐色	風化気味・1/4片
	第44図403	高杯形土器E類	—	—	—	—	受け部内面に稜をもち大きく外反。内面に弧状ミガキ。脚柱部外面に縦ミガキ，内面に円盤充填痕。赤彩。	キメ細か・淡乳灰褐色	風化気味・1/6片
	第44図404	高杯形土器E類	—	—	—	—	杯受け部内面に横，杯たちあがり部に斜めのミガキ。	キメ細か・淡褐色	良好・小片
	第44図405	高杯形土器E類	—	—	—	—	屈曲部に強い稜をもち，大きく外反。	粗砂粒多く含む・淡乳桃褐色	風化・小片
	第44図406	高杯形土器E類	(36.20)	—	—	—	水平な杯受から大きく外反。外面は受け部弧状，脚部縦ミガキ。内面は杯部放射状ミガキ，円盤充填痕。	細砂粒目立つ・くすんだ淡茶褐色	良好・1/2片
	第44図407	脚・脚台部A類	—	—	—	—	ハの字状に開く端部を下方に拡張し丸く終える。外面にミガキ，内面にケズリ。円孔をもち赤彩。	キメ細か・淡乳褐色	普通・小片
	第44図408	脚・脚台部B1類	—	—	13.10	—	脚柱部からラッパ状に開く。外面ハケ目後縦・弧状ミガキ。杯部内面放射状ミガキ，脚に絞り目とケズリ。	砂粒含むがキメ細か・くすんだ明橙褐色	良好・杯部を欠く
	第44図409	脚・脚台部B1類	—	—	—	—	杯受け部外面に弧状，脚に縦のミガキ。脚柱部内面は円盤充填痕と絞り目を残しケズリ。	砂粒やや多く含む・淡明橙褐色	良好・脚柱部のみ遺存
	第44図410	脚・脚台部B2類	—	—	—	—	脚柱部外面に縦のミガキ。内面に絞り目。1段3つの円孔を2段施す。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	風化・脚柱部のみ遺存
	第44図411	脚・脚台部B類	(21.20)	—	—	—	直線的に開く脚端部に内湾気味の端面をもち，下端に平坦面をもつ。内外面ともケズリ。	粗砂粒多く含む・乳褐色	風化気味・1/4片
	第44図412	脚・脚台部B類	—	—	—	—	脚裾部で外反する。外面に縦のミガキ。	砂粒含む・赤橙色	普通・1/3片
	第44図413	脚・脚台部B類	—	—	—	—	ラッパ状に開く脚端部に，外傾気味に下方に拡張する脚端部をもつ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳白色	良好・1/4片
	第44図414	脚・脚台部C1類	—	—	—	—	やや中実気味の脚柱部で外面に縦のミガキ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡桃灰白色	風化気味・杯と裾部を欠く
	第44図415	脚・脚台部C2類	—	—	—	—	中実気味の脚柱部で，裾部内面は低い。外面に縦のミガキ，杯部内面に一方向のミガキ。	砂粒多く含む・淡灰褐色	風化気味・杯と裾部を欠く
	第44図416	脚・脚台部C1類	—	—	9.80	—	中実気味の脚柱部で，裾部内面は低い。内面にケズリ。杯部との接合面で剥落。	砂粒多く含む・明橙褐色	良好・杯部を欠く
	第44図417	脚・脚台部C2類	—	—	—	—	中実の脚柱部で，裾部内面は低い。外面に縦のミガキ。	砂粒多く含む・淡暗乳灰色	風化気味・杯と裾部を欠く
	第44図418	脚・脚台部C2類	—	—	—	—	中実の脚柱部で，外面に縦のミガキ。	砂粒多く含む・くすんだ赤褐色	良好・杯と裾部を欠く
	第44図419	脚・脚台部C4類	—	—	—	—	中実の脚柱部で，裾部内面は低い。外面に縦のミガキ。杯部内面に放射状のミガキ。	砂粒多く含む・くすんだ淡乳灰褐色	風化気味・杯と裾部を欠く
	第45図420	脚・脚台部C3類	—	—	7.60	—	中実の脚柱部からハの字状に外反し，端部を丸く終える。脚裾部内面に押圧痕。	砂粒含むがキメ細か・明淡橙褐色	風化著しい・杯部を欠く
	第45図421	脚・脚台部C3類	—	—	4.80	—	ハの字状に外反し，端部に面をもつ。	砂粒多く含む・淡乳橙褐色	風化気味・1/2片
	第45図422	脚・脚台部C類	—	—	(13.60)	—	ハの字状に外反し，内傾気味の端面に凹線文を施す。	砂粒多く含む・くすんだ淡灰褐色	風化・1/8片
	第45図423	脚・脚台部C類	—	—	(9.60)	—	ハの字状に外反し，端面に段をもち下端部をふんばり気味に拡張する。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡灰褐色	風化気味・1/6片
	第45図424	脚・脚台部C類	—	—	(11.20)	—	脚部からハの字状に外反し，端面に段をもち下端部を拡張気味とする。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡灰褐色	良好・1/4片
	第45図425	脚・脚台部C類	—	—	11.00	—	ハの字状に外反し，下端部を拡張気味とする。外面に縦のミガキ。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	良好・1/2片
	第45図426	脚・脚台部C類	—	—	6.80	—	ハの字状に外反し，端面に横ナデを加え肥厚気味とする。内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡橙褐色	風化著しい・杯部を欠く
	第45図427	脚・脚台部C4類	—	—	9.00	—	杯部からハの字状に外反し，端面に横ナデを加え肥厚気味とする。脚台部内面は低い。	粗砂粒多く含む・明乳灰褐色	風化著しい・杯部を欠く
	第45図428	脚・脚台部C類	—	—	(8.40)	—	ハの字状に外反し，下端部を拡張気味とする。脚台部内面は低い。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	良好・1/7片
	第45図429	脚・脚台部C類	—	—	(9.20)	—	ハの字状に外反し，端面に横ナデを加え肥厚気味とする。脚台部内面は低い。外面に押圧痕。	粗砂粒多く含む・くすんだ淡橙褐色	風化著しい・1/4片
	第45図430	脚・脚台部C類	—	—	(10.20)	—	ハの字状に外反し，端面に横ナデを加え肥厚気味とする。内外面ともナデ。	砂粒多く含む・くすんだ淡乳褐色	良好・1/4片
	第45図431	脚・脚台部C類	—	—	(5.00)	—	杯部からハの字状に短く外反し，端面に横ナデを加え肥厚気味とする。	砂粒多く含む・赤茶褐色	風化気味・1/3片
	第45図432	脚・脚台部C3類	—	—	4.60	—	杯部から内湾気味に短く外反し，平底となる。外面に縦のミガキ，杯内面に放射状のミガキ。	砂粒多く含む・明橙褐色	良好・脚台部のみ遺存
	第45図433	脚・脚台部C3類	—	—	3.70	—	やや突出し気味の底となり，外面に押圧痕をとどめる。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	風化気味・脚台部のみ遺存
	第45図434	脚・脚台部C3類	—	—	6.60	—	杯部からくの字状に短く外反し，平底気味となる。	砂粒多く含む・暗橙褐色	良好・1/3片
	第45図435	脚・脚台部C3類	—	—	5.00	—	杯部からくの字状に短く外反し，平底となる。	細砂粒多く含む・くすんだ暗茶褐色	良好・脚台部のみ遺存

包含遺構等名称	報告番号	器種	法量 口径	法量 胴径	法量 底部-脚径	法量 器高	形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
SX1	第45図436	脚-脚台部D1類	—	—	5.50	—	杯部からくの字状に短く外反し，低いあげ底となる。	細砂粒多く含む・淡明橙褐色	風化著しい・2/3片
	第45図437	脚-脚台部C3類	—	—	7.00	—	杯部からくの字状に短く外反し，低いあげ底となる。外面に押圧痕，内面にケズリ。	砂粒多く含む・暗橙色	風化気味・脚台部のみ遺存
	第45図438	脚-脚台部D2類	—	—	(7.20)	—	杯部から短く外反し，下端に平坦面をもち低いあげ底となる，内面にケズリ。	砂粒多く含む・暗橙褐色	風化著しい・脚台部のみ遺存
	第45図439	脚-脚台部D2類	—	—	(6.00)	—	杯部からくの字状に短く外反し，下端に平坦面をもち低いあげ底となる。外面に押圧痕。	砂粒多く含む・暗橙褐色	風化気味・脚台部のみ遺存
	第45図440	脚-脚台部D2類	—	—	6.60	—	杯部からくの字状に短く外反し，下端に平坦面をもち低いあげ底となる。体部外面にナデ痕。	細砂粒若干含む・くすんだ淡橙褐色	風化気味・1/2片
	第45図441	脚-脚台部D2類	—	—	5.00	—	杯部から短く外反し，下端に平坦面をもち低いあげ底となる。外面に押圧痕。	細砂粒多く含む・くすんだ淡橙褐色	風化気味・脚台部のみ遺存
	第45図442	脚-脚台部D1類	—	—	6.80	—	体部から短く外反し，下端を丸く終え低いあげ底となる。外面に押圧痕とミガキ。	砂粒含む・明橙褐色	良好・脚台部のみ遺存
	第45図443	脚-脚台部D1類	—	—	4.90	—	体部からくの字状に短く外反し，下端を丸く終え低いあげ底となる。外面に押圧痕。	細砂粒多く含む・明橙褐色	風化気味・脚台部のみ遺存
	第45図444	脚-脚台部D1類	—	—	(5.40)	—	体部からくの字状に短く外反し，下端を丸く終え低いあげ底となる。外面に押圧痕。	砂粒多く含む・くすんだ淡橙色	風化気味・1/3片
	第45図445	脚-脚台部D1類	—	—	(3.20)	—	体部に粘土紐を貼り付け，高台風の低いあげ底となる。外面に押圧痕とミガキ。	砂粒多く含む・黒灰色	普通・脚台部のみ遺存
	第45図446	脚-脚台部D1類	—	—	2.80	—	体部に粘土紐を貼り付け，高台風の低いあげ底となる。外面に押圧痕。	砂粒含むがキメ細かくすんだ茶褐色	風化気味・2/3片
	第45図447	平底-底部A類	—	—	6.60	—	体部はやや内湾気味。内面にケズリ。	細砂粒多く含む・淡橙褐色	普通・底部のみ遺存
	第45図448	平底-底部A類	—	—	8.00	—	体部はやや内湾気味。外面に面取り痕。	砂粒含むがキメ細か・淡茶褐色	風化著しい・1/2片
	第45図449	平底-底部A類	—	—	(5.40)	—	外面に擬ミガキ，内面にナデ。	細砂粒若干含む・乳褐橙褐色	良好・1/3片
	第45図450	平底-底部B1類	—	—	(3.90)	—	外面に擬ミガキ，内面にナデ。	砂粒多く含む・赤茶褐色	良好・底部のみ遺存
	第45図451	平底-底部B1類	—	—	4.80	—	底部ラインはやや不明瞭。外面にナデ状ハケ目，内面にナデ。	細砂粒含む・暗赤茶褐色	良好・1/2片
	第45図452	平底-底部B3類	—	—	6.60	—	底部ラインはやや不明瞭。外面に擬のミガキ，下端に面取り痕，内面にケズリ。	砂粒含む・くすんだ淡橙色	風化気味・2/3片
	第46図453	平底-底部B3類	—	—	13.40	—	内面にケズリ。	細砂粒多く含む・淡乳灰褐色	風化著しい・2/3片
	第46図454	平底-底部B3類	—	—	11.80	—	底部ラインはやや不明瞭。外面に擬のハケ目，下端に面取り痕，内面にシャープなケズリ。	細砂粒多く含む・淡乳黄褐色	風化気味・2/3片
	第46図455	平底-底部C3類	—	—	6.20	—	外面に擬ハケ目。	細砂粒若干含む・橙褐色	風化気味・底部のみ遺存
	第46図456	平底-底部C3類	—	—	8.00	—	外面にナデ状ハケ目，内面にシャープなケズリ。	砂粒若干含む・明橙色	良好・底部のみ遺存
	第46図457	平底-底部C3類	—	—	7.60	—	外面下端に面取り痕，内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡黄褐色	風化著しい・底部のみ遺存
	第46図458	平底-底部C3類	—	—	(11.80)	—	内面にシャープなケズリ。	砂粒多く含む・明乳橙色	良好・1/3片
	第46図459	平底-底部C3類	—	—	12.80	—	外面下端に面取り痕，内面に一方向のシャープなケズリ。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	良好・1/2片
	第46図460	平底-底部C3類	—	—	10.80	—	外面に面取り痕。	砂粒多く含む・淡乳黄褐色	風化気味・1/2片
	第46図461	平底-底部B2類	—	—	3.00	—	底部ラインは不明瞭。外面に擬のミガキ，内面にケズリ。	砂粒含む・暗灰色	良好・底部のみ遺存
	第46図462	平底-底部B2類	—	—	4.20	—	底部ラインは不明瞭。外面に擬のミガキ，内面に押圧痕とケズリ。	砂粒多く含む・明赤褐色	良好・2/3片
	第46図463	平底-底部B2類	—	—	4.00	—	底部ラインは不明瞭。内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ暗橙褐色	風化気味・底部のみ遺存
	第46図464	平底-底部C2類	—	—	(7.00)	—	底部ラインは不明瞭。	砂粒含む・くすんだ明橙色	風化著しい・1/3片
	第46図465	平底-底部C2類	—	—	6.00	—	底部ラインは不明瞭。外面下端に面取り痕，内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳灰褐色	良好・底部のみ遺存
	第46図466	平底-底部C2類	—	—	(6.40)	—	壊形の体部下半に不自然な段をもち，不明瞭な底部となる。内面にケズリ。	砂粒多く含む・くすんだ淡灰橙褐	色風化著しい・1/3片
	第46図467	底部	—	—	5.40	—	体部は中や内湾気味で，張かなあげ底。外面に擬のミガキ，内面にケズリ。	砂粒多く含む・淡乳黒色	良好・1/2片
	第46図468	あげ底-底部B1類	—	—	5.80	—	張かに高台状となる低いあげ底で，外面下端に面取り痕。	砂粒多く含む・暗褐色	良好・底部のみ遺存
	第46図469	あげ底-底部B1類	—	—	4.30	—	低いあげ底で，外面下端に面取り痕，内面に押圧痕。	砂粒多く含む・淡乳灰色	良好・底部のみ遺存
	第46図470	あげ底-底部B1類	—	—	(4.00)	—	張かなあげ底で，内面にハケ目。	砂粒少なくキメ細か・暗橙色	良好・1/3片
	第46図471	あげ底-底部B1類	—	—	4.80	—	張かなあげ底で，外面に面取り痕，内面にケズリ。	砂粒多く含む・暗灰色	良好・1/3片
	第46図472	あげ底-底部C1類	—	—	4.70	—	張かなあげ底で，外面に擬のミガキ。	砂粒多く含む・明橙色	風化気味・底部のみ遺存
	第46図473	あげ底-底部B3類	—	—	4.60	—	張かなあげ底で，外面に擬のミガキ，内面にケズリ。	砂粒多く含む・乳赤褐色	風化気味・底部のみ遺存
	第47図474	あげ底-底部B3類	—	—	(8.40)	—	張かなあげ底で，内面にケズリ。	砂粒多く含む・明橙褐色	良好・1/3片
							壊形土器№249に対応か。		
	第47図475	あげ底-底部B3類	—	—	9.20	—	外面にナデ状ハケ目，内面にケズリ。	細砂粒多く含む・くすんだ明橙褐色	良好・2/3片
	第47図476	あげ底-底部B3類	—	—	8.00	—	張かなあげ底で，外面に擬かなハケ目，内面にケズリ。	砂粒多く含む・明橙褐色	良好・1/2片

出土遺構等名称	報告番号	器　種	法　量 口径	胴径	底部-胴部径	器高	形態および成形・調整等の特徴	胎土・色調	遺存状況等
SX1	第47図477	あげ底・底部B3類	−	−	9.00	−	僅かなあげ底で、外面に面取り痕、内面にシャープなケズり。 図形土器№206に対応か。	細砂粒多く含む・淡乳褐色	風化加暁・1/2片
	第47図478	あげ底・底部B3類	−	−	10.20	−	僅かなあげ底で、外面に細かなハケ目。	細砂粒多く含む・くすんだ淡乳褐色	風化加暁・1/2片
	第47図479	あげ底・底部B3類	−	−	12.00	−	僅かなあげ底で、外面にナデ状ハケ目、下端にタタキ状痕跡あり。内面は剥落。	細砂粒多く含む・赤橙褐色	普通・底部のみ遺存
	第47図480	あげ底・底部C1類	−	−	8.80	−	僅かなあげ底で、内面にケズり。	砂粒含むがキメ細か・淡灰褐色	良好・1/2片
	第47図481	あげ底・底部C1類	−	−	7.50	−	僅かなあげ底で、外面に細かなハケ目、内面にケズり。	砂粒含むがキメ細か・淡乳灰褐色	良好・底部のみ遺存
	第47図482	あげ底・底部C1類	−	−	5.80	−	僅かなあげ底で、外面に太いミガキ、内面にケズり。	砂粒含む・明橙褐色	良好・底部のみ遺存
	第47図483	あげ底・底部C1類	−	−	6.60	−	内面にケズり。	砂粒含む・淡乳橙灰色 暗褐色	風化気味・底部のみ遺存
	第47図484	あげ底・底部C1類	−	−	7.20	−	僅かなあげ底で、外面にナデ痕跡、内面にケズり。	砂粒多く含む・暗灰色	良好・1/2片
	第47図485	あげ底・底部C1類	−	−	3.60	−	不明瞭で僅かなあげ底で、外面に面取り痕、内面にケズり。	砂粒多く含む・淡灰褐色	良好・2/3片
	第47図486	あげ底・底部C1類	−	−	5.50	−	僅かなあげ底で、外面にミガキ。	砂粒含むがキメ細か・くすんだ乳灰色	良好・底部のみ遺存
	第47図487	あげ底・底部B2類	−	−	4.80	−	不明瞭なあげ底で、内面にケズり。	砂粒含むがキメ細か・くすんだ暗褐色	風化著しい・底部のみ遺存
	第47図488	土製勾玉	現存長 4.30	現存幅 1.90	現存厚 2.40	重量 15.20g	敲面に面取りされ、頭部に平坦面、穿孔は2方向から施す。	細砂粒やや含む・赤みがかった灰茶褐色	風化気味・下端部を欠く
包含層	第47図489	壺形土器B3類	(15.20)	−	−	−	くの字状に緩く外反し端部に面をもつ。胴部外面にタタキ目状痕跡、内面にケズり。	細砂やや含む・乳灰色	風化加暁・1/2片

第4表　出土石器類観察表（単位はcm，最大値を表示，カッコ内は現存値）

報告番号	器　種	石　材	法　量 最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	出土地区・遺構	備　考
第48図490	石鏃	凝灰岩類	1.55	1.25	0.30	0.35	SX1	
第48図491	石鏃	凝灰岩類	2.05	1.75	0.35	1.52	SX1	未製品
第48図492	石鏃	珪質凝灰岩	3.40	1.85	0.35	1.26	SB7	
第48図493	使用痕のある剥片	珪質凝灰岩	2.85	1.65	0.55	3.35	SB11 剥離	
第48図494	模形石器	珪質凝灰岩	4.30	7.90	1.60	52.42	SX1	
第48図495	模形石器	凝灰岩類	2.95	3.85	1.20	14.36	SX1	
第48図496	削片	凝灰岩類	3.90	3.35	0.80	10.10	SX1	
第48図497	削片	細粒凝灰岩	5.00	2.80	1.60	24.67	SX1	
第48図498	剥片	細粒凝灰岩	(4.30)	(3.75)	(1.70)	27.36	SK1	打面部欠損
第48図499	使用痕のある剥片	細粒凝灰岩	4.80	3.50	0.70	10.38	SX1	剥片剥離角度120度
第48図500	剥片	細粒凝灰岩	4.35	5.35	0.80	17.65	SX1	剥片剥離角度109度
第48図501	剥片	流紋岩類	5.10	7.60	1.60	69.59	SX1	打点破砕
第48図502	部分磨製石斧	流紋岩類	6.00	3.55	1.00	22.36	SX1	
第49図503	太型蛤刃石斧転用敲打具	細粒閃緑岩	4.95	6.30	3.55	157.66	SB8	刃部と破損面に敲打痕
第49図504	太型蛤刃石斧	細粒閃緑岩	(5.60)	(5.90)	(3.50)	122.21	SX1	破損
第49図505	太型蛤刃石斧	細粒閃緑岩	(5.80)	(6.20)	(5.15)	266.76	SB9	両端を破損
第49図506	太型蛤刃石斧転用敲打具	細粒閃緑岩	12.90	6.50	4.90	740.00	SB9	刃部を破損後敲打具に転用
第49図507	太型蛤刃石斧未製品	細粒閃緑岩	(9.90)	(7.80)	(4.50)	494.00	SB8	未製品，破損
第50図508	砥石	半花崗岩	8.85	5.35	3.20	195.13	SB12	被熱，再利用または転用か
第50図509	砥石	半花崗岩	7.40	3.30	1.90	82.07	SX1	被熱，破片
第50図510	砥石	花崗岩類	10.60	12.50	5.10	1,198.00	SX1	一辺破損，表裏に研磨痕
第50図511	砥石	半花崗岩	9.10	4.80	3.50	177.30	SX1	破損後に再利用
第50図512	砥石	半花崗岩	6.10	2.90	1.90	82.07	SB7	破片，主研磨面一面のみ
第51図513	ハンマーストーン	流紋岩類	14.40	9.90	3.80	852.00	SK2	石核の転用か
第51図514	ハンマーストーン	流紋岩類	21.00	6.50	5.70	1,012.00	SX1	自然礫素材

Ⅵ ま と め

今回の調査では，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての，中屋遺跡における集落構成の一部が明らかとなった。しかし，B地点については，次年度に南半部の報告[1]と，豊栄町教育委員会が実施した，北側地区の報告[2]が予定されているため，集落全体の構造や変遷の検討については，南半部の報告で取り上げることとし，ここでは遺構と遺物について，若干の問題点を整理する。

1 集落について

当遺跡は，山麓斜面に広がる緩傾斜面に派生した，低い尾根筋を中心に広がる集落遺跡である。しかし，周辺一帯が開墾により削平されており，遺構の遺存度は低い。そのため，開墾の各段に散在もしくは密集する柱穴の配置状況から，居住空間やその単位などの推定は難しい。

検出した遺構は，竪穴住居跡14，掘立柱建物跡6，土壙3，性格不明の遺構1と柱穴で，ここでは竪穴住居跡と土壙，性格不明の遺構についてふれる。

(1) 遺構の時期

遺物については次項で述べるが，時代の判明した遺構は次のとおりである。

中期後葉ではSB9があげられ，SB6・7・8もこの時期の可能性が高い。

後期前葉ではSK1，SX1があり，末葉まで継続している。

後期中葉ではSK2があり，後葉まで継続する可能性がある。

後期後葉ではP5，SB8—P1があげられる。

後期末葉ではP1・3・4があげられる。

古墳時代前期前葉としてはSB11・12，SK3があり，SB14もこの時期と考えられる。

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は，柱穴の分布から調査区中央部を中心にほぼ全域に分布したと考えられるが，ここでは確認できた14軒について分類を行う。

平面プランでは，円形ないし楕円形プランが4軒（SB1・6・11・13），辺の中央が外に湾曲気味の隅丸方形が4軒（SB4・5・7・8），隅丸気味も含めた方形が4軒（SB9・10・12・14），台形ないしは多角形の可能性のあるもの1軒（SB2）などに分れる。

柱穴配置については，円形ないしは楕円形プランの住居跡で多角形の柱穴配置を，方形のものでは4本柱の方形配置をとる。SB7については不明確な部分があるが，SB8と共に壁際に等間隔で支柱穴を配しており，多角形の柱穴配置をとる可能性が高い。

壁溝は，SB3・4以外で確認されたが，SB7・9では部分的な遺存である。特に，SB9では，遺構検出面で確認された壁際の暗色帯と，途切れ気味で不鮮明な壁溝の状態から，壁際に板材を立て，杭などで固定する構造[3]が考えられる。

炉跡は，床面中央部に楕円形気味の土壙として設けている。古墳時代前期前葉のSB11・12・14については不明である。また，排水溝[4]とした床面の溝，もしくは住居外に延びる溝状遺構がある。住居外へ延びるSB1・11については，溝底面の傾斜が斜面の傾斜に沿っており，排水溝として機能し得るものである。炉跡から壁溝へ延びるSB7・8・10のうち，SB10では斜面山側に2本の溝が延びており，共に壁溝と接する部分の底面が，炉跡に接する底面より高い。壁溝が壁面の板材による補強施設で，通常は埋設されているという前提で考えれば，床面の溝は，炉の防湿などと共に床面の区画[5]という性格も考慮したい。

柱穴内からの土器の出土例としては，SB8—P1があげられる。柱穴の抜き取り跡への土器類の埋置の事例[6]は多いが，本例は底部を欠いているにもかかわらず口縁部を粘土で封じており，下部からも土器片が出土している。日常的な使用以外の，乳幼児の埋甕などが想定されるが，備後・安芸地域で該当する埋葬形態の報告例はない[7]。

SB14については，出土資料が乏しいがSB12と同じ古墳時代前期と考えられる。ただ，SB12と異なり，斜面山側の辺と柱穴間の距離が広く，この辺の壁際に方形，長方形の土壙が付属する。また，方形土壙は壁溝より深く，住居跡内を斜めに延びる溝が連なる。溝はほかの壁溝に比べて深く，底面に不規則な凹凸がある。何らかの作業施設とみられる。

(3) 土器の充満遺構

調査区のほぼ中央部にあたる住居跡などの密集地区に，土壙2（SK1・2），性格不明の遺構1（SX1）の，3基の土器類が充満する遺構がある。

土壙2基は長方形ないしは不整な長方形を呈し，下部のみが遺存していた。SK2では一部に柱穴の攪乱があるが，本来は土器が充満する状況と考えられる。また，SX1では底面まで土器類が充満する包含状態であった。

3基とも覆土に多量の炭化物粒を含み，土器片の密度が高く，大小の礫・礫片が存在していた。また，SX1出土の礫には被熱痕跡が認められるものがある。検出時点では，完形の土器は見られず，接合するものも少ない。

遺構の掘削と継続時期については，SX1，SK1の掘削は後期前葉新段階で，後期中葉から後葉を中心に末葉まで継続されている。SK2については，後期中葉から後葉まで継続した遺構と考えられる。

これらの遺構については，個々の資料の出土状況と接合が，面的，層位的に検証できないため性格の推定も困難であるが，上記の特異な出土状況に特徴を示している。

県内の弥生集落の調査でも，遺構の埋没過程での投棄と考えられる現象の報告は多い。これらは，貯蔵穴[8]や住居[9]の埋没過程の窪地への廃棄物の投入と考えられるもの，同じく住居[10]や溝[11]などへの意図的な土器類の大量投棄[12]と考えられるものに大別される。また大宮遺跡[13]のように小規模な土壙での例も報告されている。この例は，土壙の形態がSK2と類似しており，当遺跡同様，遺構内に多量の遺物を包含している。この種の土器充満遺構については，遺物の包含状況が

遺構の性格と関連をもつ可能性がある。

3基のうち，最も遺構の遺存度のよいSX1では，高杯形土器などの供膳形態の乏しい安芸地域[14]にあって，高杯形土器が全体の1割程を占めている。壺形土器では内傾する複合口縁系のものが半数近い割合を占めている。また，3遺構とも甕形土器が出土土器のほぼ1/4を占め，各器種のバリエーションも多い。赤彩した土器を含み，土製勾玉などの土製品や手づくね土器も出土している。

このようなことから，これらの遺構は集落内祭祀，もしくはそれに使用した道具類の投棄場所の可能性が高いと考えられる。

2 遺物について

(1) 弥生時代後期の土器

広島県地域の弥生土器編年については，『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』[15]で詳しく検討されている。今回の調査では，弥生時代中期後葉から古墳時代前期前葉までの時期幅をもち，備後南部地域などの資料が一定量出土している。このため，県内で当該期の良好な調査例が多い備後南部地域の資料を中心とし，先の編年案を参考にして，後期の土器を整理したい。

今回の調査区から出土した土器類の大半は，弥生時代後期の資料である。以下，後期前葉，後期中葉，後期後葉，後期末葉を，それぞれ後期1～4の4段階に分けて呼称する。また，古墳時代との区分は，布留0式甕など初期の布留式土器群[16]の導入以前と考えられる在地的な土器群までとした。

弥生時代中期後葉

福山市西ケ峠遺跡[17]，長波遺跡SB50[18]，吹越遺跡[19]，石鎚権現遺跡A地点SB4[20]などがあげられる。甕形土器内面のヘラ削り，口縁部の凹線文手法などの発達，高杯形土器の形態などを特徴とする。「備後地域」中期第Ⅳ様式[21](以下，備後Ⅳ様式という）にあたる。

弥生時代後期前葉（後期1）

御領遺跡SK4[22]，福山市石鎚権現遺跡C地点SK18[23]などがある。壺形土器の内面ヘラ削りが顕在化し，甕形土器の口縁端部が直立化に向かう。高杯形土器口縁上面に外方への拡張が見られ，鉢形土器胴部にシャープな稜をもつ独特の器形が顕在化し，他器種にも及ぶ。また，高杯形土器の杯部を切り放した形態の鉢形土器がある。備後Ⅴ－1様式にあたる。

弥生時代後期中葉（後期2）

御領遺跡SB2の一部[24]，尾道市堂垣内遺跡[25]，大宮遺跡SE601[26]，大宮遺跡兼代地区SE1[27]などがある。頸部に幅広の沈線文をもつ長頸の壺形土器，短頸で頸部に斜めの刺突文をもつ広口の壺形土器がある。甕形土器は口縁部の直立化が進む。胴部に強い張りをもつ鉢形土器は，大型品も含め口縁部を直立化する。堂垣内遺跡では口縁部が大きく外反する高杯形土器が出土している。高杯形土器の杯部を切り放した形態の鉢形土器口縁部は，後期Ⅰ段階の高杯形土器の口縁形態を踏襲するものも残り，直立するものなどが主体を占める。概ね備後Ⅴ－2様式にあたる。

弥生時代後期後葉（後期３）

大宮遺跡九反田地区ＳＥ5[28]，御領遺跡ＳＥ1[29]，大宮遺跡ＳＥ9[30]などがある。短頸で広口の壺形土器が中心で，口縁は内傾気味に直立化する。甕形土器は胴部下半に丸みを帯び始め，底部がやや不明瞭となる。鉢形土器胴部の張りに鈍化がみられる。備後Ｖ－３様式の一部があたる。

弥生時代後期末葉（後期４）

大宮遺跡九反田地区ＳＫ63[31]，石鍋権現遺跡群Ｃ地点ＳＢ3[32]，御領遺跡ＳＢ2[33]，大宮遺跡ＳＥ10・11[34]などがある。短頸で広口の壺形土器は，直立する口縁に強い凹線文風の横ナデを施す。甕形土器は体部が長胴化し，直立する口縁部の頸部外反度が減じている。鉢形土器の胴部の張りは失われ，緩いカーブとなり消失へと向かう。新たに，椀系の鉢形土器がみられる。御領遺跡ＳＢ２では，外反する複合口縁が伴うなど，山間部を含めた山陰的な土器の影響が見られる。新段階にあたる資料が乏しく，古墳時代前期前葉の土器群への変化は不明瞭である。備後Ｖ－３様式の一部があたる。

古墳時代前期前葉

大宮遺跡九反田地区ＳＥ6[35]，備後国府推定地ＳＸ604[36]，御領遺跡ＳＤ9[37]などがある。布留０式甕など初期の布留式土器群が導入され，前代までの在地性が失われる。

以上が，備後南部地域における弥生時代後期を中心とした土器の大まかな変遷である。以下，後期はこの区分に沿い，器種ごとの整理を行う。

●高杯形土器

高杯形土器は，杯部の形態でＡ～Ｅ類に分類した。個体数は，杯部に搬入資料の脚部を加えた42点を数え，４割近くをＢ類が占めている。

上端面を外方に拡張する高杯形土器Ａ１類は，搬入資料も含め後期１後半段階にあたる。Ｂ類は，たちあがりが直線的で，外反度は少ない。外反するＣ類以下のものとの間を埋める資料に乏しく，型式的な隔たりがある。

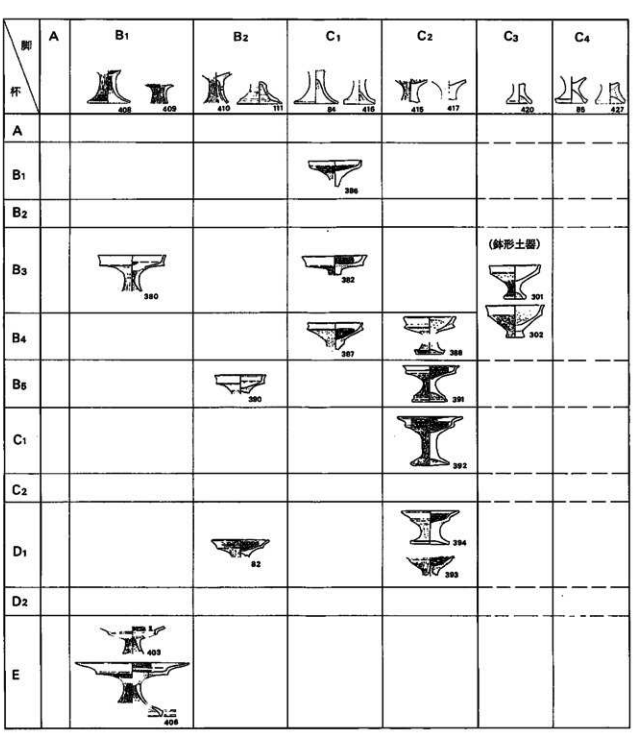
大きく外反するＥ類では，403が胎土，焼成等から搬入資料と考えられる。Ｄ類の一部を含めたＣ類のたちあがり部内面の段の状況などからは，先のＥ類の杯部形態の影響がうかがわれる。

脚部とその接合では，脚柱部が中空の脚Ｂ類と，中実化に向かう脚Ｃ類がある。前者は円盤充填法をとる脚Ｂ１類と，充填部の突出をナデで消去した可能性が高い脚Ｂ２類に分れる。脚Ｃ類では，脚柱部を杯部に接合後，接合部周辺の杯受け部外面に粘土を補充するものと考えられる。また，その補充部分にあたる杯受け部外面に，ヘラ削り痕跡をとどめるものが主体を占めている。この削りは脚Ｂ類をもつ杯部から見られ，杯部と脚部の接合に伴う整形・調整手段と考えられる。また，中実化に伴う脚裾部内面の高さは，392（高杯形土器Ｃ１類），394（同Ｄ１類）など，平底状態へと近付いている。

これら，杯部と脚部の接合状況の判明した資料を，杯部と脚部の分類に位置付けると（第52図），脚部の接合とその変化に，高杯形土器の時間的な推移が読み取れる。このうち，円盤充填法をと

る，高杯形土器B3類とE類の位置付けを考えてみたい。

B3類の杯部は，直線的に立ち上がり，口縁上面の拡張が乏しい。庄原市佐田谷墳丘墓[38]で後期1の前半段階，東広島市浄福寺1号遺跡のSS5・6では安芸V−2様式[39]に，浄福寺2号遺跡II期[40]でB2類に脚部C1類の付く例が，同III期のSB22・35で脚部C1・C2が，同IV期のSB95で脚柱部が中実化したB3類が，それぞれ報告されている。



第52図　杯部と脚・脚台部の分類

これらのことから，当遺跡の高杯形土器Ｂ2，3類の円盤充塡をとるものは，概ね後期1末から2段階に，また，脚柱部の中実化は後期3段階以降の現象として，それぞれ考えられる。

Ｅ類については，後期2段階の堂垣内遺跡で類似する資料が報告されているが，その系譜については明らかとされていない。一方，雄町10類[41]など，中実の脚柱で加飾性に富んだ大小の装飾高杯形土器が中西部瀬戸内に分布し，後期末葉にかけ各地で変化を辿る。県内でも広島市小林遺跡Ｂ地点[42]，寺山遺跡[43]などの報告例がある。このＥ類については，杯部の形態からこの小型の装飾高杯形土器の影響を受けた可能性がある。堂垣内遺跡例[44]との対比から，当遺跡では後期2後半から3前半段階の幅を持たせておきたい。

今回報告中でも新出的と考えられる，太い脚柱に平底状の脚裾をもつ394（高杯形土器Ｄ1類）については，ほかに類似する報告例はない。遺構の性格上，日常的な土器でない可能性もある。形態の崩れ，脚裾部内面の平底化などを考えれば，後期4段階の可能性が高い。Ｃ2類もこの段階である。

このように，高杯形土器の形態変化は，後期1後半段階を上限とし，後期2段階では円盤充塡法をとり，後期3段階ではその中実化が進み，後期4段階で極端な中実化と形態の崩れなどが生じたものと考えられる。更に，後期2後半から3段階のなかで大きく外反するＥ類の系譜が加わり，Ｂ類も含め，外反する型式が主体を占めるようになったものと考えられる。

また，脚部Ａ類の407については，東城町牛川遺跡[45]で同種の出土例がある。形態及び胎土などから備後南部を含めた備中地域の搬入資料と考えられ，後期3段階にあたる。

●壺形土器

壺形土器は，主に口縁部の形態でＡ～Ｆ類に大別した。このうち主体を占める，主に内傾する複合口縁のＦ類は，ＳＸ1では同器種の半数を占める。同種の壺形土器については，安芸Ｖ－1様式[46]，浄福寺2号遺跡後期Ⅱ期[47]などで，後期前葉の新段階から現れるが，その祖形については不明とされている。また，Ｆ1・3類の大半は，同Ｆ4～7類と別系譜である。

Ｆ4～7類は，195などの例外を除き，頸部から外反する端部の上面に，上端部の拡張部を接合しており，拡張部下端の屈曲部が外・下方に突出し，上端面が拡張気味となるものと，くの字状に屈曲し直線的なたちあがりをもつものに大別される。浄福寺2号遺跡の出土状況などから，時期的な差は見られず，先の編年案から後期2～3段階と考えられる。

Ｆ5類の55については，体部の形態から後期前半代に，Ｆ6類は，浄福寺2号遺跡ＳＳ6[48]に比べ口縁部下端の突出に欠けるが，波状文などの施文の特徴から後期4前半段階と考えられる。

Ｆ7類については，内面調整で唯一ヘラ削りを行わないもので，後期末とされる山口県吹越遺跡Ａ地区4号住居跡例[49]と形態，調整等で類似し，後期4段階にあたる。また，同じく内傾するＥ類は，三次市矢谷（やだに）墳丘墓[50]などの出土例から後期4段階と考えたが，共伴資料がなくその位置付け[51]については改めて考えたい。

直立ないしは外反するＤ類では，Ｄ1類が後期3新段階から4段階にあたる，備後南部の搬入資料である。Ｄ3類は，形態及び肩部・口縁部の施文状況などから，後期1段階と考えられるが，

中期後葉段階との系譜は摑めない。

直口系のうち，A4類として分類した130については，類似する例として岡山県宮の前遺跡の亀川上層期例[52]と，浄福寺2号遺跡Ⅲ期のSB35例[53]があげられる。前者が頸部への鍔状の凸帯であるのに対し，後者は広口の口縁下端を粘土帯の貼り付けで形成している。本例についても後者の手法の延長として，共伴関係から後期4段階に位置付けた。

短頸及び広口系では，肩部の張った例が目立ち，口縁部に凹線文を施す個体から，概ね後期2～3段階と考えられる。また，B3類の164は外反する端部の拡張がなく，489ではタタキと考えられる調整痕跡をとどめており，共に後期4段階にあたる。

●甕形土器

甕形土器は，主に口縁部の形態でA～F類に大別した。

このうち，B類とした長胴化した甕形土器では，B1類が本郷町横見廃寺下層[54]など安芸南部地域の終末期資料との対比から後期4段階に，また，B2類の346については，浄福寺2号遺跡SS36例[55]及びP4との対比から後期3段階とする。

総じて口縁部の拡張が少ないC，D類では，D3類を除き頸部の屈曲が緩く，ヘラ削りは屈曲部下端付近まで及び，口縁部に凹線文を施すものが主体となる。D4類の244，245などは，庄原市田尻山(たじりやま)第1号方形台状墓[56]に比べ口縁端部や頸部内面の屈曲に鈍化が見られ，後期1後半から2前半段階と考えられる。ほかは浄福寺遺跡群などの例から，後期3段階を中心とする。またC1類は，口縁端部を拡張せず面をとどめるのみで，後期4段階に属するものである。

口縁部の拡張が顕著なもののうち，E1類については，後期3から4前半段階にかけての，備後南部地域からの搬入資料と考えられる。E2，3類は，E1類の要素を持つもので，備後南部周辺部に類似する例が見られる。西部では本郷町塔の岡遺跡[57]，三原市小丸遺跡[58]など，備後・安芸境にあたる沼田川下流域で，両地域の要素を折衷する土器群の存在が知られている。また，世羅台地南東部にあたる甲山町龍王山2号遺跡[59]，世羅町田龍(だりゅう)遺跡[60]などにおいても同様な現象がうかがえる。神辺・府中平野を中心とした備後南部の土器圏に包括されつつ，地域性をもつ土器圏を形成した可能性がある。E2・3類については，沼田川下流域を中心とした地域との関係を考えておきたい。

この地域で系譜の辿れないもののうち，E4類については，調査例は少ないが芸北地域などの山間部域の可能性がある。また，口縁部の拡張に特徴を持つF1類についても，胴部上半の施文や体部形態など，千代田町出羽(でわ)遺跡[61]をはじめとした県北西部地域の資料に類似点を見出せる。共に後期2～3段階と考えられる。F2類については，山陰的な要素の強い外反する複合口縁である。なかでも285は，的場式[62]にあたる搬入資料と考えられ，牛川遺跡の鼓形器台の共伴関係から考えて，後期3後半から4前半段階の幅でとらえておく。

なお，甕形土器内面のヘラ削りには，シャープなものから，比較的弱いタッチのものまであるが，上半部で時計まわりの削り方向をとるものが大半を占めている。

●鉢形土器

鉢形土器は脚台付鉢系，浅鉢系，深鉢系に大別した。前二者が主体を占め，後者は資料数も少なく分類上も不明瞭な点が多い。

脚台付鉢系では，C類が中心でD類，E類，及び浅鉢系A類がその変化形態と考えられる。これらは高杯形土器B類の口縁形態をもち，多くは脚台部C3類が対応するが，平底化したものもあり時期幅が考えられる。脚・脚台部の形態と，高杯形土器脚柱部の中実・平底化を考えれば，脚台付鉢系C類は後期3段階を中心とするものと考えられる。先行する形態のB類は後期2段階に，新しい形態と考えられる浅鉢系A類などは，後期4段階にそれぞれあてる。

肩部に張りをもつA類については，備後南部では中期後葉段階[63]に，世羅台地南東部にあたる龍王山2号遺跡[64]では後期1段階に出土例が知られる。本例は龍王山2号遺跡例に比べ口縁部などの鈍化が見られ，脚B2類をとっており後期1後半から2前半段階頃と考えられる。

浅鉢系では，B類が後期2後半段階に，F1類が概ね後期3段階にあたる。これらを除く大半は，肩部に張りをもたず，外反する口縁を単純口縁もしくは端部拡張面を無文で終えるものと，拡張面に凹線文を施すものに分れる。前者は後発的な要素であるが，共に後期3段階前後と考えられる。

以上，弥生時代後期の土器の概要を記した。高杯・器台形土器をはじめ，脚台付鉢形土器を含めた土器組成中の供膳形態の多さは，安芸地域にあって特異といえる。それらの形態に少なからぬ影響が読み取れる備後南部地域との関係には，祭祀形態の共通性を土壌とする可能性があり注目される。壺・甕形土器は，安芸南部とりわけ浄福寺遺跡群などの賀茂台地周辺地域の要素を基調とするものと考えられる。壺形土器F類の構成比上の優位は，先の供膳形態と対照的な面を示し，器種による製作伝統の相違ともいうべき現象が見られる。その一方，後期2～4段階にかけて県北西部，北東部，備後南部及びその周辺地域と，山陰系などの搬入資料が存在しており，当遺跡の性格の一端をうかがうことができる。

共伴関係が不明な資料が大半であるため，既存の年代観との対比に終始した面は否めない。高杯形土器に見られる技術的，形態的な変化をどこまで普遍的なものとして捉えられるのか，土器群の在地性の抽出と共に，時期毎の土器組成，各系譜の整理など今後の課題である。

(2) その他の土器

弥生時代中期後葉の資料は，SB8など高杯・壺形土器の一部に，中期後葉でも古相を示す資料を含み，当集落の開始期をうかがうことができる。SB9の高杯形土器は中期後葉でも後出的と考えられ，頸部に凸帯をもつ甕形土器，無頸壺など，中期末葉までの時期幅が考えられる。

古墳時代前期前葉については，例数も少なく，ここでは概略にとどめる。SK3，SB12が布留0式甕[65]段階にあたる。SB11の甕形土器は，単純口縁でいびつな球体を呈するが，ヘラ削りや器面調整の状況は同甕に近く，大宮遺跡九反田地区SE6[66]出土例と同様，在地的な要素をとどめるものとして，ここではその段階に入るものと考えた。

(3) 石器類

石器は，打製石器類14点，磨製石器類11点があり，主に使用石材と所属時期について整理する。

打製石器類

石鏃，楔形石器，同削片，使用痕のある剝片，剝片などとハンマーストーンがあげられる。

出土した遺構はSB7（石鏃），SB11（使用痕のある剝片），SK1（剝片）で，ほかは全てSX1からの出土である。

使用石材のうち，剝片中に太型蛤刃石斧などと似る材質のものが含まれるが，これを除く全てが流紋岩類，珪質凝灰岩，（細粒）凝灰岩系の資料である。いずれも，表面観察では剝離面の状況などが安山岩類に類似する火成岩である。

流紋岩類は，豊栄町周辺にも分布する石材で，その岩質も多様である。材質などが安山岩と似る石材を選択することで，在地的石材での消費を実現したものと思われる。ただ，この地域における中期中葉以前の石材の使用状況が明確でないため，これが地域的なものなのか，または時期的に生じたものなのか明らかではない。

備讃瀬戸地域を中心とした山陽沿岸部の遺跡では，弥生時代の打製石器の使用石材には，安山岩類が多用される傾向が強く[67]，備後南部地域でもその傾向は大きく変わらない[68]。

当遺跡における在地的石材に徹した選択傾向は，これとは対照的な在り方を示している。県北部での同期集落の面的な調査事例には乏しいが，後期にかけての打製石器類の消長と，鉄器への交替のなかで，より効率的な消費を行ったものと考えられる。弥生時代の安山岩類の流通と消費を考える上で興味深い事象である。

磨製石器類

磨製石器類では，石斧，砥石類があげられる。石斧のうち部分磨製石斧は，刃部周辺のみに研磨を加えたもので，細粒閃緑岩を用いている。同種のものとしては，豊栄町中村遺跡の報告例（流紋岩類）など[69]があげられる。これは，使用石材も含め後期旧石器時代のナイフ形石器に伴う局部磨製石斧に類似するが，扁平片刃石斧などの小型磨製石斧の研磨段階が省かれ，機能部分である刃部縁のみに研磨を施したものと考えられ，弥生時代の所産として差し支えないものと思われる。当遺跡での所属時期は，同系の石材を用いた太型蛤刃石斧などの時期と考えられる。

太型蛤刃石斧は，SB8，SB9，SX1から出土している。SB8出土資料は未製品と転用具で，中期後葉前後の可能性が高い。SB9出土資料は破損品と転用具で，中期後葉にあたる。また，SX1は中期後葉から後期4段階までの遺物を含み，時期的には後期1～4段階の幅を持つ。なお，太型蛤刃石斧と同系の石材の剝片類は，SX1及び調査区包含層から若干出土しており，未製品と共に，遺跡内での製作を想起させる。

椋梨川対岸の中村遺跡[70]では，後期と考えられる住居跡から太型蛤刃石斧と部分磨製石斧が出土しているが，土器の遺存状態がよくないため共伴関係は判然としない。また，太型蛤刃石斧な

どの磨製石器製作が確認された大和町古武士遺跡(71)では，中期後葉を中心に，開始期を前期後葉，収束期を後期と考えている。古武士遺跡にみられる磨製石器類の量産と供給が収束を迎える背景として，消費地における製作，製品自体の需要の減少などがあげられる。部分磨製石斧の存在を考えれば，定形化した磨製石器類が，形態的にも崩れる時期とも考えられようが，所属時期については，より確実な調査事例を待って判断したい。

このように打製石器，磨製石器とも，所属時期の明確な資料を欠いている。資料の大半が出土したSX1については，中期後葉の混入があり遺構の継続期間も長いため，ほかの遺物との共伴関係は不明である。そのため，今回調査の範囲ではこれらの石器類の所属時期を，中期後葉から後期の時期幅で捉えておくにとどめる。

(註)

(1) 当センター調査，1998年度報告予定
(2) 豊栄町教育委員会調査，1998年度報告予定
(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚権現遺跡群・西ケ峠遺跡発掘調査報告書』1985年　西ケ峠遺跡SB29など
(4) 津山市教育委員会『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』1981年など
(5) 石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館　1993年
(6) 註(3)に同じ。西ケ峠遺跡SBⅢ—36，SBⅣ—50など
(7) 加藤光臣「芸備地方における弥生墓制の動態（上，中，下）」『芸備地方史研究』162～164，169～170　1987～1989年
(8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅲ』1993年など
(9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ』1992年　SB35など
(10) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　—御領遺跡発掘調査概報—』1984年
(11) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡　—国鉄井原線建設に係る発掘調査報告—』1981年　G地点SD9
(12) 鈴木敏弘編『和光研究Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ　—特集—集落内祭祀の研究（1～3）』1994・96年など
(13) 広島県教育委員会『大宮遺跡第4次発掘調査概報』1981年　C6区SKd071では祭祀関係の遺構と考えられている
(14) 厳密に集計した例はない。大雑把な傾向ではあるが，福山市石鎚権現遺跡群，東広島市浄福寺2号遺跡，広島市神安寺遺跡で，後期全体をとおした壺，甕，鉢，高杯・器台（供膳形態）の比率が，石鎚権現遺跡群ではほぼ1/4等分，浄福寺2号遺跡では甕が約5割，神安寺遺跡では甕が6割近くとなり，後二者での供膳形態は1割を大きく割り込んでいる。財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「器のある風景」『ひろしまの遺跡』第69号　1997年
(15) 正岡睦夫，松本岩雄編『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992年
(16) 寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1986年
(17) 註(3)に同じ
(18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「長波遺跡」『松永バイパス建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告』1984年
(19) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚山古墳群』1981年　吹越第2号古墳墳丘下の弥生土壙墓群
(20) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現遺跡A地点」『石鎚権現遺跡群発掘調査報告　—県営農

地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査一』1981年
(21) 註(15)に同じ。伊藤　実「備後地域」
(22) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅰ　一御領遺跡発掘調査概報一』1981年
(23) 広島県立埋蔵文化財センター『石鍋権現第2号古墳発掘調査報告　一県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告一』1984年
(24) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅳ　一御領遺跡発掘調査概報一』1984年
(25) 広島県教育委員会『堂垣内遺跡発掘調査報告』1977年
(26) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅸ　一大宮遺跡発掘調査概報・御領遺跡発掘調査概報一』1988年
(27) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大宮遺跡発掘調査報告書　兼代地区Ⅰ』1985年
(28) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『大宮遺跡発掘調査報告書　九反田地区Ⅰ・Ⅱ』1985年
(29) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅶ　一迫山第1号古墳発掘調査概報・御領遺跡発掘調査概報一』1986年
(30) 神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅷ　一大宮遺跡発掘調査概報・御領遺跡発掘調査概報一』1987年。なお，当資料については，後期4段階との区分に曖昧な点があり，次回報告で改めて取上げる
(31) 註(28)に同じ
(32) 註(23)に同じ
(33) 註(24)に同じ
(34) 註(30)に同じ
(35) 註(28)に同じ
(36) 広島県立埋蔵文化財センター『備後国府跡　一推定地に係る第6次調査概報一』1988年
(37) 註(11)に同じ
(38) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』1987年
(39) 註(8)に同じ
(40) 註(9)に同じ
(41) 岡山県教育委員会「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告　一山陽新幹線建設に伴う調査一』1972年
(42) 広島市教育委員会『広島市佐伯区五日市町所在　小林遺跡A・B地点発掘調査報告』1990年
(43) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島市安佐南区山本七丁目所在　寺山遺跡発掘調査報告』1997年
(44) 堂垣内遺跡については，後期前半代の神谷川式の内容をよく示す資料と考えられるが，斜面堆積層からの出土であり，2期に区分されると考えられている
(45) 広島県教育委員会「牛川遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』1979年。この遺跡では，註(21)で指摘のあるように，鬼川市Ⅲ段階の器台・高杯形土器と，九重式と考えられる鼓形器台が共伴している
(46) 註(15)に同じ。妹尾周三「安芸地域」
(47) 註(8)に同じ
(48) 註(8)に同じ
(49) 小野忠熙ほか『吹越遺跡予備調査概報』平生町教育委員会　1970年。小野忠熙ほか『吹越遺跡第2次調査概要』山口県平生町教育委員会　1972年
(50) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』1981年
(51) 妹尾周三「いわゆる「山陰系土器」の検討Ⅰ　一矢谷古墳出土土器について一」『研究集録Ⅰ』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1991年
(52) 岡山県教育委員会「宮の前遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』1976年
(53) 註(8)に同じ
(54) 広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査Ⅱ，Ⅲ』1973，1974年
(55) 註(8)に同じ
(56) 広島県教育委員会「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』1978年

(57) 唐口勉三「塔の岡遺跡の出土土器」『広島県の弥生土器』広島県立歴史民俗資料館　1985年
(58) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小丸遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XI』1994年
(59) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山2号遺跡』1997年
(60) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』1997年
(61) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『出羽遺跡』1997年
(62) 近藤　正，前島己基「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌』第57巻4号　日本考古学会　1972年
(63) 註(3)に同じ。報告No.124
(64) 註(59)に同じ。報告No.127
(65) 註(16)に同じ。次山　淳「初期布留式土器群の西方展開」『古代』第103号　早稲田大学考古学研究室　1997年ほか
(66) 註(28)に同じ
(67) 平井典子「石器」『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』建設省岡山河川工事事務所，岡山県教育委員会　1982年など
(68) 県内の弥生集落で打製石器を含めて集計したものは極めて少ない。西ケ峠遺跡（中期後葉・註(3)）では，剝片・砕片類588点を含めた打製石器類686点のうち，非安山岩は3点である。また，前期後葉から中期前葉の大宮遺跡では，打製石器の報告資料53点中，非安山岩は1点である。広島県教育委員会『大宮遺跡第2次発掘調査概報』1979年
(69) 豊栄町教育委員会『中村遺跡B地点・C地点』1994年。なお，次年度報告に掲載予定資料中にも数点認められる
(70) 註(69)に同じ
(71) 川越哲志「芦田川上流の弥生時代磨製石斧製作地　一広島県賀茂郡大和町荻原・古武士遺跡一」『内海文化研究紀要』第17号　広島大学文学部内海文化研究施設　1989年

a　調査区遠景
（北東から）

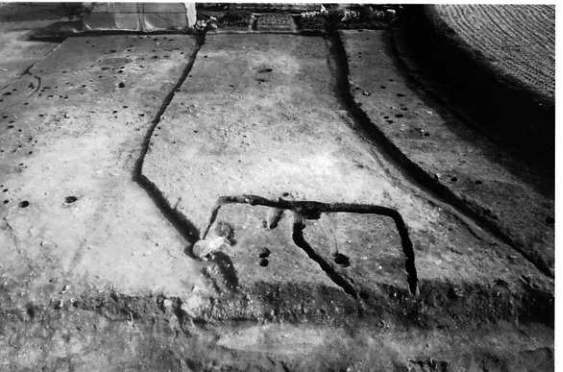
b　調査区近景
（南西から）

c　調査区近景
（北東から）

図版 2

a　1993 年度調査区
航空写真

b　I－15～16 区付近
検出状況（北西から）



c　SB 14 周辺
（北西から）

a　SB1・2完掘状況
（北東から）

b　SB3完掘状況
（西から）

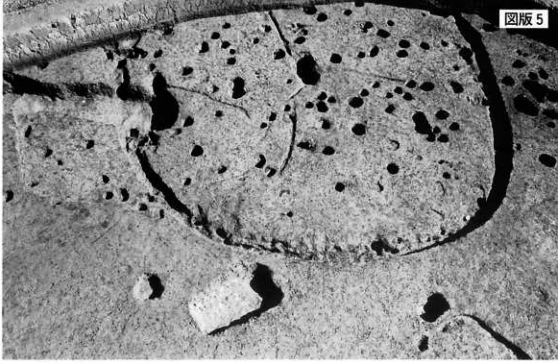
c　SB4・5周辺遺構
配置状況（北東から）

図版 4

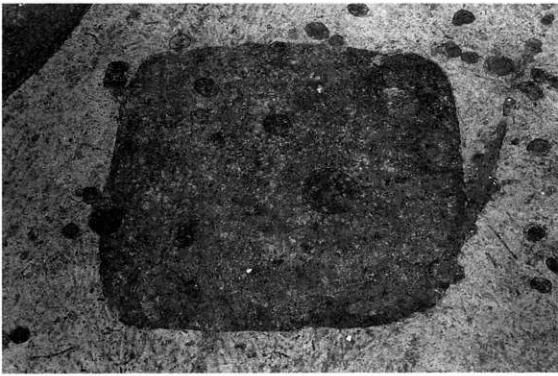
a　SB6～9 周辺遺構
配置状況（西から）

b　同上完掘状況
（西から）

c　SB6 完掘状況
（南西から）



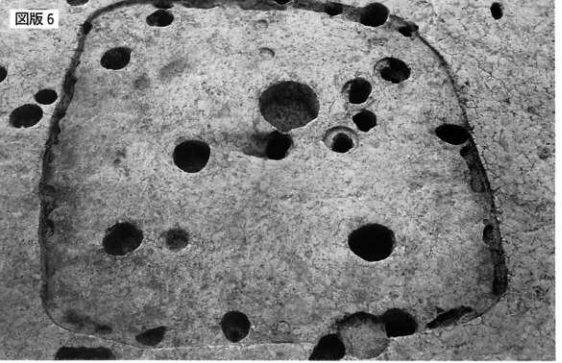
a　SB7・8完掘状況
（南西から）



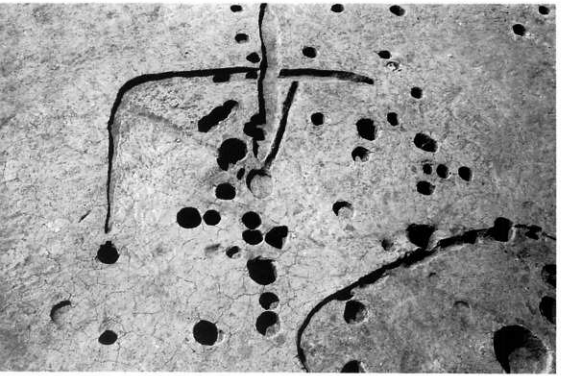
b　SB9検出状況
（北西から）

c　同上掘下げ状況
（南西から）

図版 6

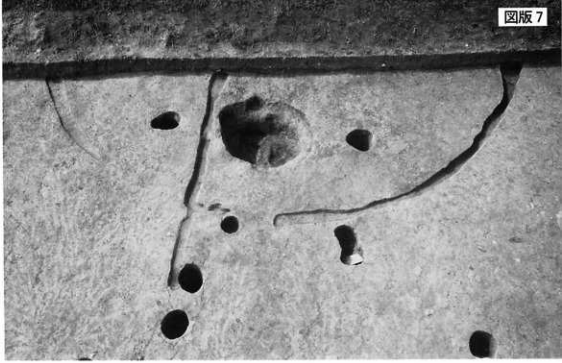


a　SB 9 完掘状況
（北東から）

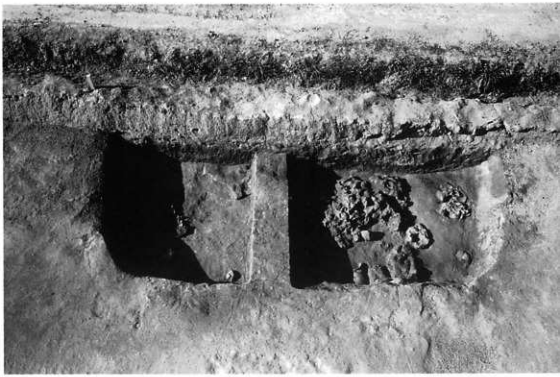


b　SB 10・15 完掘状況
（北東から）

c　SB 11 検出状況
（北東から）



a　SB 11 完掘状況
（北東から）



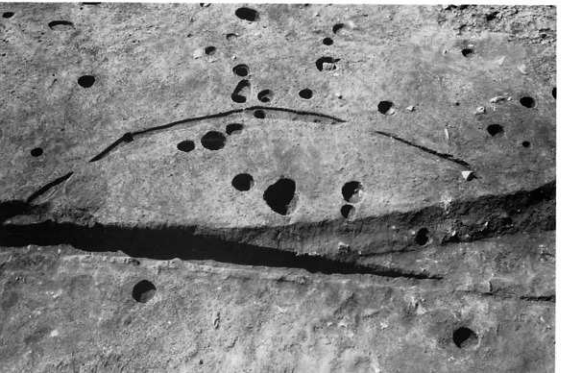
b　SB 12 遺物出土状況
（南東から）

c　同上土層断面
（北東から）

図版 8

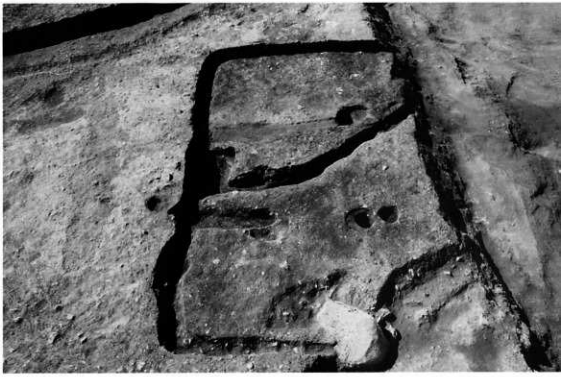
a　SB 12 遺物出土状況
（東南から）

b　同上完掘状況
（東南から）

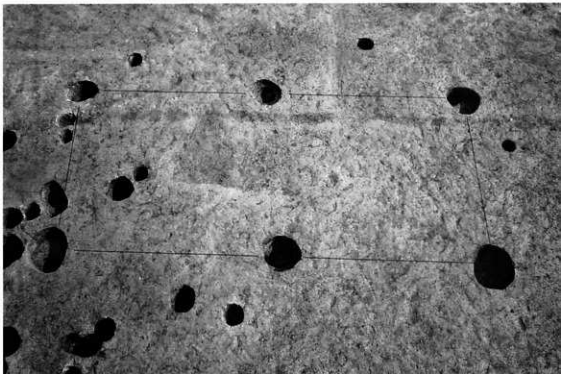


c　SB 13 完掘状況
（北東から）

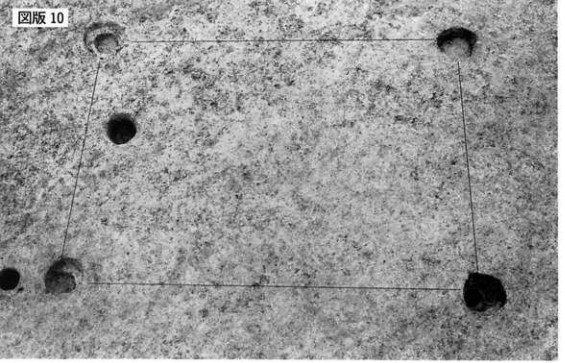
a　SB 14 完掘状況
（北西から）



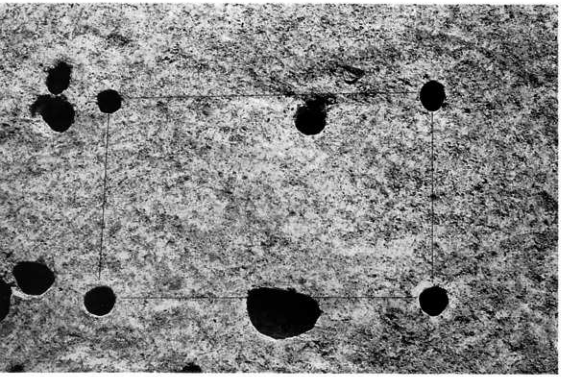
b　同上
（北東から）



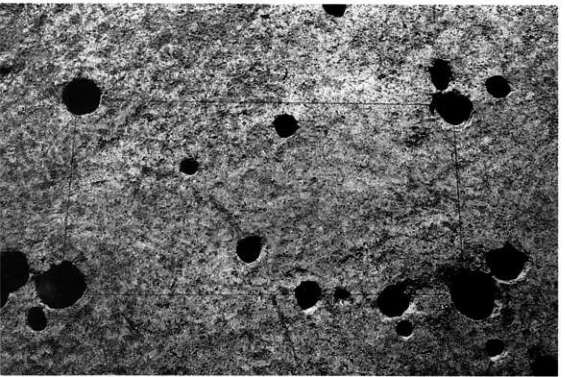
c　SB 16 完掘状況
（南西から）



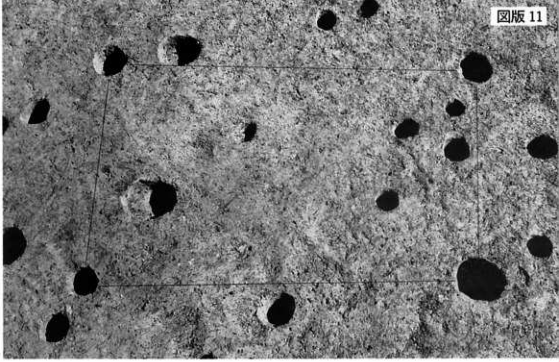
a　SB 17 完掘状況
(北西から)



b　SB 18 完掘状況
(北東から)

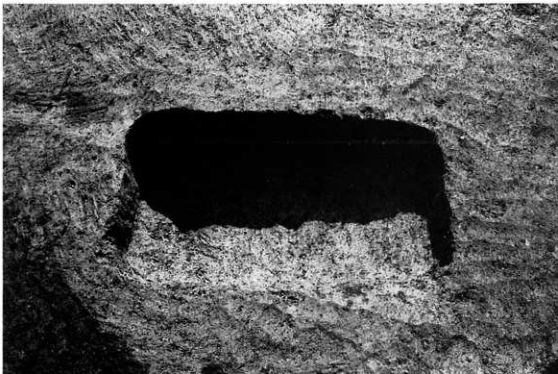


c　SB 19 完掘状況
(北東から)



a　SB 20 完掘状況
（西から）

b　SK 1 遺物出土状況
（南西から）

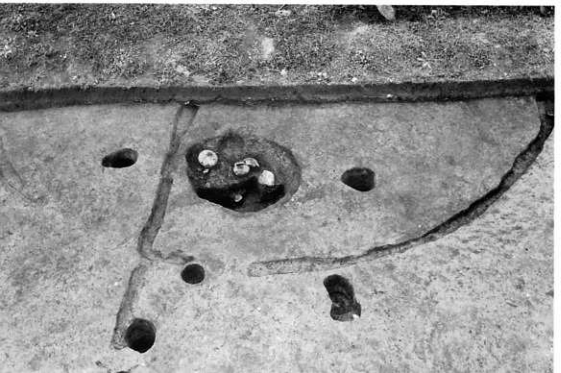


c　同上完掘状況
（北東から）

図版 12

a　SK 2 遺物出土状況
（北西から）

b　同上完掘状況
（北西から）

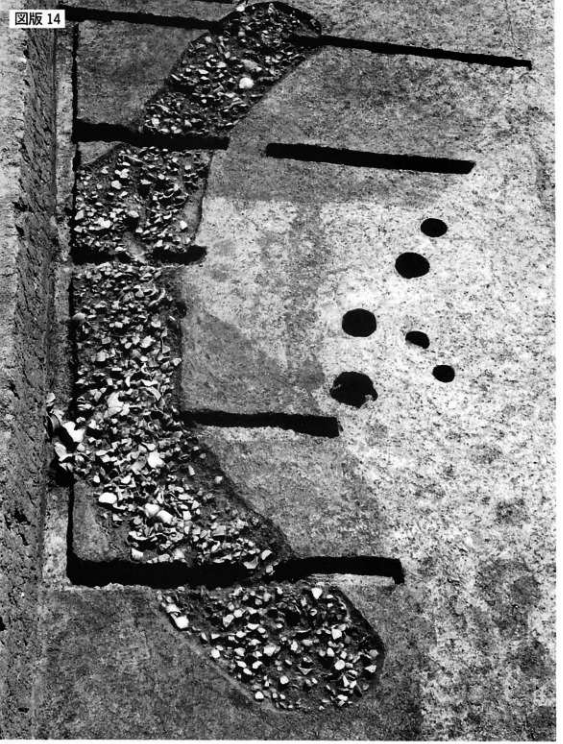


c　SK 3 配置状況
（北東から）

a　SK３検出状況
（北東から）

b　同上遺物出土状況
（北東から）

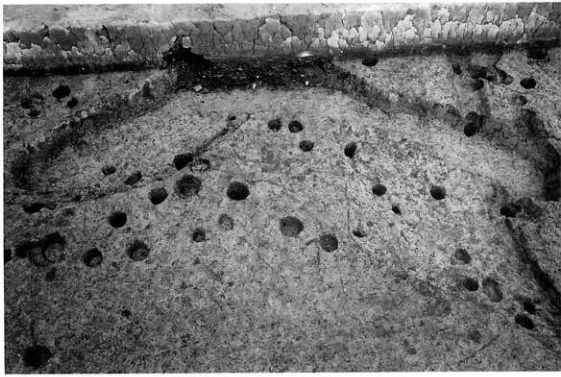
c　同上完掘状況
（北東から）



a　SX１遺物出土状況
（北西から）

b　同上
（南西から）

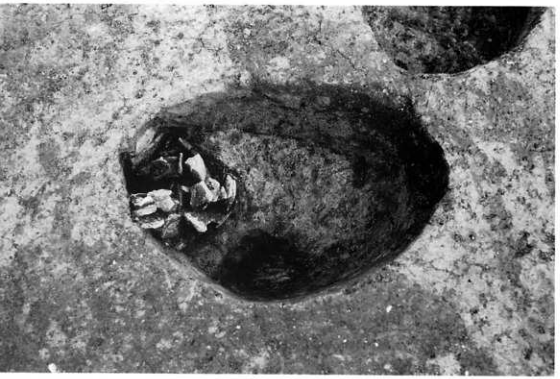
a　SX1 掘下げ状況
（西から）



b　同上完掘状況
（南西から）

c　SB8—P1 遺物
（№15）出土状況

a　SB 11－P 1 遺物
(No. 26) 出土状況



b　P 5 遺物出土状況

c　SB 9 炉跡断面
(北東から)

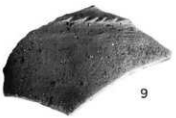
SB7

2

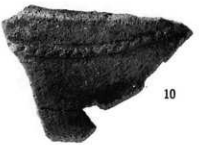
5

SB8

8



9



10

11

13

16

12

15

17

18

19

SB9

24

25

出土遺物1（土器類）

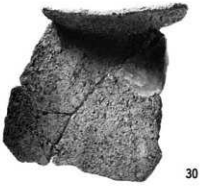
SB 11

26

27

29

SB 12



30

33

37

34

38

32

35

41

43

31

39

40

出土遺物 2（土器類）

出土遺物 3（土器類）

58

65

59

66

67

60

68

61

69

70

62

71

73

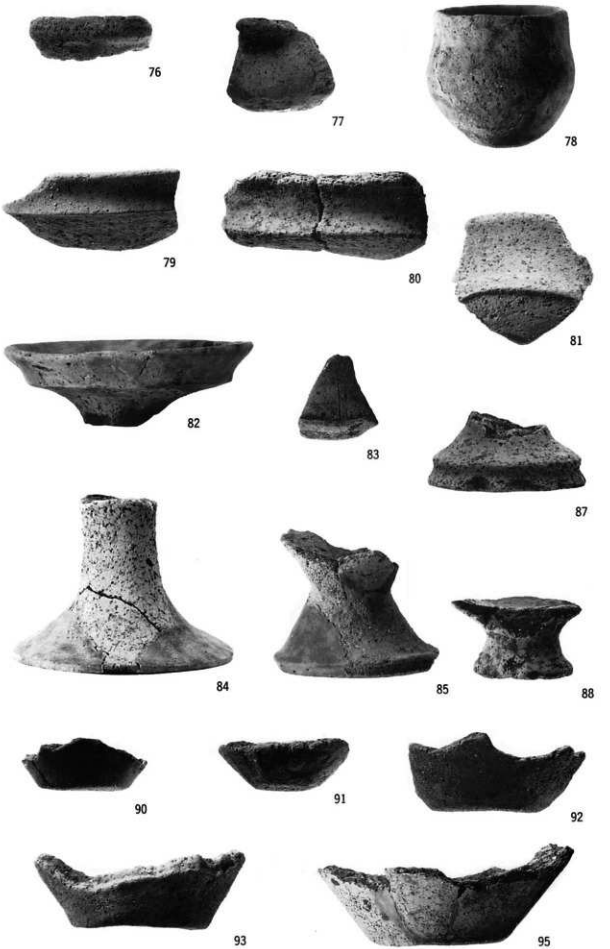
63

64

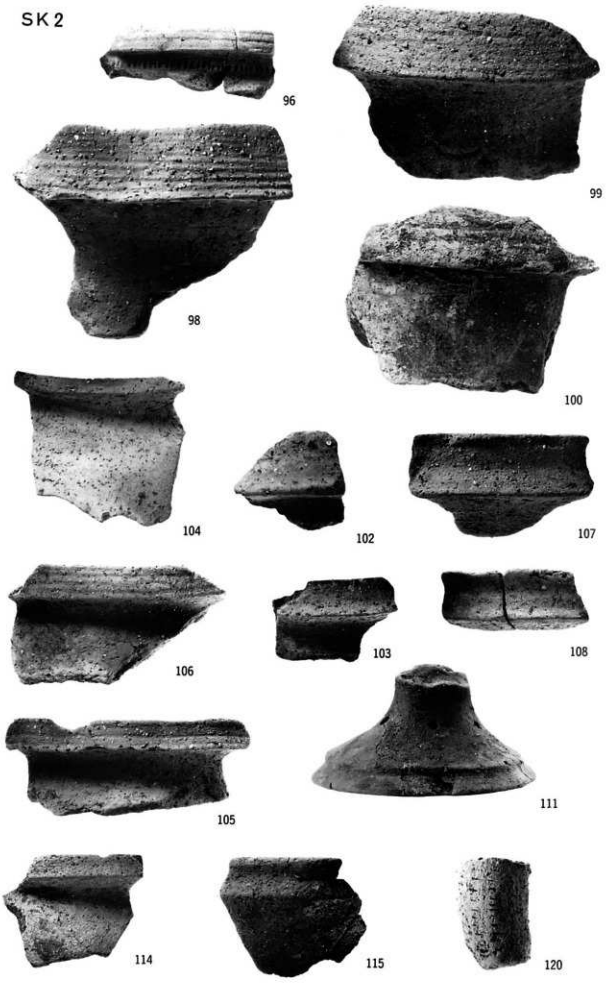
72

74

出土遺物 4（土器類）



出土遺物 5（土器類）



出土遺物 6（土器類）

SK 3

121

126

127

122

128

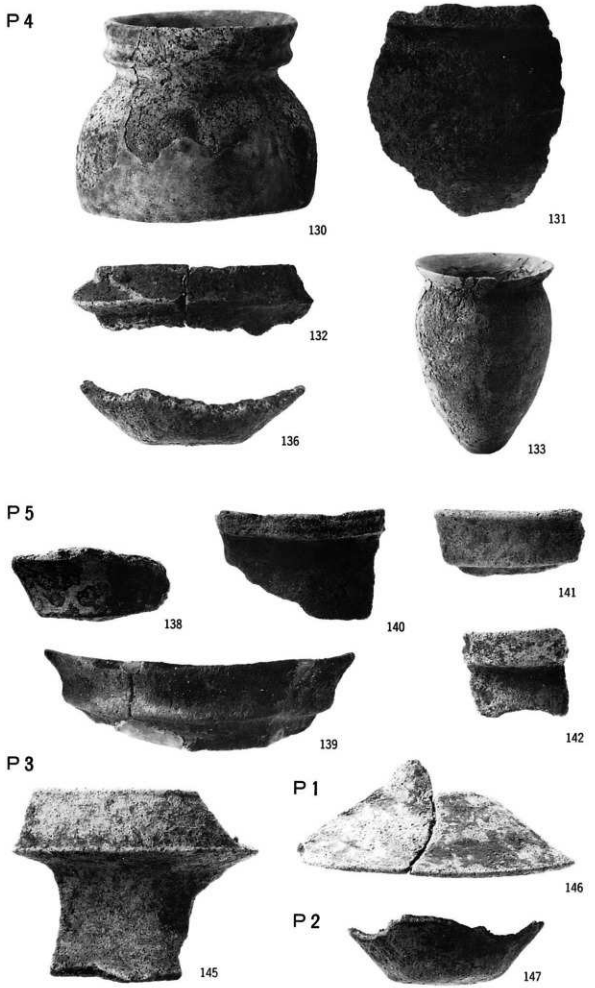
123

129

124

125

出土遺物 7（土器類）



出土遺物 8（土器類）

SX1

148

149

150

151

153

152

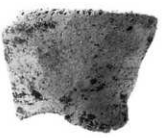
157

158

159

160

161


163

164

166

165

出土遺物 9（土器類）

167

168

169

170

174

171

175

172

176

173

177

出土遺物 10（土器類）

178

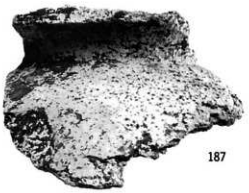
184

185

179

186

180


187

181

188

182

183

189

出土遺物 11（土器類）

190

195

191

197

192

198

199

193

194

196

200

出土遺物 12（土器類）

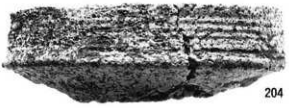
201

206

202

209

203


204

211

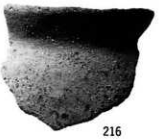
205

207

208

212

出土遺物 13（土器類）


216

223

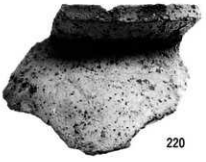
218

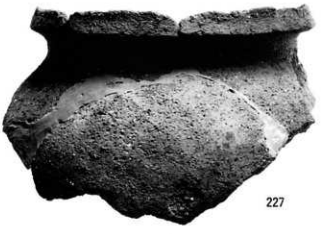
224

219

225

226


220

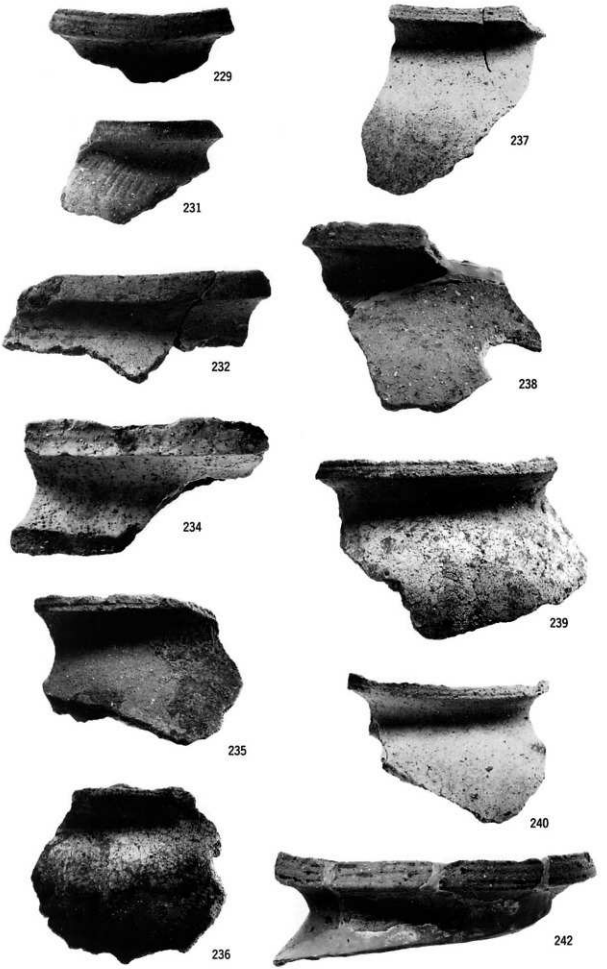

227

221

222

228

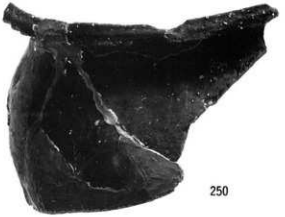
出土遺物 14（土器類）



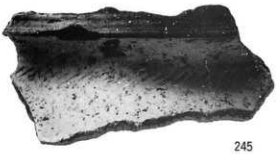
出土遺物 15（土器類）

243

248


250

244


245

251

247

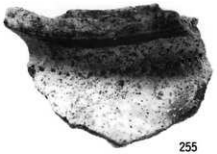
252

253

249

254

出土遺物 16（土器類）


255

260

263

261

266

256

262

267

257

264

265

258

269

259

270

出土遺物 17（土器類）

271

277

278

272

279

273

280

274

281

275

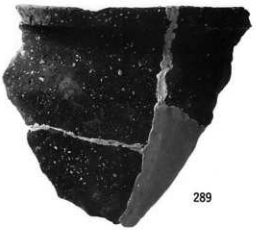
282

276

283

出土遺物 18（土器類）

284


289

285

290

286

292

293

288

294

295

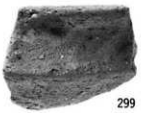
出土遺物 19（土器類）

296

303

298

304


299

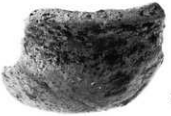
305

300

306

301

307


308

302

309

出土遺物 20（土器類）

310

318

323

311

319

324

313

320

325

316

321

317

322

327

326

328

出土遺物 21（土器類）

329

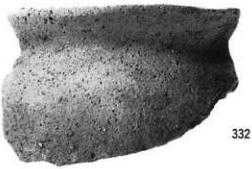
334

330

335

331

336


332

337

333

338

出土遺物 22（土器類）

339

344

340

346

341

347

348

342

349

343

350

出土遺物 23（土器類）

351

357

365

368

352

359

369

353

360

370

354

361

371

355

362

356

364

372

出土遺物 24（土器類）

373

375

374

376

377

383

379

384

380

386

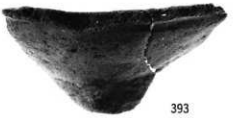
381

382

387

出土遺物 25（土器類）

388


393

389

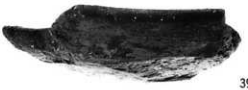
394

390

395

391

396


397

392

398

399

出土遺物 26（土器類）

400

401

403

402

407

406

同裏

出土遺物 27（土器類）

408

414

409

415

410

416

411

417

413

418

出土遺物 28（土器類）

419

427

435

420

428

436

422

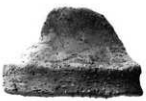
429

437

423

430

439


424

431

440

425

432

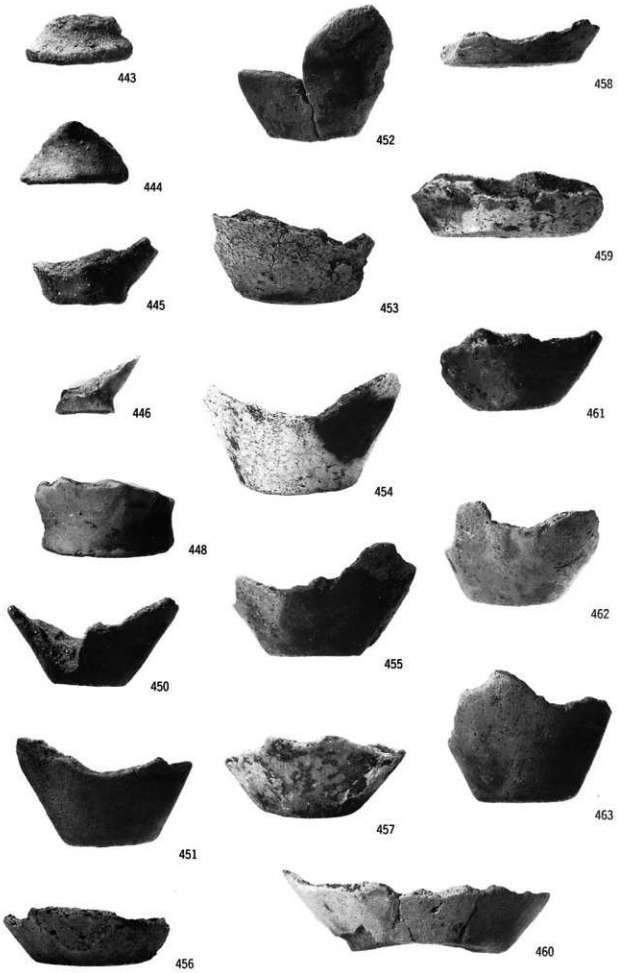
441

426

433

442

出土遺物 29（土器類）


443
444
445
446
448
450
451
456
452
453
454
455
457
458
459
461
462
463
460

出土遺物 30（土器類）

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

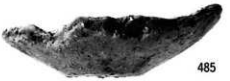
475

476

477

出土遺物 31（土器類）

478


485

486

479

487

480

488

481

包含層

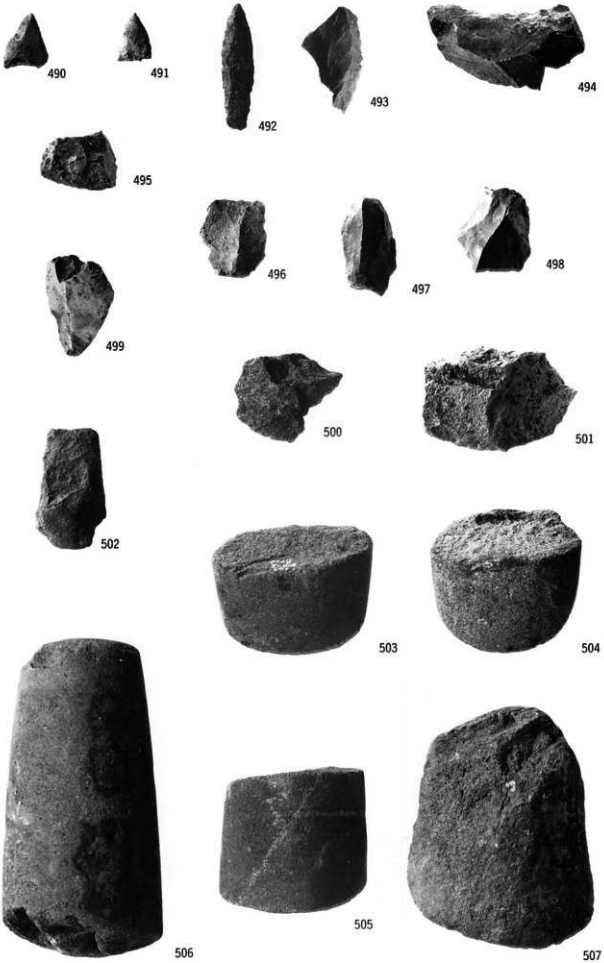
482

489

483

484

出土遺物 32（土器類）


490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507

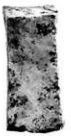
出土遺物 33（石器類）

508

510

509

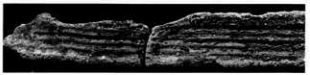
511


512

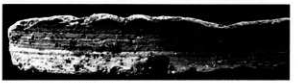
514

513

出土遺物 34（石器類）

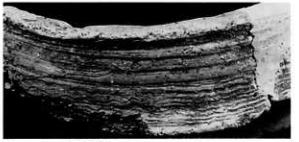


a　278 口縁部施文



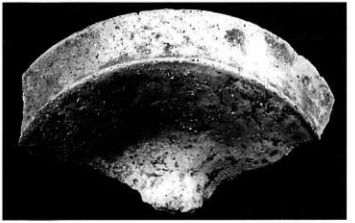
b　340 口縁部施文

c　205 口縁部施文

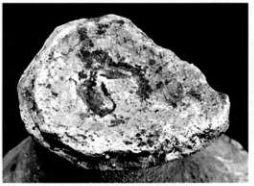


d　201 口縁部施文

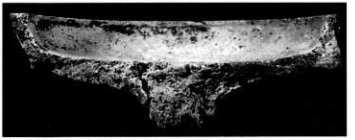
e　403 脚柱部上面の接合痕



i　382 杯部外面



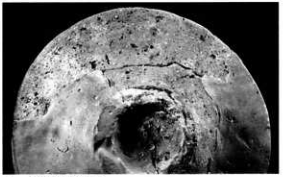
f　408 円板充填と杯部の接合痕



j　382 杯部と脚部の接合痕

g　416 脚部の接合痕

h　427 脚部の接合痕



k　390 杯部外面

出土遺物 35（土器類部分写真）

報告書抄録

ふりがな	なかやいせきBちてんはっくつちょうさほうこくⅠ
書名	中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第162集
編著者名	三枝健二・山澤直樹・河村靖宏
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号　TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中屋遺跡 B地点	広島県賀茂郡 豊栄町大字安宿 892－2ほか	34406	266	34度 33分 29秒	132度 50分 38秒	19930712～ 19931202 19960520～ 19961004	2,000㎡ 2,050㎡	団体営圃場整備事業（中屋地区）に係る発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中屋遺跡B地点	集落跡	弥生 古墳	住居跡　14 掘立柱建物跡　6 土壙　3 性格不明の遺構　1	弥生土器 古式土師器 打製石器 磨製石器	弥生時代後期の性格不明の遺構から多量の弥生土器や土製勾玉が出土

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第162集

中屋遺跡B地点発掘調査報告 I

発行日　1998（平成10）年3月31日

編集・発行　財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082) 295－5751
FAX (082) 291－3951

印刷所　電子印刷株式会社